けれども、唇がワナ〳〵と慄へて、杖槍を握る手と腕がムズ〳〵と鳴り出したのは、どの道、相手が相手だから……といふ武者振ひの類です。

驀進に――但し、跛足を引いて、夕暮の輕井澤の町を怒髮竹の皮の笠を突いて馳せて行くと、

「友様……米友様……」

と助けを呼ぶの聲。意外にも程遠からぬ路傍で起りました。

見れば雲つくばかりの無賴漢。遠目で見てさへも加賀様の御同勢とは見えません。

五

「お、おいらの先生を、ど、どうしようといふんだ？」

米友は先づ振別の荷物を地上へ投げ出しました。

荷物を地上へ置くのと、その手にした杖槍を取り直したのと、どちらが早かつたかわかりません。

その獨流の杖槍――穗のすげてない――は電光の如く、裸松の何れの部分を突いたかわからないが、大の男の裸松が物凄い聲を出して後ろへ引つくり返りました。

「先生、怪我はなかつたか？」

米友は早くも、道庵の背中の上の切石をはね飛ばして、それを介抱をしようとすると、道庵が棍棒のやうに飛び上がりました。

「占めた！　もう占めたもんだ」

飛び上がつて二三度體操をしましたから、それで米友も安心しました。

それはそれで安心したが、安心のならないのは丁度その時分、一旦、後ろへ引つくり返つた裸松が怖るべき勢ひで起き直つて來たからであります。

「野郎！」

米友を一摑みにして引き裂いて食つてしまふ權幕で迫つて來たその形相が人を驚かすに充分です。それは今、米友の一擊を眉と眉の間に受けて、そこから血が流れ出したからです。

「何だ！」

そこで、米友が一足下がつて杖槍を再び取り直しました。

「野郎！」

裸松は野獸の吠るやうな勢ひをして、米友にのしかゝつて來たのを、米友が、

「ちえッ」

といつて、その肩を右から打つと、裸松が再び引つくり返らうとして、危なく踏み止まりましたが、よほど痛かつたと見えて、目をつぶつて暫く堪へてゐるところを、米友が下から頭を突き上げると、裸松が一堪りもなくまた後ろへ引つくり返つて暫くは起きも上がることが出來ません。

これは米友の手練だから、どうも仕方がありません。無法で突くのと、手練で突くのとの相違は

心得さへあれば直にわかる筈。いはんや一撃を食つて見れば、その痛さ加減でも大抵判りさうなものだが、この裸松には判りませんでした。自分が後れを取つたのは、つまり自分が力負けをしたものに過ぎない。不意を襲はれたゝめに、この小童にしてやられたのだ。用心してかゝりさへすれば、何の一捻りといふ氣が先に立つのだから、負けていよ〳〵血迷ふばかりで彼我を見定めるの餘裕があらう筈がありません。でも、この小童の手に持つ獲物の思ひもつけぬ俊敏さに業が煮えたと見えて、三度目に起き直つた時、路傍に有り合はせた松丸太を握つてゐたのは、多分この丸太で小童と諸共に、その目まぐるしい獲物を微塵にカッ飛ばしてやらうとの了簡方と見えます。

この時、兩側の店々では、戸を細目に明けたり、二階の上に立つたりして、街道中の騒動に眼をすましました。眼をすまして見ると、相手は相も變らず裸松だが、一人はホンの子供です。夕暮の町で遠くから見れば、米友の姿は誰にも子供のやうにしか見えないのだから、知らない事とはいひながら、氣の強い子供もあればあつたものと、舌を巻かないものはありません。

裸松が、その松丸太をブン廻してもり返した時に、米友は、また少しばかり後ろへ下がつて、その杖槍を正式に構へて、圓い眼をクル〳〵と廻して、裸松を睨みつけてゐましたが、ブン〳〵廻して來る丸太の鋭鋒が當り難しと見たのか、ぢり〳〵と後ろへ下がるものですから見てゐるものが氣を揉み出すと、ウンと踏み止まつた米友が、齒切れのいゝ調子で、

「やい、裸虫。物になつちやあゐねえぞ」

と嘲笑ふのを聞きました。

この場合、米友に取つての幸ひは、彌次と見物とに論なく、すべてが米友の同情者であつて、裸松が不人氣を一人で背負ひきつてゐる事でありました。

同業者の馬方や駕籠舁でさへが、裸松に味方する者の一人も出て來なかつた事は勿怪の幸ひでした。まかり間違へば、以前甲州街道の鶴川で多數の雲介を相手にしたその二の舞がこゝではじまるべき處を、敵に加勢といふものが更に出て來ないから、米友としては自由自在にあしらひきれるので、それで、この男には似氣なく後ろへ下がりながら、

「やい、裸虫。物になつちやあゐねえぞ」

と嘲笑つたものでせう。

米友の眼から見れば、法も格も心得てゐない奴が、力任せに、血迷つて、無茶苦茶に丸太ん棒を振り廻して來るだけのものだから、打ち落さうとも、突き飛ばさうとも、どうとも思ふまゝに料理が出來る筈。それを知らないから、見物は氣を揉み出したものと見える。

併し、見物に氣を揉ませたのも、さう長い間の事ではない。暫くすると、丸太は地上へ飛んで走り、大の男は三度び地響きを打つて地上へ倒れたまゝ、凄い唸り聲を出して起き上る事が出來ません。

「先生！」

そこで米友が道庵を呼びかけますと、道庵は泰然自若として、前に自分が重しにかけられた切石の上に腰をかけ、片手には最初に問題を引き起した提灯をひろひ上げて、采配を振るやうに振りまはし、

「友様、御苦勞……」

と叫びました。

問題も事件も、それで、すつかり解決がついたのです。道庵は凱旋將軍の態度で意氣揚々として宿屋の方へ引き上げると、みんなが迎へに出て早くも二人を取り圍みました。その有様は、土地の疫病神を退治してくれた勇者をもてなす人氣ですから、二人も安心しました。

事件はこれで、一通り形がつきましたが、この事件から起つた風聞といふものは全輕井澤の町を壓し、早くも善光寺平から坂本の宿外れを走りました。

この小勇者、米友の勇氣に驚嘆する聲が街道に滿つると共に、最初逃げ隱れたお差控へ候補の侍の弱さ加減を嘲るものもあれば、また、身分があれば相手を嫌ふから、あれもまた無理のない態度だと辯護を試むるものもある。また今日、この輕井澤へ泊り合せた客人のうちに、相當腕に覺えの人もあらうのに、檢視に立ち會ふことすらもしなかつたのは情ない——と嘆くもある。喧々囂々たるうちに、誰にも判らないのは道庵先生なるものゝ了簡方です。一體、あの先生は強いのか、弱いのか、どういふ了簡で裸松の喧嘩を買つて出たのだか、その了簡の判つたものが一人もありませんでした。ところが當の道庵先生はいよ〳〵上機嫌で、

「なあに……わしが手を下すまでの事もねえのさ……弟子に任せて置いて、ちよつとあの位のものさ。そりやさうと、怪我をさせつぱなしも可哀相だから、一つその裸松様といふのを見舞つて上げずばなるまい」

といつて道庵は群がる人をかきわけて、倒れてゐる裸松の傍へよつて診察をはじめましたから、皆々いよ〳〵氣の知れない先生だと思ひました。

道庵の介抱によつて裸松も正氣がつきました。けれど身體が利かず、右の腕は打ち折られて用をなさなくなつてゐますから、氣が立つだけで仕返しをするの力は絶對にありません。生命に別條はないが不具にはなるだらうとの診立で却つて土地の人が安心しました。

斯うして裸松は問屋場へ擔ぎ込まれる一方、道庵米友の二人は、多數の人に圍まれて、胴上げをされんばかりの人氣で、玉屋の宿へ送り込まれました。

道庵主從を送り込んだ後も、輕井澤の民衆は容易に玉屋の家の前から立去りません。

玉屋の前は眞つ黑に人がたかつて、さうして口々に、さいぜんの小童の强かつたことの評判です。いづれも自分だけが、委細を見屆けてゐるやうな口ぶりで、身ぶり手眞似までして見せて、つまり、あの小童は棒使ひの名人だといふことにおいては誰も一致するやうです。

だから、あれだけの短い棒で、さほど數も打たず、強くも打たないで、裸松ほどのものを倒してしまつた、おそるべき手練の棒使ひだといふことに誰いふとなく一般の定評となつてしまひました。

次に、道庵先生の評判になるとやつぱりあの先生は氣の知れない先生だといふ說が多く、また一方にはいかさま、その從者であり弟子である小童でさへ、あの位强いのだから、主人であり先生であるあの飲んだくれの强さは測ることが出來ないのだと、眞顏にいふものもありました。

それが、どういふ拍子で間違つたか、あの先生は、あれはつまりお微行の先生だ。あゝして浮世を茶にしてお歩きなさるが、實は昔の水戸黃門樣見たいなお方に違ひないといひ出すものがあると、

「成程……」

すべてが、成程と頷いて、それから道庵に對する待遇が一層重いものになりました。

いつも斯ういふ際における道庵は、轉んでもたゞは起きない結果をつかむ。

道庵は苦もなく水戸の黃門格にまで祭り上げられたが、その從者たる米友は、隱れたるお附添ひの武術の達人……特に子供のうちの鍛練者を擇んでお召連になつたのだらうといふ想像や好奇心で、米友を見たいといふ者、もう一度見直したいといふものが玉屋の家の前に溢れてゐます。

そのうち、誰が發見したか、裏手の方から流言があつて、

「お坊つちやんが、今お湯に入つてゐるところだ」

といふ報告がありました。

「それ行つて見ろ！」

「お坊つちやんがお湯にはいつてゐる」

お坊つちやんとは蓋し宇治山田の米友の事でせう。薄暮にその姿を見たゞけのものは、誰も子供だと思はぬものはない。その主人を黃門格にまで祭り上げた以上は、その從者をも相當の格に扱はなければならない。さりとてお侍ではなし、兄さんと呼ぶのは狎れ過ぎる。本名は聞いてゐず止むを得ず、米友を呼ぶにお坊つちやんの名を以てしたのは、一時の苦しがりでありませう。

さうして、同勢が、目白押しに湯殿の方へ押しかけて、窓や、羽目の隙間にたかつて、先を爭つて、この小勇者の姿を見直しにかゝりました。

「違ばあ、子供ぢやねえ……」

まづ覗いて見たほどのものが風呂桶に浸かつてゐる米友の顏を風呂行燈の光で眺めて、案外の叫びをなしました。

子供でもなければお坊つちやんでもない。まさに老人である。いや老人かと思へば子供である。何とも名狀すべからざる奇怪なる顏貌。丸い目をクル〳〵とさせて、

「覗ちやいけねえよ」

その聲を聞いて、
「あ……」
窓へのし上がつてゐた二三人が崩れ落ちて、
「お化だ……」
といひました。
その時、風呂桶から全身を現して流しに立つた米友、身の丈は四尺、風呂桶の高さといくらも違はない。
「やつぱり子供だよ」
「いゝ身體だなあ……」
とドヨみ渡つて感心したものがありました。その鐵片をたゝきつけたやうな隆々たる筋肉、名工の刻んだ神將の姿をそのまゝ、その引締まつた肉體を見たものは、面貌の醜と身長の短とを忘れてしまひました。
米友が風呂桶から流しへ出て、板へ腰をかけて洗ひはじめた時に、さいぜん道庵先生を桝形の茶屋から迎へてこの宿へ連れ込んだ、あだつぽい女が湯殿へ入つて來て、
「お客樣、お流し申しませう」
といつて、甲斐々々しく裳をかゝげて、米友の後へ廻りました。

「濟まねえな」
米友は是非なく、その女に背中を流して貰つてゐると、外の彌次が、
「お玉さん。しつかりみがいて上げてくんな」
と彌次りました。
「お默りなさい」
その女が叱ると、
「いよう――」
と妙な聲を出し、
「可愛い坊つちやんを、大事にして上げてくんな」
「五月蠅い。あつちへ行つておいで……」
「お玉さん。思ひ入れて磨いておあげ……さうして坊つちやん、今晩はお玉さんの懷に入つて
ゆつくりお休み」
「あつちへ行つておいでつてば――」
「やけます……」
「いよう！　御兩人……」
外で、無暗に騒々しいから米友がムッとしました。

「お客様。お氣にかけなさいますな。みんないゝ人なんですけれど、口だけが悪いんですから」
「馬鹿な奴等だなあ……何が面白くつて外で騒いでやがるんだ」
米友が面を上げて窓の上を睨むと、そこには幾つかの首が鈴なりになつてゐる。
「兄さん――お前は子供なのかい、それともお爺さんなのかい？」
その鈴なりの顔の一つが叫ぶと、續いて他の一つが、
「裏から見れば子供で、表から見ればお爺さんだから、これが本當の爺ちゃん小僧といふんだらう」
「馬鹿にしてやがらあ……」
といつて米友が横を向くと、
「だけれど、強いなあ。お前さんは強い人だなあ――なりは小さいけれど、身體が締つてらあ――」
と讃美の聲を上げるものもありました。米友は、もう横を向いたきりで取り合はないでゐると、女がいきなり立つて行つて、
「たゞでは見せて上げないよ」
といつて、高いところの窓をハタと締切つてしまひました。
「そりや、あんまり胴慾な……」

「お玉さん。お湯の中で水入らずに、しつかりみがいてお上げよ」
窓を締られた彌次は暗いところでなほ騒々しい。
その時、米友は立ち上がつて、
「もういゝよ。おいらは湯から上がつちまはあ」
彌次の五月蠅いのに堪へられなくなつたのでせう。ぶり〳〵しながら立つて風呂へ入り、首だけを出し、思はず女の姿を眺めてゐたが、急に、
「あ……お玉！」
といつて舌をまきました。
米友が渾身から驚いたのは、この女の面影がお玉に似てゐたからです。名をさへそのまゝでお玉といふのは……いふまでもなく間の山以來のお君の前名でありました。その米友の異様な呼び聲を聞いた女は、こちらを向いて、嫣乎と笑ひ、
「あら、もう、わたしの名を覺えて下すつたの。嬉しいわ」
「お前の名はお玉さんていふんだらう」
「えゝ……玉屋のお玉ですから覺えいゝでせう。忘れないで頂戴な」
「あ……」
米友は吾を忘れて感動しました。その時、外で彌次馬が、

「お安くねえぞ御兩人……」
その聲を聞くと米友が眞つ赤になつて地團駄を踏みました。
それ以來、有ゆる年頃の女がお君に見えて堪らない。幼ければ幼い時の面影に、年ばえは年ばえのやうに、婆は婆のやうに、宇治山田の米友には、夢寐にもその面影を忘るゝことが出來ないであるたのに、こゝへ來て、初めて正眞のお玉を見ることが出來た、名さへそのまゝではないか……これがお玉でなくて誰だ。
米友は口が利けないほどに感動したけれど、それが本當にお君に似てゐるかゐないかは問題です。可憐なる米友は、その晩一晩中このお玉の姿に憧れてしまひました。給仕に來たのもこの女、床を延べに來たのもこの女。
「お玉さん……お前はな――」
といつたきり米友には口が利けませんでした。
「ホ、ホ、ホ、御用があつたら、何時でもお呼び下さいな。この向ふの突き當りの部屋に休んでゐますから、夜中でも構ひませんよ」
と女は愛相よくいひましたが、不幸にして米友には、それ以上に挨拶をすることが出來ませんでした。
そこで、その夜もすがら米友が煩悶を續けました。

道中の旅籠屋の飯盛女――昔はこれを「くゞつ」といひ、今は飯盛、或は宿場女郎といふ。東海道筋でいつて見ると、五十三驛のうち官許の遊女屋のあるのは駿河の彌勒町だけで、あとは品川でも熱田でも要するに飯盛女――驛といふ驛に大小美醜の差別こそあれ、この種類の女の無いといふところは無い。これを美化すれば大磯の虎ともなり、詩化すれば關の小萬ともなる。東海道名所圖會の第五巻に記して曰く、
驛路の遊君は斑女、照手の末流にして今も夕陽なゝめなる頃、泊り作らんとて兩肌抜いで大化粧。美艶香には小町紅、松金油の匂ひ濃やかにして髪はつくもがみのむさ〳〵とたばね、顏は糸瓜の皮のあら〳〵しく、旅客をとめては……
云々と筆を弄してゐるが、名所圖會といふ名所圖會にはこの驛路の遊君を不美人に描いたのは一つもない。こゝの玉屋のお玉さんが死んだお君に似てゐたかゐないかは疑問ですけれども、玉屋の看板を背負つて立つだけに、この驛では指折りのあだつぽい女であつたことは疑ひが無いらしい。
水性のお玉さんは誰にも愛嬌を見せるやうに、米友にも最初から愛嬌を見せてゐました。といふよりは勇者としての米友を取持つ役を殆んどお玉さん一人が取しきつてやつてゐたやうなものですから、一緒に寢ようといへば寢もするし、夜もすがら語り明かさうといへば語り明かしもするし、どうでも米友の註文通りになつた筈なのです。

この道中で、ある時、道庵が斯ういつて米友を慰めたことがあります。

「友様……人間には魂と肉體といふものがあつて、肉體は魂について廻るものだ。肉體は死んでも魂といふものは殘る。早い話が、家でいへば肉體はこの材木と壁のやうなものだ。譬へばこの家は燒けてしまつても、崩れてしまつても、家を建てたいといふ心さへあれば材木や壁は何時でも集まつて來るぞ。で、前と同じ形の同じ住み心の家を幾度でも建てる事が出來るぞ……いゝか、その心が魂なんだ、だから人間に魂が殘れば、死んでもいつかまた元通りの人間が出來上つて來る。だから何も悲しむがものはねえ……お前の尋ねる人も魂が殘つてゐるから、いつかまたこの世へ生れて來るんだ。しつかりしろ」

道庵先生は事實さう信じてゐるのだか、米友が餘りの生一本の鬱ぎ方を慰めるつもりの氣休めだか知らないが、兎に角、斯ういふ靈魂不滅説を説いて聞かせたことがあります。

米友は、今も、それを、まともに思ひ出してゐるのです。斯ういふ男の常として一を信ずれば十まで信ぜずにはをられません。

それとは知らず道庵先生は、宵からグッスリと寢込んでしまつて、翌朝、例刻には眼を醒したけれども、昨日の疲れもあるし、第一、水をかけられた著物からして乾かさねばならないから、モウ一日一晩、輕井澤に逗留することになりました。

ところが、朝飯が濟むと、もうノコ〳〵と問屋場へ出かけて來て、裸松の診察に取りかゝりましたものですから、宿の者が、いよ〳〵氣の知れない先生だと思ひました。

それにも拘らず、先生は、裸松の病床で頻に診察を試みながら、居合す宿役人等をつかまへて氣焔を上げてゐるのは、宿醉未だ醒めざるの證據であります。

一方、宿に殘された宇治山田の米友は、一旦は起きたけれども、やがて荷物を枕に身をかゞめて横になつてしまひました。多分、昨夜の夜もすがらの煩悶が、心を物倦くしたものでせう。この男は大抵の場合には夜具蒲團を用ひないで寢られる習慣を持つてゐる。時として、折角の夜具蒲團をはねのけて横になつたところを寢床とするの習慣を持つてゐる。

今もまた斯うして疊の上へゴロリと横になつてゐると、夜來の疲れが多少廻つて來たものと見えて、いつかうと〳〵と夢路に迷ひ入りました。

その時の夢に、米友は故郷の間の山を見ました。自分の身が久々で故郷の宇治山田から間の山を廻つてゐるのを認めました。

久しぶりで、もう歸れない筈と思つてゐた故郷の土を踏んで見ても、その土が溫かではありません。相も變らず間の山は賑かですけれども、その賑かさが少しも自分の身に應へて來ないのを不思議と思ひました。周圍は花やかなのに空氣が冷たく自分の身に觸れるのを米友はぢれて見ました。

故郷の地ではあるのに——斯うも冷たい空氣が流れて、通るほどの人がみんなつれない色を見せ

る。流石の米友も誰を呼びかけて何をいはうとの心も失せ、參宮道の眞ん中の榎の大樹の下に立つと何かいひ知れず悲しくなつて、その大樹に身を寄せて面を蔽ふてゐるうちに、いつしか、しく〳〵と泣いてゐる自分を發見しました。

「君ちやんがゐねえ……ムク、ムクの野郎もゐねえ……ムクやい、ムクはゐねえのかよう」

と米友は聲立てゝ呼んだけれども、手拭を後ろに流し、黄八丈の著物に三味線を抱へたお君の姿も出て來ない。そのあとに影身のやうに付き添ふたムクも現れては來ない。間の山の盛り場では提灯簪の火が空を焦がして、鳴り物の響きが、昔ながらに盛んに響いて來るのに、自分の見たいと思ふ人と聞きたいと思ふ聲だけは一つも現れて來ない、そこで米友は、

「ムク……おいらは今、間の山に來てゐるんだぜ。誰も迎へに出て來ねえのかい？」

米友は天を仰いで號泣しやうとすると、その大榎の樹の枝に、一團の青い火が、上らうとして上らず、下らうとして下らないでゐるのを認めました。

「あれが魂といふものだな」

米友は身を躍らして、その青い一團の光を捉へようとする途端に、大風が吹いて來て、その光を大空へ吹き上げたから、ハッとして眼を醒すと、自分の轉寢をしてゐた身體の上へ、誰かふわりと搔い卷を著せてくれた人がありました。

「風邪を引きますよ」

障子のところに立つてゐる女の姿を見ると、米友はムックリと起き直つて、

「お玉さん！」

「ホ、ホ、ホ、どうもお氣の毒樣。つい、お邪魔をして濟みませんでした」

「玉ちやん、いゝからお入り」

「はい」

「こゝへお入り、話があるから」

米友は、ほとんど猛然として起き上がつて來て、お玉の袖を取りました。

「こわい人――この人は――」

お玉は笑ひながら米友に引かるゝまゝに、袖を引かれて來ました。

六

女輕業の親方のお角さんは、お氣に入りのお梅ちやんを連れて、淺草の觀音樣へ參詣の戻り道です。

「梅ちやん、何ぞお望み。今日は何でも好きなものを買つて上げるから……」

「お母さん、千代紙を買つて下さいな」

「千代紙――？　ほんとにお前も子供だねえ」

お梅の子供らしい望みを笑ひながら、お角は雷門跡から廣小路へ出ました。

お角も、この頃は痛し痒しの體で、興行は大當りに當つたが、お銀様といふものに逃げられたのが癪で、金助をとつちめて見たところが初まらない。

兎も角、切支丹奇術大一座の興行を、一世一代として見れば、この邊で水商賣の足を洗ひたくもあつたのでせうが、どうも世間といふものは、さう綺麗薩張りとくぎりをつける譯には行かないと見え、お角に興行界を引退の意志があると見て、やれ馬喰町に宿屋の賣物があるから引受けて見ないかの、地面家作の格好なのがあるから買はないかの、上方料理の變つた店を出して見る氣はないかの、甚だしいのは、兩國の興行をそつくり西洋へ持ち出して見る氣はないかのと、八方から話を持ち込んで來るので、お角も五月蠅くなりました。

どの道、婆ッ氣が多く生れついてるんだから仕方がない——尼さんにでもなつてしまはない限り、水を向けられるやうに出來てるんだと、お角も諦めはしたが、さう〳〵は身體が續かないよといつて、この機會にお梅を連て伊豆の熱海の溫泉へ湯治と洒落込むことに了簡を定めたのです。

湯治に行く前にお禮參りを兼ねて今日は觀音様へ參詣して御籤まで頂いて來たのですが、もう一つお角の腹では今度の一世一代が大當りの記念として、淺草の觀音様へ何か一つ納め物をしようとの考へがあつて、額にしようか、或はまた魚河岸の向ふを張つた大提灯でも納めようか、さうてなければ、屋の棟に屆くほどの金の草鞋を仁王様の前へ吊して見やうかのと、お堂を廻りながら、さういふ趣向に頭を凝らしに來たのです。

お角の頭はまだその趣向であれかこれかと惱まされ、往來の事なんぞは頓着なしに歩いて行く。

ある店の前でお梅がぴたりと立ち留まつて、

「まあ、いゝわね」

歎嘆の聲を洩らしましたので、お角もそれにつれて足を止めました。

見れば、お梅は羽子板屋の前に立つてゐる。

まだ歳の市といふ時節でもないのに、この店では、もう盛んに羽子板を陳列してゐる。江戸ッ子のうちでも途方もなく氣の早いせゐでせう。それで、この十月までの各座の狂言の主な似顔がみんなこゝへ寄せ集められてゐる。さてこそ、お梅は立ち去れないので、

「まあ、いゝわね」

を譫言の樣にいつてゐると、

「梅ちやん、どれがいゝの？」

お角から尋ねられたのを上の空で、

「どれもこれもみんないゝわ」

「一番いゝのをお取り」

「いゝえ、わたし、千代紙で澤山なのよ」
「この蝙山姥がいゝだらう」
「まあ……」
お梅は仰天してしまひました。その五彩絢爛たる八重錦の羽子板の山の中で、一番優れて、一番大きい蝙山姥、まさか買つて下さいともいへないが、買つて下さる筈もないとお梅が仰天してゐる間に、お角は番頭に交渉し、さつさとその大一番の蝙山姥を買ひ取つて、お梅に持たせたからお梅が人事ではないと思ひました。
お角は相變らず奉納の趣向を考へ、お梅は有頂天になつて駒形通りへ出ました。
お角が駒形堂の前へ來ると、丁度その船づきへ小舟が著いたところで、幾多の人がゾロ〳〵と河岸へ上りました。
その中に、お角の眼をひいたのは、圖抜けて大きな人が、西洋の蝙蝠傘をさして上つて來たことで、蝙蝠傘の流行は、今ではさして珍しいことではないが、まあ、どちらかといへば非常なハイカラな新らし好みの人に多かつたのを、これは實にバンカラな人が、その流行ものゝ傘をさしてのこ〳〵と出て來たから、それで一層お角の目を惹いたのでせう。お角許りではない。誰でも皆んな、そちらを眺めました。
この大男は誰あらう、足利の繪師、田山白雲でありました。然も、これは房州戻り匆々の、江戸

の土を踏んだ初めての見參なのですが、さすがの白雲も藝術家並に頭の古いといはれるの、嫌がつて、それでハイカラの傘を仕込んで來たと見るのは僻目で、これは洲の崎の駒井の許を立つ時に貰つて來たのでせう。それもハイカラの積りで貰つて來たのではなく、日のさす時は日除になり、風の吹く時は風除になり、雨の降る時は無論、結構な雨具に相違ない。その上折疊が自由に利くから、實用無類の意味で駒井の物置きから探し當てたものとも思はれます。
兎に角、斯うして蝙蝠傘をさして、ゆらりと江戸の淺草の駒形堂の前の土を踏んだ白雲の格好は可なりの見物でありました。それは頭の上だけは例の大ハイカラの蝙蝠傘で新らし味を見せてゐるが、頭から下は以前と一向變つたところがありません。六尺豐かの體格に恐ろしく長い大小をたへて、旅の荷物を兩掛にして、草鞋脚袢嚴めしく、小山の搖ぎ出たやうに歩き出して來たものですから、新らしい人だか古い人だか、ちよつと見當がつかなくなりました。
併し、當人は一向氣取つた容子もなく、のこ〳〵と歩いて、軈てお角とすれ〳〵の所まで來ましてて、さて、之から、江戸の何れの方面に向つて歩みを移さうかと、一寸思案の體に見えました。
「モシ、あの、一寸失禮でございますが……」
と、その異樣な人物に、先づ物をいひかけたのはお角でありました。
「あ、何ですか?」
と蝙蝠傘の主は、慌だしく下界を見下すやうに身をかゞめて返事をしますと、

『つかぬことを承るやうでございますが、あなた樣は房州の方からお出でになりましたのですか？』

「あ、房州から來ましたよ」

白雲は、この女の姿を見下して、それがよく判つたなと云はぬばかりの顏色です。

「房州は洲の崎からお出でになりましたのでせう」

「えゝ、洲の崎から來ましたが、それが、どうして判ります」

白雲は自分の蝙蝠傘にそれが記してあるのではないかとさへ疑ひましたが、黑張の傘に無論そんな文字はありません。

「あの洲の崎は駒井能登守樣のお仕事場からお出でになりましたね」

「ど、どうして、その事まで、お前さんに判りますな？」

「ホ、ホ、ホ……」

とお角が笑ひました。田山白雲は、聊かどぎまぎして、

「お前さんは千里眼かい？」

「否え、あなた樣の差しておゐでになるお脇差が、ついこの間、駒井の殿樣のお差料と同じ品でございますものですから……」

「成程これが……」

といつて田山白雲は左の片手で差してゐる脇差を撫で廻し、

「細かいところへ眼が著いたものだなあ。こりや駒井氏から貰つた品に相違ござらぬ。繪を描いてやつたそのお禮に駒井がこの脇差を拙者に與れました……拙者ですか、拙者は足利の繪師田山白雲といふものです」

間もなくお角は田山白雲を柳橋北の川長へ連れて行つて御馳走をしました。

お梅はそこで別れて、いゝ加減の時分に迎へに來るといつて宅へ歸りました。

白雲は少しも辭退せずに、お角の饗應を受けて、よく飲み、よく食ひ、よく語りました。

房州で駒井甚三郎の厄介になつてゐたことを逐一物語ると、お角も自分が上總へ出掛けて行つた途中の難船から、駒井の殿樣の手で救はれたこと、その以前の甲州街道の小佛の關所の事までも遡つて、話がぴたり〳〵と合ふものですから、お角も喜んでしまつて、

「ねえ、先生。今日は觀音樣のお引合せで大變よい方にお目にかゝれて、こんな嬉しいことはございませんよ」

「拙者も御同樣、御同樣……」

「先生、これを御緣に、わたくしは一つお願ひがございますのよ」

「何んです、そのお願ひといふのは？」

「先生、わたしに一つ繪を描いて頂きたいのですよ」
「繪描きに繪を描けといふのは、水汲に水を汲めといふのと同じことです。何なりと御意に從つて描きませう」
「ねえ、先生。額を一つ描いて頂けますまいか？」
「額――宜しい。神社佛閣へ奉納する額面ですか。それとも家の長押へでも掛けて置かうといふのですか」
「先生、一つ念入りにお願ひしたいんですが、一世一代の積りで――」
「一世一代？成程」
「實は、先生。わたしは今日もそれを檢分旁々御參詣に參つたのですが、あの淺草の觀音樣へ納め物をしたいと疾から心掛けてゐたんでございますよ……さうして何にしたら好からうか、先程まで色々考へてゐたのですが、先生のお話を伺つてゐるうちに、悉皆心が定まつてしまひました」
「成程」
「觀音樣のお引合せのやうなものですから、是非先生にお願ひして、器量一杯の額を描いて頂いて、それを觀音樣へ納めようと斯う心を決めて了ひました。先生もうお厭と仰有つても承知しませんよ」
「成程、成程。さういふ譯なら、拙者も一番器量一杯といふのをやつて見ませう？……そこで註文はつまり、その額面には何を描いて上げたらいゝのかね？」
「先生、納める以上は今迄のものに負けないのを納めたいと思ひます」
「左樣――彼處にはあれで古法眼もゐれば永德もゐる。容齋、嵩谷、雪旦、文晁、國芳あたりまでが轡を並べてゐるといふ譯だから、その間に挾まつて勝るとも劣る處なき名乘を揚げようといふのは骨だ」
「だつて、先生。出來ないといふことはありますまい」
「拙者には少々荷が勝ち過ぎてゐるかも知れないが、拙者も同じ人間で繪筆を握つてゐる以上は出來ないとはいはない」
「あゝ嬉しい。その意氣なら先生、大丈夫よ」
「ところで、畫題は……何を描いて納めたいのだね。その圖柄によつて工夫もあるといふものだ」
「先生、わたしの望みは少し變つてゐますのよ」
「うむ」
「わたしは、一つ、是非、切支丹の繪を描いて頂いて納めたいと思つてゐるのでございます」
「え、切支丹だつて？」
「わたしの一世一代が、切支丹奇術の大一座といふので當つたんですから、それを緣として……」

「いけない」
と白雲が膠なくいひました。
白雲から素氣なくいはれて、お角は急に興醒め顔になり、
「何故不可ないんでせう」
「切支丹の額を觀音様へ上げるといふ法があるか」
「切支丹の額を觀音様へ上げてはいけないのですか」
「それは不可ない」
「如何して不可ないのです」
白雲が太い線でグン〳〵なすつて了ふものだから、負けない氣のお角が默つてはゐられないのです。
「如何していけないだつて、第一觀音様と切支丹は宗旨が違ふ」
「いゝえ、先生。そりや違ひますよ。觀音様はどの宗旨でも皆んな信仰をなさる佛様だつていふぢやありませんか」
「ところが切支丹許りは不可ない」
「觀音様は切支丹がお嫌ひなんですか」
「嫌ひだか好きだか、そりや吾々には判らないが第一坊主が承知しない」

「和尚さんが？」
「左様――切支丹の額なんぞを持ち込まうものなら、觀音の坊主が頭から湯氣を立てゝ怒るに相違ない」
「判りませんね、そんな亂暴な事があるもんですか。御覽なさい。あそこの額の中には一つ家の鬼婆あや、天子樣の御病氣に取り憑いた鵺といふ怪鳥まで上つてゐるぢやありませんか。それだのに、切支丹の神様が何故不可ないんでせう？」
「まあ、さういふ理窟は抜きにして、拙者の云ふことをお聞きなさい。神社佛閣へ奉納する額面には、額面らしい題目があるものだ。あながち切支丹でなければならんといふ法もあるまいではないか」
「ですけれども、わたしには、あの切支丹の女の神様が子供を抱いてゐるところの繪が氣に入りました。わたしのところへ來た彼方の藝人が持つてゐたあれが――油繪の具で、こて〳〵と描いてあるんですけれど、本當に活きてゐるやうに描けてあります。あんなのを一つ先生にお願ひして納めたら、今までとは全く趣向が變つてゐますから、どんなに人目を惹くかも知れやしません」
「ふーむ」
そこで田山白雲が、もう爭つても駄目と思つたのか沈默して考へ込んで了ひました。
つまり頭の置き處が違ふのだ。この女の額面を上げやうといふ意志は、成るべく趣向の變つた人

目を奪ふやうな意味で、舊來の額面を壓倒しやうといふ負けず根性から出てゐるので、畫面の題目や、繪の内容等には一切お構ひなしである。こゝは爭つても駄目だ。白雲は沈默して了ひましたが、併し物は判らないながらこの女の氣性には、慥に面白いところがあると思ひましたから、

「宜しい。その切支丹を一つ描きませう」

といひました。これが負けず嫌ひのお角を喜ばせたこと一方でなく、相手をいひ込めて自分の主張が通つたものでもあるやうに意氣込んで、

「描いて下さる。まあ有難い。それで本望が協ひました」

それから一層心を込めて白雲を款待ました。白雲も久し振りで江戸前の料理に逢ひ、泰然自若として御馳走を受けてゐましたが、今宵は、何時ものやうに飢するに至らず、引き續いて駒井甚三郎の醇。駒井の爲めに一枚の美人畫を描いてやつたが、それが自分ながらよく出來たと思ひ、駒井も大變氣に入つてこの脇差を呉れたといふこと、それからいゝ加減の處で切り上げる用心も忘れないでゐると、お角が、

「ねえ先生。お差支がなければ、わたし共へお出で下さいませんか。二階が明いて居りますから、何日までおゐで下さつても文句をいふものはございません。そこで、どうか精一杯のお仕事をなすつて頂きたうございます」

お角は背中の文身を質においても奉納の額に入れ上げる決心らしい。

七

田山白雲がお角の宅へ案内されて、二階のお銀樣の居間であつた處に納まると、お角は取り敢ず、可なり大きな二つの額面を戸棚から出して白雲の前に立てかけました。

この二つの額面は、この間中、ジプシー・ダンスをやつてゐた一座が持つて來たのを、記念の意味で太夫元に呉れたものであります。

白雲が泰然自若として坐り込んで、睥睨してゐる眼の前で、お角は自身そのカーテンを卷き上げると、

「うーむ」

といつて白雲が長く唸りました。

唸り乍ら、白雲は兩の拳を兩股の上へ嚴しく置いて、

「うーむ」

と首を傾けた。その繪は、白雲の眼光を以てしても、急には居きかねるものでありました。

「それは子安觀音の繪だ」

畫樣を說明すれば、先づさういつたやうなものでせう。最前からお角が、再々キリシタン　キリシタンを口にしたればこそ、これが所謂キリシタンの油繪といふものかと思はれる。

けれども白雲の見る處は、それが觀音であらうとも、キリシタンであらうとも、信仰の上から見比べてかれこれと考へてゐるのではなく、この男はこの時、初めて本物の油繪といふものを見ました。

實は今までも、再々油繪といふものを見てゐるのです。西洋の繪の面影も霞を透して珠を眺めるやうな心持で堪能して見ないといふことはありません。第一期天草の前後の事は知らず、中頃、司馬江漢あたりの筆に脱化された洋畫の趣味も捨て難いものだと思ひました。また最近に於いて、外國の書物の挿畫として見たり、また寫眞銅版等の複製によつて覗いて見たりした洋畫に驚異の念を持たせられたことも一再ではありません。

「さうだ。西洋の繪の長所は形似だ。形を似せることに於いては、われ〳〵はきざはししても及ばないかも知れない。この遠近、この人體、空氣の色、日の光の隱影をまで斯くも精巧に現すのは、繪といふよりもこれは技術だ。形似が繪といふものゝすべてゞ無い限り……」

そこで白雲の面には悠然たる微笑が湧き、墨の一色を以て天地の生命を捉へるの藝術を謹美禮拜するの念が起る。

それが、今、斯うして本物の油繪を見てゐるうちに判らなくなる。

判らないのは、これによつて敢て自信が崩れた譯ではないが、これは今まで見た油繪とは少しく勝手が違ふ……成程 素人目で見て、之をこのまゝあの觀音へ納額して見たらば、定めて異彩を

放つであらうと思ふのも無理がない——斯ういつた繪を納めて見たいと願ふのは、あながち奇を好む素人考へとのみはいはれない。たゞに淺草觀音の納額として見るに止まらず、この繪をとつて、現代の凡ゆる流派の展覽の中へ置いて見たら、どんな感じがするだらう。と白雲はそれを考へました。

さうして、次にその一枚を取り除くと、從つて現れた第二枚。

「うーむ」

それを白雲はまたも長く唸つて眺め入り、

「どうも、判らない。珍しい見物だ」

と繰返して呟きました。

いよ〳〵判らなくなりました。これは以前の油繪とは違つてゐるが、慥に一種の繪の具で描いてあります。さうして畫風も全く變つてをり、時代も、それよりはずつと古いのみならず、繪の輪廓の要部が線で描いてあることが白雲を驚かせました。

西洋畫の驚異は色と形である。東洋畫の偉大は線と點とであるといふやうに信じきつてゐた白雲の眼には、この線と色とを調合した異風の繪に會して判らなくなつたのも無理はありません。時代でいへば十四世紀から十五世紀頃の物でせうが、それすら白雲には判らない。

その翌日から田山白雲は、右の一間に納まつて二つの洋畫の額面をかたみ代りに眺めて居りまし

た。

お角が、お梅と男衆とを連れて熱海へ旅立つたのは間もないことです。

留守中の萬事は抜かりなく整へて置いて、別に若干の金を白雲の爲めに供へて立ちましたが、その後封を切つて見ると、五十兩あつたので、流石の白雲も、この女の氣前のよい事に、一寸度膽を抜かれた形であります。そこで、その金は、そつくり故郷の足利にゐる妻子に送り屆けることにして置いて、またも例の額面と睨めつこです。

油でない方の一方の額が、どう睨めても判らない。時代が判らない。描き手が判らない。描かれてゐる人物が判らない。只判るのは、線と色との調和と、それから描かれた人物の陰深にして凄慘な表情。さうして見てゐるうちに溫和があり威嚴がある半面の相。

知られる限りの道釋の中にも、英雄の間にも、この像に當て嵌るべき人物を見出すことが出來ない。

世間には、判つても判らなくても、どうでもいゝ事がある。是非共判りたい事がある。どうしても判らせねばならぬ事もある。凡てに於いて極めて無頓著な田山白雲。時としては飢ゑに迫る妻子をすら忘れて了ふこの放浪畫家も、事一度び、その天職とする處の事に當ると、可なり苦心慘憺する。今や、この第二の繪について、何事をか判りたいとして、その一つをさへ、判らせる事が出來ないで苦心慘憺を續けてゐる。

判らないのは知識だけである。知識の鍵を握りさへすれば、藝術に國境はないのだから、いゝものはいゝ、惡いのは惡いとして、當然自分の鑑賞裡に下つて來るに相違ないが。知識その者が無いから何とも判斷の下しやうがない。

藝術に國境は無いといふあり來りの言葉を念頭に置きながら、田山白雲は東洋の藝術が判つて西洋の藝術の知識の暗いことに、自分ながら不滿と焦燥とを感じ、さて、藝術といふ流行語を繰返して何となく攀つたい思ひがしました。

「藝術」といふ流行語の起りは今に初まつた事ではない。享保十四年の版木、樗山子といふものの著述に「天狗藝術論」がある。これは劍法卽心法を說けるもので、なか〳〵傾聽すべき議論がある。藝術の文字が流行語となり初めたのは多分その邊で、その後、幕府が講武所を開いた趣意書のうちに、旗下の子弟、次男、三男、厄介に至るまで、力めて藝術を修業せねばならぬと奬勵してゐる。水戸中納言の弟餘九麿を一橋殿へ呼び寄せる時のお達しも藝術のお世話といふことで許されてゐる。けれどもそれが今のやうに流行語となつたのは、ある時、三日月といふ俠客が日本橋邊りで、勤番の侍と喧嘩をし、

「うぬ、三びん、待ちやあがれ」

といつて、その侍を十餘人といふもの爪か茄子を斬るやうに、サツク〳〵と斬り伏せたのが評判になると弟子を連れてこれを檢分に出向いたある劍術の先生が、

「よく斬りは斬つたが藝術になつてゐない」
といふと弟子共が、
「成程、藝術にはなつてをりませんな」
と追從をいつたことから初まつて、藝術になつて居る居ないといふことが花柳界に流行語となり猫も杓子も藝術々々といひ出したものだから、或男が、
「藝術とは何だね」
トルストイでもいひさうな事をいひ出していたく彼等を狼狽させたこともありました。
夜になると田山白雲は、お銀樣の寢た縮緬の夜著蒲團の中へ身を埋めながらもそんな事を考へて笑止がり、問題の畫面に向つては嚴肅な眼を据ゑて居りました。
女興行師のお角の殘して行つたものは、田山白雲に取つては由々しき謎でありました。然も本人が謎とも問題ともせずして投げつけて行つた處が奇妙です。
これが爲めに、田山白雲が散々に苦しめられてゐる處は笑止の至りであります。
顧愷之であらうとも、吳道玄であらうとも、嚙んで齒の立たないといふ限りはないが、これ許りは、つまり、知識の鍵が全く失はれてゐるから見當のつけやうがないのです。
そこで、一旦、白雲は戸外へ出て見ました。古本屋漁りをして、若しや、それらしい横文字を書いた書物でも見つかつたら——と何のより處もない果敢ない心頼みで暫く街頭を散歩して見ました。

たけれど、如何せん、その時代の書店の店頭に西洋美術の梗概をだも記した書物があらう筈がありません。
よし、まぐれ當りに蕃書取調べ所邊りの拂下げの洋書類の中にそんなのがあつたとしても、不幸にして田山白雲には、それを讀む力がありません——せめてあの駒井甚三郎氏でも近い處にゐたならば、自分が東洋畫に就ての意見を吹込んだ人に向つて、逆に西洋畫の見當を問ふのは、聊か氣恥かしいやうでもあるが、尋ねて見れば相當の當りがつくかも知れないが、今の處では皆目、暗夜に燈火なきの有樣で、いよ〳〵白雲の不滿と齒痒さとを深くするに過ぎません。
そこで、街頭から空しく立ち戻つて、再びかの油でない方の畫面を篤と見入りました。
知識は必ずしも藝術を生ないが、知識なくして藝術の理解が妨げられ、或は全く不可能になるといふことを、白雲はこゝで、熟々と思ひ知らされたやうです。
「己れは、これから外國語をやらなくちやならない。オランダでも、イギリスでも構はない。何處か一ヶ國の西洋の文字を覺え込んで置かない事には……」
白雲は暫く考へてゐたが二度目に街頭へ出掛けて行つた時には、一抱への書物を買ひ込んで來ました。見れば、それが皆な幼稚な語學の獨り案内のやうなものであります。明日といはずに、白雲はその場でアルファベットの獨修を初めて了ひました。
實際、白雲が知識の足らないために、藝術を理解することの妨げを痛感して、泥棒を捉まへて繩

を綱ふよりもモット緩慢な仕事をこの畫面の前で初めたのは事のそれ程、畫面そのものが白雲の研究心を誘ふ力あるものと見なければならない。判つても判らなくても、この畫には非凡な力があるものに違ひない。

偶然は時として大きな惡戯をするものですから、若し、斯くまで白雲を苦心煩悶せしめる後の方の繪が、十三世紀から十四世紀へかけての西洋の宗教畫であつてそれが何かの機會で浮浪の旅役者の手に移り、海を越えて、この女興行師の手に渡つて、珍しい繪看板同樣の扱を受けつゝ、卓落たる旅繪師の眼前に展開せられたものとしたら、その因緣はいよ〳〵奇妙といはねばならぬ。

十三世紀から十四世紀の西歐の宗教畫と云へば、美術史の一ページを繙いたほどのものは、誰でも復興の幕を切つて落したチマブエとその大成者である大ジョットーを知らないものはない。當時にあつては宗教畫は卽ち美術の全部でありました。

ジョットーは、その所謂フレスコの大きなものを後世に殘した外に、小さな額面を作らないではな。今日でもその額面の殆ど全部はヨーロッパにも絕えてゐるが、若しそれが偶然斯うしてこんな處へ落ちて來たとすればそれこそ破天荒の怪事――假にその謙遜な門弟の筆になり、後人の忠實な模寫であるとしたところが、白雲の胸を刺して煩悶懊惱せしむるには充分でせう。

今日も明日も白雲は額面の前で、エイ、ビー、シーを習ひ出し、賴まれた仕事を初める氣色がありません。

八

田山白雲の身の廻りの事は、三度の食事から蒲團の上げ下しまで、痒い處へ手の屆くやうに世話して呉れる者があります。

それは主として、兩國橋の女輕業の一座の手のすいた者が入り代り立ち代りして、親方からいひつけられた通りにするものですから、不足といふ事はありません。

尤も、今では兩國橋の一座は手代の方に任せて、お角は直接に立ち入らない事にしてゐるが、後見としてのお角の眼が光らない限り立ち行かない事になつてゐるのですから、お角のいひつけによつて働く人は、白雲を尊敬して、それに侍くこと至れり盡せりの有樣です。

處が、この繪描きは、豪傑の資質を備へてゐて、女輕業の美人連も浮かとは狎難いものがある。殊に親方からは繪の先生だといひ渡されてゐたのに、この先生は繪を畫かないで橫文字を畫いてゐる。

ある時、當番の美人連の一人が怖る〳〵傍へ寄つて來て、

「何をお書きになつてゐらつしやいますの？」

「ドロナワだよ」

この返事で二の句が次げないでゐると白雲先生は、

「ドロナワといつて、つまり、泥棒を捉まへて繩を綯つてゐるんだ」
「へえ……」
女は思はず白雲の手許を覗き込むやうにしましたが、別段、繩らしいものも見えず、相變らずクチャ〳〵と横文字を書いてゐるから、一切譯が判らないで、
「繩をお綯ひなさるなら、麻を持つて參りませうか？」
と續いて、怖る〳〵伺ひを立てると、白雲が釣鐘のやうな大きな聲で、
「あ、は、は、は……」
と笑ひ出したので、忽ち吹き飛ばされて了ひました。
吹き飛ばされた美人連の一人は兩國橋の樂屋へ來て吐息を吐いて、
「不可ないのよ、嘘よ、あんな繪描きがあるもんですか。ありや豪傑ですよ」
「何うして？」
「泥棒を捉まへるんですつて」
「さうなの、わたしも訝しいと思つた。繪描きだ繪描きだといつて、ちつとも繪を描かないぢやありませせんか」
「繪描きぢやないのよ。親方も變り者だから、あんな事をいつて假に繪描きとして世話をして置くんでせう。本當は豪傑なのよ」

「わたしも、豪傑だらうと思つたのさ」
「だからね、わたし達ぢやお齒にあはないから、力持のお勢さんを、あのお客樣の接待係專門にして了はうぢやないか」
こんな事をいつて、力持のお勢さんが丁度當番の日。
この日、白雲は、何處かでローマ字綴りに假名をつけたのを手紙へ幾枚か墨で書いて貰つて來て、それを練習してゐる。その時分、市内を訊ぬれば然るべき闘學や英語の塾はあるべき筈、それに入學して師につくの順序を厭うて何處までも獨學で行くの寸法らしい。凝り出すとこの男も寢食を忘れる性質で、力持のお勢さんが來ても脇目も振らない。
力持のお勢さんも、この人には何だか畏敬が先に立つと見えて、お給仕の時も冗談が一ついへないで堅くなつてゐる。
夕方、二階へ明りをつけに行つて、恭しく引き下がつて。自分は長火鉢の前に頬杖ついて留守居してゐると、
「今晩は……」
と訪れの聲がして、格子戸がガラリと開きましたが、お勢さんは立たないで、
「どなた？」
といひました。多分心安立ての仲間うちが來たものと思つたのでせう。

「御免なさいよ」
それは聞いたやうな聲でしたけれど女ではめりません。
「お入りなさいな」
お勢さんはまだ立たないで返事だけをしました。
そこで障子を明けて、
「御免よ」
といつて顔を出した男を見て、力持のお勢さんがハツと驚きました。
「まあ、がんりきの兄さん」
「お勢ちやんかい」
「何て、お珍しいんでせう」
お勢さんは大きな體を搖ぶつて出て來ました。
「すつかり御無沙汰しちやつたね」
がんりきの百藏は、唐棧の半纏か何かで玄冶店の與三もどきに、一寸氣取つて、
「時に、これはどうしたい」
といつて親指を出して見せると、
「親方はお留守なんですが、まあお上り下さいましよ」

「留守かい」
「えゝ、お留守でございますが、まあお上りなさいまし」
「すぐ、歸るかね」
「否え、一寸旅へお出かけなすつたんですから」
「旅に出たつて？　おや〳〵」
がんりきは、やゝ失望の體で上り口に佇んでゐると、お勢さんは、
「兄さん、どうなすつたのだらうと、皆んなで心配してゐましたわ」
「何かえ、親方は旅に出たつて、何方の方へ行つたんだらう」
「箱根から熱海の方へ……」
「洒落てやがらあ」
がんりきは少々興醒め顔をして、
「まあ、仕方がねえや、それぢや留守に一つお邪魔をすることにして……」
といひながら、一寸後ろを顧みて、
「兄や、さあ、おゐで、いゝから安心してお上り」
自分が手を引いて連れ込んだのは、今まで障子の蔭にゐてお勢には見えなかつた一人の子供。
それを見ると、お勢さんが重ねて驚いて了ひました。

「おや、お前は茂ちやんぢやないの？」
「あゝ」
「茂ちやん。お前といふ子は、ほんとに何處へ行つてたんですよ」
お勢は、まぢ〳〵と茂太郎の顏を眺めて、窘めるやうにいひますと、茂太郎は恥しさうに、また怖氣づいてゐるやうに、がんりきの後ろへ隱れて返事をしない。
「かういふお土產があるから、圖々しくも、やつて來て見る氣になつたのさ」
とがんりきは早くも長火鉢の前に座り込んで了ひました。
茂太郎は、矢張りその蔭に小さく座つて、もぢ〳〵としてゐる。
「ほんとに、茂ちやん。お前といふ子も隨分人騷がせね。お母さんはじめ、どの位、心配して探がしたか知れやしません。いゝ氣になつて何處を歩いてゐたの……？」
お勢のいふ事が出戻りを叱るやうな慳貪になつたので、がんりきが、
「まあ、さう、ガミ〳〵いふなよ。何もこの子が惡いといふ譯ぢやねえや。連れて逃げた、あの小坊主が智慧をつけたんだから、何もいはず、元々通り、可愛がつてやつてくんな」
「何も、わたしが叱言をいふ役ぢやありませんが、あの人氣最中に、逃げ出すなんて、親方の身にもなつて見てもあんまりだから、つい……」
「ところで……」

がんりきは長火鉢の前に脇下がつて、
「湯治と來ちやあ二日や三日ぢやあ歸れめえが、お勢ちやんが留守番かい？」
「否え、わたしが留守番と決つた譯ぢやありませんの。二階にお客樣がおゐでなさるもんですから……」
「お客樣……」
といつてがんりきの百が變な顏をして二階を見上げました。
「そのお客樣てえのは……？」
がんりきの言葉尻が上がつて來るのを、
「繪の先生ですよ」
お勢は何氣なく答へたが、がんりきの胸がどうも穩かでないらしい。
「繪の先生が、お留守番なのかい？」
「お留守番といふ譯ではありませんが、親方がお泊め申して置くもんですから、わたし達が毎日隙を見ちやあ、斯うして入り代り立ち代り、お世話に上るんですよ」
「へえ、成程……」
がんりきの胸の雲行がいよ〳〵穩かでないらしい。
といふのは、このがんりきといふ男と、お角とは、一時盛んに熟くなり合つたことがある。併し、

それは斯ういふ輩の腐れ合ひで、いくら逆上てもお互に目先の見えない處までは行かない。お角も、再び一本立になつて、これだけの仕事を切つて廻すやうになつてからは、がんりきのやうな男を近づけては、第一、使つてゐる人達のしめしにもならないし、がんりきの方でも、少しはぢらして見たり何ぞしても、もと〳〵、女の尻をつけつ廻しつする程の突ッ轉ばしではないのだから、自分の方からも餘り近寄らないやうにしてゐたのを、それを今來て見れば、二階には繪の先生といふのを置いて、自分は湯治廻りとは可なり巫山戯てゐる。

第一、その繪の先生といふのが癪に障るぢやないか。ぬけ〳〵と二階に納まつて、女共にちやほやされながら、脂下がつてゐる色の生ッ白い奴。胸が惡くならあ——とがんりきは嚙んで吐き出したくなる。

それから、お角といふ阿魔もお角といふ阿魔ぢやあねえか……このおれが粹を通して足を遠くしてゐてやるのをいゝ事にして、色の生ッ白い繪描きを引張り込んで、抱いたり抱へたり二階へ押上げたりして置くなんぞは巫山戯過ぎてゐる。

がんりきは、こんな風に氣を廻して、すつかり御機嫌を惡くして了ひ、

「さういふ譯なら、一つその繪の先生といふのにお目に掛かつて行きてえものだ」

と、旋毛を曲出したのをお勢はそれとは氣がつかないものだから、

「お止しなさいまし。何だか氣の置ける先生ですから……」

「何だつて……？」

がんりきは辰巳あがりの體で、眼が据わつて來るのを、お勢は、

「隨分、氣六かしやのやうな先生ですから、お逢ひにならない方が宜うございませう」

留めて却つて油を注ぐやうな事になつて了ひました。

「おい、お勢ちやん。あつしはね、虫のせゐでその氣の置ける先生といふのに會つて見てえんだよ」

「え」

「そりや、いゝ株の先生だね。人の家に寢泊りをしてさ、さうして別嬪さん達を入り代り立ち代りお伽に使つてさ、それで氣六かしやで納まつてゐられる先生には、がんりきもちつとん許りあやかつて見てえものさ。どつこいしよ」

がんりきの百は、突然其處にあつた提げ煙草盆を引下げて、立ち上がつた襠幕が穩かでないから、この時、お勢も初めて驚いて了ひました。

「まあ、お待ちなさいまし、兄さん」

お勢は周章てゝ、抱き留めやうとしましたが、お勢さんの力で抱き留められた日にはがんりきも堪らないが、そこは素早いがんりきの事、早くも、それをすり拔けて梯子段を半まで上がつて了つたから、どうも仕方がない。

この男は喧嘩にかけては素早い腕を片一方持つてゐる上に、懐中には何時も刄物を呑んでゐる。見込まれた二階の色男も堪るまい。

それにしてもこの二階はよく勘違ひや間違ひの起りつぼい二階ではある。

その時、二階では田山白雲が泰然自若として、燈下に、エー、ビー、シーを學んで居りましたところです。

「眞平、御免下さいまし……」

がんりきの百藏は充分に凄味を利かせた積りで、煙草盆を提げてやつて來るには來たが、

「やあ」

一心不亂に書物に見入つてゐた目を移して百藏の方へ向けて田山白雲の淡泊極まる返答で、がんりきの百藏が殆ど立場を失つて了ひました。

「こりや色男ぢや無え――」

がんりきの百藏の開いた口が、何時までも塞がらないのは、この淡泊極まる待遇に度膽を抜かれたといふよりも、また、その淡泊によつて、一ばし利かせた積りの凄味が吹き飛ばされて了つたといふよりも、茲にゐる繪師が、確かに色男ではないといふ印象が、百藏をして、あつけに取らせて了つたのです。

これは色男ではない――少くとも、がんりきが梯子段を上つて來る時まで想像に描いてゐた色男の相場が狂ひました。それも狂ひ方が、あんまり烈しいので、がんりき程のものが、悉皆面食つて了つたのは無理もありますまい。そこでやむなく、

「御勉强の處を相濟みません……」

テレ隠しに、こんな事をいひ、煙草盆をお先に立てゝ、程よい處へちよこなんと座り込むと、白雲が、

「君は誰だい」

「え……わつし共は、親類の者で、詰りこの家の主人の兄貴といつたやうなものなんでございます。どうぞ、お見知り置かれ下さいまして」

これだけでも、聞きやうによれば可なり凄味が利く筈になつてゐるのを、白雲は眞に受けて、

「はゝあ。君が、茲の女主人の兄さんかね。妹さんには拙者も訝らずお世話になつちまひましてね」

「どう致しまして、あの通りの我儘者でげすから、お構ひ申すことも何も出來やしません。まあ一服おつけなさいませ」

がんりきの野郎が如才なく、携へて來たお角の朱羅宇の長煙管を取つて一服つけて、それを勿體らしく白雲の前へ薦めて見たものです。

「これは恐縮」

といつて、白雲は辭退もせずに、その朱羅字の長煙管でスパ〳〵とやり出しましたものですから、がんりきの百藏も、愈々この男は色男ではないと斷定をして了ひました。さうして見ると、今迄、張り詰めてゐた百藏の邪推とか嫉妬とかいふものが今は滑稽極まることのやうになつて、吸付煙草をパク〳〵やつてゐる白雲の姿に吹き出したくなるのを堪へて、胸の中で、

「どう見ても此の男は色男ぢや無え」

全くその通り、どう見直しても眼前にゐるこの男は、自分が一途に想像して來た樣な色の生白い優男ではありませんでした。色が生白くないのみならず、本來、銅色をした處へ房州の海で色上げをして來たものですから、可なり染が利いてゐるのです。それに加ふるに六尺豐かの體格で、悠然と構へ込んでゐる處は優男の部類とはいへない。いかなイカモノ食ひでもこれはカヂれまい——そこでがんりきも馬鹿々々しさに力拔けがして了しまひました。

すべて、がんりきの目安では、有ゆる男性を區別して色男と醜男とに分ける、色男で無い者は即ち醜男であり、醜男でない者は即ち色男である。男子の相場は女に持てることゝ持てないことによつて定まる。さうして少くとも自分は色男の本家の株だと心得てゐる。この本家の旗色に靡かぬやうな女は意地を盡しても物にして見せやうとする。假にもこの本家の株を侵すやうなものが現れた日には全力を以てそれに當る——だが、斯ういふ場合には何と引込をつけていゝか判らない。

是非なく、がんりきの百藏は、田山白雲に向つて、自分が今日この家を尋ねて來たのは、何時ぞや、兩國の樂屋を逃げ出した人氣者の山神奇童を、こんど甲州の山の中で見つけ出したものだから、それを引連れて戻しに來たのだといふことをいひ、來て見ると生憎、お角が留守だつたものだから失望したといひ、どうか一つその子供を、お角の歸るまで手許に預かつて貰ひたいといふことを手短に白雲に賴み、

「折角、御勉强の處を、お邪魔を致しまして誠に相濟みません」

がんりきとしては神妙なお詫までして、そこ〳〵に引上て了ひました。

最初の欅幕に似合はず、がんりきの百藏がおとなしく下りて來たものですから、梯子段の下に待ち構へて、いざといはゞ取押へに出ようとした力持のお勢さんも、ホッと息を吐いて喜んで了ひました。

九

その翌日から、田山白雲の周圍に般若の面を持つた一人の美少年が侍いてゐる。それは申すまでもなく清澄の茂太郎であります。

「叔父さん」

「何だい」

白雲が机の上に兩肱をついて、今も一心に十四世紀の額面を眺めてゐる傍から茂太郎が、

「ねえ、叔父さん

「何だい」

「後生だから……」

「うむ」

「後生だから、あたいを逃がして頂戴な」

「不可ないよ」

「そんな事をいはないで」

「どうして、お前は茲にゐるのを厭がるのだ。茲の家の人がお前を苛めでもしたのかい」

「否え。茲の家の人は、親方も姉さん達も、みんなあたいを大切にして呉れます」

「そんなら逃けるがものはないぢやないか」

「でもね、叔父さん、辨信さんが心配してゐるから」

「辨信さんといふのは何だい」

「辨信さんは、わたしのお友達よ」

「あ、さうか。お前を唆かして連れて逃げ出したといふその小法師のことだらう。不可ません。お前はそんな小法師に騙されて出歩くもんぢやありません。おとなしく親方や朋輩のいふ事を聞いてゐなけりやなりませんよ」

「いゝえ、辨信さんに欺されたんぢやありません。辨信さんは人を欺すやうな人ぢやありませんのよ。それは〳〵あたいを大切がつて、あたいがゐないと、ドノ位淋しがつてゐるか知れないでせう。それを默つて出て來たんだから、だからもう一遍辨信さんに逢ひたいの。ね、叔父さん、逢はして頂戴。後生だから」

「そりやお前、料簡違ひといふものだよ。お前は、その辨信さんといふのよりこつちの方に義理があるのだらう。さう無暗に出歩いては不可ない」

「……」

茂太郎は茲に至つて失望の色を滿面に現しました。最初から畫面に心を打ち込んでゐる白雲にはその色を見て取ることが出來なかつたが、會話がふつと途絶えたので氣がつき、

「だが、時が來れば逢へるやうにしてやるから、逃げ出したりなんぞしないで、おとなしく待つてゐなければならない」

「時つて、何時の事」

「それは、何時ともいはれないが、茲の主人が旅から歸つて來たら、よく話をして、その辨信さんといふのに逢へるやうにして上げよう」

「さうなると、いゝですが、皆んなが辨信さんをよく思つてゐないから」

茂太郎が容易に浮いた色を見せないのは、茲の家では誰もが辨信をよく思つてゐないのみならず、誘拐者として惡んでゐることを知つてゐるからです。

「わしも長く付合つてゐる譯ではないから、よく知らんが、併し、茲の女主人といふ人もさう判らない人では無いらしいから、歸るまで待つておゐで、逃げては不可ないよ。まあ、繪の本でも御覽……わしの描いた繪の本を見せて上げよう」

白雲は、この少年を慰める積りで、座右に置いた自分の寫生帳——房總歷覽の收穫——それを取つて無雜作に茂太郎のために貸し與へました。

悲しげに沈默した茂太郎は、與へられた繪の本を淑かに受け取つて、疊の上へ置いて一枚一枚と繰り擴げます。

この寫生帳は、房州の保田へ上陸以來、鋸山に登り、九十九谷を廻り、小湊、淸澄を經て外洋の鼻を廻り洲の崎に至るまでの收穫が悉く收めてある。何も知らぬ茂太郎も一枚一枚とその肉筆の墨の色に魅せられて行くうちに、

「あ」

といひました。悄げ返つてゐた少年の頰にサッと驚異の血が上りました。

「叔父さん」

「何だい」

「あなたはお孃さんの似顏を描きましたね」

「お孃さんの」

「えゝ」

「何處のお孃さん」

といつて、十四世紀の繪畫を眺めてゐた田山白雲が自分の畫帳の上に眼を落すと、そこには房州の保田の岡本兵部の家の娘の姿が現れて居りました。

「これは叔父さん、保田の岡本のお孃さんの似顏でせう。それに違ひない」

「うむ。どうしてお前それを知つてゐる」

「あたいのお孃さんですよ」

「お前も、保田の生れかね」

「さうぢやありませんけれど、これは、あたしのお世話になつたお屋敷のお孃さんです」

「はゝあ」

田山白雲は何かしら感歎しました。

「お孃さんは、あたしに逢ひたがつてゐるでせうね、あたしが辨信さんに逢ひたがつてゐるやうに。さうして、叔父さん、お孃さんは、あたしの事を何とか云はなかつた」

「左樣……」

白雲は、別段この少年へといつて、あの娘からいひ傳へられた覺えもない。
「お嬢さんが、あたしに初めて歌を教へて呉れたのよ。それからあたしは歌が好きになつてしまつたのよ」
「成程」
そこで、田山白雲が、その時の記憶を呼び起して、あの晩、岡本兵部の娘が羅漢の首を抱いて、子守歌を唄つたのを思ひ出しました。その時、白雲も胸を打たれて、この年で、この繻緞で、この病ひと、美しき若き狂女のために泣かされたことを思ひ出しました。

ねんねんねんねん
ねんねんよ
ねんねのお守は
何處へいた
南條長田へ魚買ひに……

清澄の茂太郎は、その時、何に興を催したか、行燈の光をまともに見詰めて、この歌を唄ひ初めると、田山白雲は何かいひ知れず淋しいものに引き入れられる。
さうだ、あの時、岡本兵部の娘は石の羅漢の首を後生大切に胸に抱へて、蠟涙のやうな涙を流し、
「ねえ、あなた、この子の面が茂太郎によく似てゐるでせう。そつくりだと思はない？」

その首を自分の机にさし置いたことを覺えてゐる。
して見れば、あの狂女とこの少年の間に何か奇しき因縁があるに違ひない。そこで白雲も妙な心持になり、
「杭州に美女あり、その面白玉の如く、夜な〳〵破狼橋の下に來つて妖童を見る……」
と口吟みました。

＋

鐃の浦に雲が低く垂れて陰鬱極まる日、駒井甚三郎は洲の崎の試驗所にあつて、洋書を讀げて讀み、讀んではその要所々々を飜譯してノートに書き留め、讀み返して沈吟しつゝ居りました。
フランソア・ザビエル師ノ曰ク。予ノ見ル所ヲ以テスレバ、善良ナル性質ヲ有スルコト日本人ノ如キハ世界ノ國民ノウチ甚ダ稀ナリ。彼等ガ虚言ヲ吐キ詐僞ヲ働クガ如キハ嘗テ聞カザル所ニシテ、人ニ向ツテハ極メテ親切ナリ。且、名譽ヲ重ンズルノ念强クシテ、時トシテハ殆ド名譽ノ奴隷タルガ如キ觀アリ。
斯う書いて見て、駒井は果してこれが偽實だらうか、どうかと怪しみました。フランソア・ザビエル師は、天文年間初めて日本へ渡つて來た宣教師。たゞ日本人のいゝ處だけ見て悪い所を見なかつたのだらう。それとも一遍のお世辭ではないか――さて默して讀むことまた少時。

日本人ハ武術ヲ修練スルノ國民ナリ。男子十二歳ニ至レバ總テ劍法ヲ學ビ、夜間就眠スル時ノ外ハ劍ヲ脱スルトイフコトナシ。而シテ眠ル時ハコレヲ枕頭ニ安置ス。ソノ刀劍ノ利鋭ナルコト、コレヲ以テ歐羅巴ノ刀劍ヲ兩斷スルトモ疵痕ヲ止ムルナシ。サレバ刀劍ノ裝飾ニモ入念ニシテ刀架ニ置キテ室内第一ノ裝飾トナス。

これは實際だ――と駒井甚三郎が書き終つて、頷きました。

勇氣ノ盛ンナルコト、忍耐力ノ強キコト、感情ヲ抑制スルノ力ハ驚クベキモノアリ。

これは考へものだ……殊に今日のやうな頽廢を極めた時代を却つて諷誦してゐるやうな文字とも思はれるが、併し、よく考へて見ると、古來、日本武人の一面には確にこの種の美德が存在してゐた。今でも何處かに隱れてはゐるだらう。

日本人ハ最モ復讐ヲ好ミ、彼等ハ街上ヲ歩ミナガラモ、敵ト目ザス者ニ逢フ時ハ、何氣ナクコレニ近寄リ、矢庭ニ刀ヲ拔イテ之ヲ斬リ、而シテ徐ニ刀ヲ鞘ニ納メテ何事モ起ラザリシガ如ク平然トシテ歩ミ去ル……單ニ刀ノ切レ味ヲ試サンガ爲ニ試シ斬ヲ行フコト珍シカラズ。

これもまた、確に日本人のうちの性癖の一つで、駒井自身も幾度かそれを實地に見聞してゐる。これは美德とも長所ともいへまいが、外國人が見たら、確かに日本國民性の一つの特色として驚異はするだらう、と駒井は漸く筆を進ませて、

日本ノ貴族ニハ下法ニシテ傲慢ナル習慣アリ。足ヲ以テ平民ヲ蹴リテ怪マズ、平民自身モマタ奴隷タルベクコノ世ニ生レ出デタルモノニシテ、人格ト權利ヲ沒却セラレテモ之ヲ甘ジテ屈從スルモノ、如シ。惟フニ日本貴族ノコノ傲慢ナル風習ヲ改メシムルノ道ハ、耶蘇教ノ恩澤ヲコレニ蒙ラシムルノ外アルベカラズ。

そこで、成程、外國人の眼から見た時は、階級制度の烈しい日本の國では、貴族と平民との關係が斯うも見えるのか知ら。これでは野蠻人扱ひだ、と思ひました。併し、これは西洋で十六世紀から十七世紀の間、日本では戰國時代から德川の初期へかけて、日本に渡來した主として耶蘇教の宣教師の目に映つた日本人の觀察である。日本人自身では氣の著かない適切な見方もあらうが、また思ひきつた我田引水もあるやうだ――現に日本貴族の傲慢なる風習を改めしむるの道は耶蘇の教へを以てするより外はないと斷言した處など、日本に宗教なしと見縊つていふのか、或はまた、事實この道を傳ふるにあらざれば人類救はれずとの信念によつて出たる言葉か――駒井自身では動もすれば、そこに反感を引き起し易い。

だが、耶蘇の教へが僞善と驕慢を憎んで、愛と謙遜を教へる處に誠意の存することは聞げながら判つてゐる。

駒井甚三郎が今日讀んでゐるのは、その專門とする處の兵器、航海等の科學ではなく、宗教に關する處の書物であります。宗教といふたとても、それはキリスト教に關するものゝみで、何時ぞや態々番町の舊邸を訪ねて、一學を煩はし、その文庫の中から選び羅し歸つたものであります。

今や、駒井甚三郎は　キリスト教を信じ初めたのではありません。また信じやうと心掛けてゐる譯でもありません。給仕の支那少年との偶然の會話が緣となつて、これを知らなければならぬとの知識慾に驅られたのが、抑々の動機であります。

何となれば、西洋の軍事科學の新知識に於ては、當代に人も許し、吾も信ずる所の身でありながらその西洋の歷史を劃する宗教の出現について殆ど無知識であるのみならず、不具なる支那少年から逆に知識を受けねばならぬことは、これ重大なる恥辱であると、駒井の知識慾が、さういふ風に刺戟を與へたから、彼は暫く、軍事科學の書物を拋擲して、專ら、キリスト教の書物を讀むことになつたのです。

要するに信仰の爲では無く、知識の爲に讀み出してゐるのです。

で、讀み行くうちに、どの讀書家もするやうに、要所々々へ線を引いて置いて、それを座右に積み重ね、今やその要所を改めて摘錄し、飜譯してノートに止めてゐる。

さてまた、一册を取り廣げて、その引線の部分を摘譯する。

福音書ノ何レノ部分ニモ耶蘇ノ面貌ヲ記載シタルコトナシ、サレバ、後人、耶蘇ノ像ヲ描カントスルモノ、ソノ想像ノ自由ナルト共ニ表現ノ苦心尋常ニアラズ。

或者ハ、耶蘇ノ面貌ヲ以テ醜惡ニシテ怖ルベキ强烈ノモノトナシ、或者ハ、溫厚愛ネ備ヘタル秀麗ノ君子人トナス。

アンジェリコ、ミケランゼロ、レオナルドダビンチ、ラフアエル及テシアン等ノ描ケル耶蘇ノ面貌ハ皆莊嚴ト優美トヲ兼ネタル秀麗ナル男性ノ典型トシテ描キタレドモ、獨リ十四世紀ノジョツトーニサカノボレバ然ラズ。

人一度、アレナノ會堂ニ赴キテ、ジョツトーノ描キタル、ユダノ口吻スル耶蘇ノ面貌ヲ見タラソモノハ、慄然トシテ恐レ、玆ニ神人ナザレ村ノ青年ヲ見ルト共ニ、ジョツトーノ偉才ニ襟ヲ正サヾルハ無カルベシ。

ミケランゼロモ、ダビンチモ、耶蘇ノ有スル無限ノ悲愁ト沈鬱トヲ寫スコト、到底ジョツトーノ比ニアラズ、イハンヤ、ラフアエルニオイテヲヤ……未ダカツテ、ジョツトーヨリ純正偉大ナル宗教畫家ハナシ。玆ニソノ傳記ノ概要ト作品ノ面影トヲ傳ヘム哉……

こゝまで譯し來つて駒井甚三郎は、ページを一つめくりました。全く世の中は儘にならないもので、田山白雲はあゝして狂氣のやうになつて、いろはからその知識を探り當てやうと焦搔いてゐるのを、駒井甚三郎は何の豫備もなく、何の苦勞もなしに斯くして讀み且譯してゐる

田山の爵ることが三日遲ければ、駒井はこの西洋宗教美術史の一端を田山に話し、聞かせたかも知れない。といつて、さうなればまた、當然白雲はあの額面を見る機會を失つたのだから、駒井の說明も風馬牛に聞き流して了つたことだらう「知る者は言はず、言ふ者は知らず」といふ皮肉を、お互に別な處で無關心に經驗し合つてゐるの奇觀をお互に知らない。

その時分、海の方に向つたこの研究室の窓を外から押し開けやうとするものがあるので流石の駒井も、其無作法に呆れました。

金槌でも無ければこの室を驚かす者はない筈の處を、それも外から窓を押し破つて入らうとする氣配は穏かでないから、駒井も、嚴然、その方を眺めると意外にも窓を押す手は白い手で、そして無理に押し開けて、外から面を現したのは妙齢の美人でありました。

髪を高島田に結つた妙齢の美人は、窓から面だけを出して、駒井の方を向いて嫣乎と笑ひました。

駒井としても驚かない譯には行きません。

「お前は誰だ」

駒井が窘めるやうにいひ放つても女は別段驚きもしないで、

「御存知の癖に。ほら、あの、鋸山の道でお目に掛つたぢやありませんか」

「うむ」

「判つたでせう。あなたは、あの時の美い男ね」

「うむ」

「中へ入れて頂戴」

駒井は、あの時の狂女だなと思ひました。高島田に結つて、明石の著物を著た凄いほどの美人、羅漢樣の首を一つ後生大事に胸に抱いて、「お歸りには、わたしの處へ泊つてゐらつしやいな」と

いつた。

それが、どうして此處へやつて來たのだ。保田から洲の崎まで、可なりの道程がある。兎も角、駒井もこのまゝでは捨てゝ置けないから、椅子を立上がつて、

「此處は不可ない。彼方へお廻りなさい」

「いゝえ、あたし此處から入りたいの」

「不可ません。入るべき處から入らなければなりません」

「いゝえ、表には人が澤山ゐるでせう、犬もゐるでせう。ですからあたし、此處から入りたいの」

「表には誰もゐやしませんから、彼方へお廻りなさい」

「いや、あたし此處から入るの……あなたに抱いて頂いて此處から入るの」

「聞き譯がない。此處からは入れません」

「お怒りなすつたの、あなた。悪かつたら御免下さいね。ですけれども、あたし、窃と此處から入れて頂きたいの。さうして誰も氣の著かないうち、あなたとだけ、お話してゐたいの」

「いふ事が聞かれないなら勝手になさい。中からこの戸を締てしまひますよ」

「その戸をお締めになれば、あたしのこの指が切れちやうでせう。それでもいいの」

狂女は態と自分の手を伸してガラス戸の合間に差し込んで了ひました。

「あたし、あなたに正直な事を申し上げて了ふわ。それで嫌はれたらそれまでよ」

「手をお放しなさい」
「あたし、今までに七人の男を知つてゐますのよ」
「何をいふのです」
「あたし、これでも、もう七人の男を知つてゐるのよ。それを云つて見ませうか。一人はあるお寺の坊さんなの。一人は家へ置いた男、それから……」
「お默りなさい」
駒井は情ない色を現して、上から抑へるやうに女の言葉を遮りました。正氣で無い悲しさ、云ふ可らざる事を口走り、聞く可らざる事を聞くには堪へない。それを女は恥しいとも思はず、
「けれど、それはみんな、あたしの方から惚たのぢやなくつてよ、早くいへば、あたしが騙されたんですね。それから自棄になつて、たうとう七人の男にみんな欺されて、玩弄になつてしまひました」
「あゝ……」
外から押へても、中なる捻の利いてゐないものにはその効がない 駒井はこの場の始末にホトヽヽ困つてゐるのを、女は少しも頓著なしに、
「その七人の名を、みんなあなたに打ち明けたら、あなたも吃驚なさるでせう。その人達の恥にもなりますから、あたしは云ひません……それも本來は、わたしが惡いんでせう。茂太郎を可愛

がり過ぎたから茂太郎が忌かつて逃げて了ひ、その時からわたしは自棄になりましたの。あなた突き落しちや忌よ」
女は殿居に武者振りついて、あられもない高島田の美人はどうしても此處から觀入する積りらしい。
折よくそこへ金椎がお茶を運んで來たものですから、駒井は金椎にいひつけて、狂女を表の方へ廻らせました。
併し、正式に案内されてこの室へ通された狂女は、今まで云つたことも、した事も、すつかり忘れたやうにケロリとして、先づ室内のベットを見つけ出して、
「夜どほし歩いて來たものですから、披れて了ひましたわ。それに眠くて堪りませんから、少し休ませて頂戴な。あとで、ゆつくりお話を致しませう」
といつて、早くも、そのベッドの上に横になつて了ひました。
言葉の聞えない金椎は、この女の無作法に呆れて了つたやうでしたが、主人が別段それを咎めやうともしないものだから、解せない面をしながら、横になつた狂女の身體に毛布をかけてやりました。
金椎が出て行くと共に、駒井もこの室を退却して了つたので、あとは狂女がこの室をわが物顔に心ゆくばかりの獨りについて了ひました。

この一室を暫く狂女に與へて置いて、駒井は研究所を出て造船所の方へと歩き出しました。前にいつて通りこの日は陰鬱な天氣の日で、大武の岬も、洲の崎も、鏡ヶ浦も、對岸の三浦半島も雲に壓されて雨を產みさうな空模樣でした。程遠からぬ造船所へ來て見ると、十餘人の大工と職工が相變らず暢氣に仕事をしてゐます。暢氣といつても怠けてゐる譯ではなく、可なり根强い仕事を焦らないでやつてゐる。

駒井が、そつと裏の方から入り込んだ時分に、大工と職工とはお茶受けの休みで、こんな事を話してゐる。

「殿樣は、この船へ自分の好きな人だけを載せて異國へお出でなさるさうだが、若し、大海の中で無人島へでも吹きつけられたら、其處で國を開くと仰つてゐたが、新らしい國を開いてそこに住んだら、壓制といふものがなくて住み心がいゝだらうな」

と一人がいふと、

「そりや面白からう。だが、新らしい國を開いた處で、女といふものがなければ、種が絶えて了ふ。一體、殿樣は、この船に女を載せる積りだらうか、どうだらう」

といふやうな話をしてゐる處へ駒井が、ひよつこりと姿を現したものだから、みんな居住ひを直して、

「殿樣がお出でになつた」

船大工の和吉が立つて駒井の傍へ來て小腰をかゞめながら

「殿樣、ビームの付け方をもう一度檢分して頂きたうございます」

この男は豆州戸田の上田寅吉の高弟で、こゝの造船係の主住です。師匠うつしで、今でも駒井に向つて、殿樣呼ばゝりをやめない。和吉が殿樣呼ばゝりをするものだから、總ての大工職工が殿樣呼ばはりをする。

そこで、駒井は和吉の先導で、船の船梁を見て廻る。その前後、日本唯一の西洋型船大工の棟梁といはれた上田寅吉の傳へを受けて、加ふるに駒井甚三郎の精到な指導監督の下に工事を進めてゐるこの船。造船臺の形、マギリワラの据ゑ付、首材の後材の建て方、肋材を植ゑて今や船梁の取り付けにかゝつてゐる處。

駒井は仔細にそれを檢分して、なほ外板の張り方、コールターの塗り方等に二三の注意を與へ、次に蒸汽の製造と大砲の据ゑつけについて、その位置運搬の方法等に委細の指圖と相談とを試み、

「蒸汽の製造方が難物だ——今、苦心してゐる。旨く行くか、どうか、試運轉の上でなければ何ともいへない。測量器械のいゝのを欲しい。遠眼鏡も欲しい。誰かお前の知つてゐる人で適當の器械師は無いか。材料は此方で何とかする。腕だけ貸してくれゝば……」

フレームを叩いて、船と人とを吟味してゐる駒井は、最前愛の信仰のと寫してゐた人とは別人の觀がある。

全くこの造船所へ來ると駒井甚三郎は別人の觀があります。

第一、その眼つきからして違つて來ます。熱心そのものゝやうな輝きを集めて、船そのものを一つの有機體として、廣い意味の有機體には違ひがないが、精到なる彫刻家が自分の一點一畫を凝視するやうに、凝視してはそれに鑿を加へて、また退いて見詰めるやうに、見やうによつては一刀三禮の敬虔を以て佛像を刻む人でもあるやうに、駒井といふものゝ全部が船といふものに打ち込まれて行く熱心振りは、心なき工人達をも動かさない譯には行きません。

「殿樣は大工になつても立派に御飯が食べられます」

といつて工人達が感心する。事實、その通りで、學理の説明と、工事の指導だけでは我慢がしきれなくなつて駒井は自身ハムマーを取り、斧を揮つて終日働き暮す事さへあるのです。

そこで、こゝに働く人々とても、本職の船大工と機械師は二三人しか無い。あとはみんなこの邊の素人であるのを、駒井が仕立てゝ立派なその道の大工であり職工であるやうに使ひこなしてゐる。

のみならず、船の外形の工事と共に、その心臟をなす動力の問題、蒸汽の製造といふ難物を、かれは退いて研究し、今やそれをなし遂げやうとしてゐる。こればかりは親しく外遊して學んにあらざれば不可能といはれてゐる蒸汽の製造を駒井は自分の學問と從來の經驗とで必ず成し遂げて見せるとの自負を持つてゐる――それに比ぶれば大砲の据ゑ付の如きは易々たる仕事ではあるが

凡てにおいては、この事業、即ち、駒井甚三郎の獨力になるこの西洋型の船の模造は、模造といふが事實は創造よりも難事業になつてゐる。

その難事業が兎も角も著々と進んで行くのを眺める事は、この上もない興味であり、勇氣であり、神聖であるやうに思はるゝ。

だから、駒井は此處へ來て、事に當るとその事業の神聖と感激に沒入して吾を忘れるの人となることが出來る。

それと、もう一つ――駒井をして、この自家創造の船といふものに限りなき希望と精神とを打ち込ませるやうに仕向けてゐるのは、見えない時勢と人情との力が背後から強く彼を壓してゐるのです。

駒井は、今の日本の時世が行き詰まつて息苦しい時世であり、狹い處に大多數の人間が犇めき合つて、各々栗鼠のやうな眼をかゞやかしてゐる時世であることを強く感じてゐる。

國民に雄大な氣象が缺けて居り閑雅なる風趣を減盡しやうとしてゐる。他の大を成し長をあげるといふやうな大人らしい意氣は地を拂つて、盜み、排し、陷れやうとの小策が幕府の上より市井のお茶ッ葉の上まで漲つてゐる。

創造の精神が亡びた時に、剽窃の技巧が盛んになる。このまゝで進めば　日本國民は擧げて掏摸のやうなものとなつて了ひ、掏摸のやうな者を讃美迎合しなければ生活が出來なくなつて了ふ。

その結果は國民擧げて共喰ひである……心ある人が、斯ういふ時世を悲憤しなければ悲憤するものが無い。だが、幸にして駒井甚三郎はこの時世を充分に見てゐながら、病氣にもならず憤死することも無いのは要するに、前途に洋々たる新らしい世界を見、その世界に精進する鍵を自分が握つてゐるとの強い自信があるからです。

その洋々たる新世界とは何――それは海です。海は地球表面の七割以上を占めて然もその間には國境といふものが無い。

その鍵とは何――それは即ち船です。

この日本は美國ではあるが、この美國を六十にも七十にもわけて三百人もの大名小名共が食ひ合つてゐて何になる。

駒井は今、その海と船との信仰に全身燈ゆるが如き思ひを抱いて萬里の海風に吹かれながら、黄昏の道をおのが住家へと戻つて來ました。

駒井甚三郎は燈ゆるが如き熱心を抱いて、わが住居へ歸つて來ましたが、金椎を呼んで夕飯を取る以前に、自分の居間へ入ると、燭臺に蠟燭の火を點けて、かなり疲勞してゐた身體を、いつもするやうに、ぐつたりと寢臺の上へ投げかけやうとして、蛇でも踏んだものゝやうに急に立ち退いて了ひました。

忘れてゐたのです。自分の寢臺は、それよりズット以前から人に占領されてゐました。その人は今もいゝ心持で、寢臺の上に熟睡の夢を結んでゐる處であります。

眞に忘れてゐた。忘れてゐたのが當り前で、これまで曾つて他人のために占領された歴史のないこの寢臺です。不意に自分を驚かす處の如何なる客でも、こゝを占領しやうとはいはない。それをこの客に限つて、無作法の限りにも、許しのないうちに、早くもこゝをわが物にして主人の歸つたことをさへ知らずにゐる。しかもそれが妙齢の女であります。

駒井は呆れ果てゝ、暫くそのキャンドルを手に翳したまゝで、女の寢姿を見つめてゐました。

少くとも眠つてゐる間は無心でせう。無心の時には人間の天眞が現れる。兎も角もこれは卑しい娘ではありません。金椎がかけて呉た通りに毛布を首まで纏つて、枕一杯に濡れたやうに黑い後れ毛が亂れてゐました。

駒井はそれを眼を放さず見てゐましたが、この時はまた別の人です。今までの野心も熱心も希望も一時に冷却して、美しい娘の寢顔に注いでゐる。

さうしてゐるうちに、つく〴〵と淺ましさと、いぢらしさの思ひがこみ上げて來るのであります。

もとより狂人のいふ事は取り留めがない。自分の頭にまき起る樣々の幻想を、一々事實と混合して了ふこともあれば、不斷の脅迫感に襲はれて、あらぬ敵を有るやうに妄信してゐることも限りはないのだから、狂人のいふ事を、そのまゝに取上げるわけには行かないが、先程いつた事の淺間しさが、斯うして見ると、いよ〳〵身に堪へる。罪だ！　と駒井甚三郎は戰慄して怖れを感

じました。
この時です、女が眼を醒して、自分の眼前に光をさしつけて、自分を覗いてゐる人のあることを悟つたのは。
それと氣がつくと女は、嫣乎と笑ひ、
「何時お歸りになつたの……」
「今」
「さうですか。妾、あれからズツト寢通して了ひました。ちつとも眼が醒ませんでしたのよ。分よく寢て了ひましたわね。一體、もう何時でせう」
「もう、日が暮て了つたよ」
「誰も尋ねて來やしなくつて。誰も妾を追ひかけては來ませんでしたか」
「誰も來た容子はありません」
「誰が來ても、いはないやうにして下さいね。どんな人が尋ねて來ても、妾を渡さないで下さいね。いつまでも此處へ隱して置いて頂戴」
「……」
「もし、あなたが、誰かに妾を渡して了へば、妾はまたその人の玩具にされて了ひます……あなたが若し、妾を可哀さうだと思召すならば、此處へ置いて下さい。妾の身はどうなつても構はな

い、人に苛まれやうとも、蹂躙られやうと構はないと思召すなら、妾を突き出しても宜うございますけれど、あなたは、そんな慘酷なお方ぢや無からうと、妾は安心してゐますのよ。本當に、妾といふ人は、どうして斯う意氣地が無いんでせう。昔はこんなぢや無かつたんですけれども、今はもう駄目なのよ。人に甘い言葉を掛けられると、ツイその氣になつて了ふんですもの……誰か確りした人がついてゐて呉れなければ、この上、何處まで落ちて行くか知れません。御覽なさい、妾の前にあるあの深い怖ろしい穴を……」
いくらか精神の昂奮も落ちついたと見えて、最前のやうな聞き苦しいことも云はず、しほらしく訴へる言葉にも情理があつて痛はしい。其處で、駒井は柔しく、
「兎も角、お起きなさい——もう夕飯の時刻です、彼方で一緒に食べませう」
「どうも濟みません」
そこで女は快く起き上がりました。
やがて、食堂としてある一間で、駒井と金推と新來のお客と三人が、食卓にさし向つての會食が初まりました。女は頻に金推に話しかけて見ましたけれども、利き目がないのを不思議がつてゐると、駒井が兩耳に手を當てゝ、その襲であることを形にして見せました。
「可哀相に、耳が聞えないんですか」
狂女はわが身の不幸を忘れて、この少年の不具に同情しました。少くとも、その同情の餘裕の存

することを駒井は感心し、
「この子は支那の生れで、名をキンツイといひます」
「キンツイさんですか、妙な名ですね」
「非常に眞面目な少年ですから、あなたよくお付合ひなさい」
「本當ですか……眞面目な人ってなか〳〵當にはなりませんけれど、まだ若いから大丈夫でせう。」
「大丈夫です。それに神樣を信心してゐますから」
「まあ、神樣を信心しておゐでなんですか。支那にも神樣がありますのですか」
「有りますとも。人間は有つても無くつても神樣の無いといふ處はないと、私もこの少年から教へられました」
「まあ感心ですわね。子供のうちから神樣を信心するなんて、わたしも神信心をしたいにはしたいんですけれど、何處に神樣がおゐでなさるかわからないんですもの」
といつて、自分も一時、神信心をして見たけれども、天神樣を拜めば天神樣が彼方を向き、不動樣を信じやうとすれば不動樣が彼方を向くので、到頭信心は止めて了つたといふやうな事をいひ出すのは困るが、この外の事は、問ひに應じて略的を誤まらないやうに答へるものですから、駒井は、この女の病氣は癒るかも知れないとさへ思ひました。
名前を問へば、もゆると答へました。駒井が念を押すと、

もゆるとは草木のもゆるといふ意味でつけたんでせう。わたしにはよくわかりませんけれど」
と答へる。姓は岡本といはずに里見と呼んで貰ひたいといふ事。
昨日から、昨晩の夜通し此處まで歩いて來たが、一人で夜道をしても少しも怖いとは思はないといふ事。山でも坂でもさして疲れを覺えないで歩き通すといふ事。途中、人に出逢つても、こちらより先方が怖がつてよけて通すといふ事。それでも弱身を見られて了つては最早駄目だといふ事。
打ち明けた話を聞かされてゐると、駒井は不憫の思に堪へられなくなりました。成程、これをこのまゝ突き出して了へば、殘れる處の凡てのものを泥土に委して了ふのだ。本來、よい育ちでもあり、また生來、惡い質の娘ではない――そのうち、尋ねる人が來たならば、よく話をしてやらう。來なければ然ろへき保證を以て送り屆けてやらねばならぬと考へました。
併し、差當つての問題は、今夜の問題で、この娘を何の室へ泊めるかといふことです。金推と同室に置いて、若し夜中に脱走でもされた日には困る。一人では愈々寢かされない。さうかといつて自分の部屋へ寢かすことは自分が困る……駒井は、窮かにこの問題に苦心してゐるのを、娘は自分でズン〳〵と解決して了ひました。何故ならば、食事が終ると、矢張り我物顔で、以前の室の寢臺の上に身を乘せて了つたからです。
是非なく駒井はその室へ錠を卸ろし、自分は金推と共に別の室で寢ることにしました。

十

宇津木兵馬と佛頂寺彌助と丸山勇仙の三人は、八ヶ岳と甲斐駒の間を西に向つて急いでゐる。

途中、武術の話。

佛頂寺は世間を渡り歩いて、兵馬の知らない話をよく知つてゐる。

この人は前にいふ通り、齋藤彌九郎の門下で有數の使ひ手。今こそ亡者の數には入つてゐるが、その武藝談には、なか〳〵に聞くべきものがある。

併し、動もすれば藝に慢じて、己が師をさへ侮るの語氣を漏らすことがある。それが聞く人を不快にする。

丸山勇仙は九段の齋藤の道場練兵館の話をする。齋藤と長州系との關係を語る。そのうち、長州の壯士が相率ゐて練兵館を襲ひ、彌九郎の二男、當時鬼鍬といはれた鍬之助のために壓退された一條を物語る。その仔細は斯うである。

はじめ――嘉永の二年ごろ、齋藤彌九郎の長男新太郎が、武者修行の途次、長州萩の城下に著いた。宿の主人が挨拶に來た時に、新太郎問ふて曰く、

「拙者は武藝修行の者であるが、當地にも劍術者はあるか」

主人の答へて曰く、

「有る段ではございませぬ。當地は名だゝる武藝の盛んな地でございまして、近頃はまた明倫館といふ大層な道場まで出來まして、優れた使ひ手のお方が雲の如く群がつて居りまする。あれお聞き遊ばせ、あの竹刀の音が、あれが明倫館の劍術稽古の響きでございます」

新太郎、それを聞いて喜び、

「それは何より樂しみぢや。明日は一つ推參して試合を願ふことに致さう」

そこで、その夜は眠りについて、翌日、明倫館に出頭して、藩の多くの劍士達と試合を試みて、また宿へ戻つて、風呂を浴びて、一酌を試みてゐる處へ、宿の主人がやつて來る。

「如何でございました。今日のお試合は」

新太郎嬉乎と笑ふて曰く、

「成程、明倫館は立派な建物ぢや。他藩にも一寸類のないほど宏壯な建物で、竹刀を持つものも澤山に見えたが、本當の劍術をやる者は一人もない。いはゞ黃金の鳥籠に雀を飼つて置くやうなものだ」

これは、新太郎として、實際、さうも見えたのだらうし。また必ずしも輕蔑の意味ではなく、調子に乘つていつたのだらう。だが、この一言が、忽ち宿の主人の口から、劍士達の耳に入つたから堪らない。

「憎い修行者の廣言、このまゝ捨て置いては長藩の名折れになる」

かれ等は大激昂で、新太郎の旅宿を襲撃しようとする。老臣達が、それを宥めるけれど聞き入れない。止むを得ず、急を新太郎に告げて、この場を立ち去らしめた。新太郎は、それに從つて、一行を率ゐてその夜のうちに九州へ向けて出立して了つたから、纔に事なきを得たが、跡に殘つた長州の血氣の青年が納まらない。

「よし、その儀ならば、九州まで彼等の跡を追つかけろ」

「彼れ等の跡を追ひ掛けるよりも、寧ろ江戸へ押し上つて、その本據を突け。九段の道場には、彼れの親爺の彌九郎も、その高弟もゐるだらう。その本據へ乘り込んで、道場を叩き潰して了へ」

長州の青年劍士等十餘人、猛然として一團を成して、そのまゝ江戸へ向けて馳せ上る。その團長株に貴島又兵衞があり、祖式松助がある。

そこで、彼れ等は一氣に江戸まで押通すや否や、竹刀と道具を釣臺に乘せて、麹町九段坂上三番町神道無念流の師範齋藤篤信齋彌九郎の道場練兵館へ押し寄せて、殺氣滿々として試合を申し込んだものだ……

誰も知つてゐる通り、當時、江戸の町には三大劍客の道場があつた。神田お玉ヶ池の北辰一刀流千葉周作、高橋蜻河岸の鏡心明智流の桃井春藏、それと並んで、練兵館の齋藤彌九郎。各々門弟三千と稱せられて、　度その門を潛らぬものは、劍を談ずるの資格がない。

殺氣滿々たる長州の壯士連十餘人の一團は、齋藤の道場を微塵に叩き潰す覺悟を定めてやつて來たのだから、その權幕は、尋常の他流試合や入門の希望者とは違ふ。

處で、これを引受けた齋藤の道場には、長男の新太郎がゐない。止むなく、次男の歡之助が出ゝ應らはねばならぬ。

歡之助、時に十一歳――彼れ等壯士の結構を知るや知らずや、從容として十餘人を一手に引き受けてしまつた。

もとより、修業の積りではなく、復讐の意氣でやつて來た壯士連。立合ふ積りでなく殺す積り。業でいかなければ力任せでやつゝける積りで來たのだから、その猛氣、怒氣、當るべからざる勢ひ。

歡之助、それを見て取ると、十餘人を引受け引受け、たゞ單に突きの一手――得意中の得意なる突きの一手の外餘手を使はず、次から次と息を吐かせずに突き伏せて了つた。

哀れむべし、長州遠征の壯士、復讐の目的全く破れて、十餘人の壯士、一人の少年の爲めに枕を並べて討ち死。宿へ引き取つてから咽喉が腫れて、數日間食物が入らず、病の床に寢込んだものさへある。

長人の意氣愛すべしと雖も、術は格別である。中央にあつて覇を成すものと、地方にあつて勇氣に逸るものとの間に、その位の格段が無ければ、道場の權威が立つまい。

併し、貴島又兵衞あたりは、この事を右の話通りには本藩へ報告してゐないやうだ。

貴島は、長藩の爲めに、よき劍術の師範の物色の爲め、江戸へ下り、熟々當時の三大劍客の門風を見る處、齋藤は技術に於いては千葉桃井には及ばないが、門弟を養成する氣風が宜しい――といふやうな理由から、國元へ齋藤を推薦したいといふ事になつてゐる。

處で、これはまた問題だ。右の三大劍客の技術は甲乙を付することは、なか〳〵大膽な仕事である。貴島又兵衞が、齋藤彌九郎の劍術を以て、桃井、千葉に劣ると斷定したのは、何の根據に出でたのか、この三巨頭は、一度びも實地に立合をした例がない筈。

千葉周作の次男榮次郎を小天狗と稱して出藍の譽れがある。これと齋藤の次男歡之助とを取組ましたら、絶好の見物だらうとの評判は、玄人筋を賑してゐたが、それさへ事實には現れなかつた。若し、また、事實に現して優劣が問題になつた日には、それこそ、兩道場の間に血の雨が降る。

故に、それ等の技倆に至つては、各々見る處によつて推定は出來たらうが、斷定は出來なかつた筈。

丸山勇仙は當時、長州壯士が練兵館襲擊の現場に居合せて、實地目擊したと見えて、歡之助の强味を賞揚すると、佛頂寺の旋風が少々曲りかけて、

「それは歡之助が强かつたのではない。また長州の壯士達が弱かつたといふのでもない。術と力との相違だ。手練と血氣との相違だ。いはゞ玄人と素人との相違だから、勝つてもさのみ譽れではない――その鬼歡殿も九州では、すつかり味噌をつけたよ」

といふ。人が賞めると、何かケチをつけたがるのが、この男の癖と見える。特に惡意があるといふ譯ではあるまい。たゞ、白いといへば一應は黑いといつて見たいのだらう。それでも兵馬は氣になると見えて、

「歡之助殿が九州で何かやり損なひましたか」

「さればだよ。九州第一といはれてゐる久留米の松浦波四郎の爲めに脆くも打ち込まれた」

「え」

兵馬はその事を奇なりとしました。練兵館の鬼歡ともいはれる者が、九州地方で脆くも後れを取つたとは聞き捨てにならない。

齋藤歡之助は、江戸においての第一流の名ある劍客であつた。それが九州まで行つて、脆くも後れを取つたといふことは、劍道に志しのあるものに取つては、聞き捨てのならぬ出來事である。

兵馬に問はれて佛頂寺が、其勝負の顚末を次の如く語りました。

久留米、柳川は九州においても特に武藝に名譽の藩である。その中、久留米藩の松浦波四郎は、九州第一との評がある。九州に乗り込んだ齋藤の鬼歡は、江戸第一の評判に迎へられて、この松浦に試合を申し込む。そこで江戸第一と九州第一との勝負がはじまる。

これは末代までの見物だ。その評判は、單に久留米の城下を騷がすだけではない。

歡之助は竹刀を上段に構へた。氣宇は、確に松浦を呑んでゐたのであらう。それに對して松浦は正眼に構へる。

こゝに、滿堂の勇士が聲をのんで、手に汗を握る。と見るや、歡之助の竹刀は電光の如く、松浦の頭上を目がけて打ち下される。波四郎、體を反らして、それを防ぐ處を、歡之助は、すかさず烈しい體當りをくれた——突きは歡之助の得意中の得意だが、この體當りもまた以て彼の得意の業である——流石の松浦もそれに堪へられず、よろ〳〵とよろめく處を、第二の太刀先、あはやの松浦の運命終れりと見えたる時、彼も九州第一の名を取つた剛の者、よろ〳〵とよろけせかれながら、横雄に拂つた竹刀が鬼歡の胴を一本！

「命はこつちに！」

と勝名乘をあげた見事な働き。これは敵も味方も文句のつけやうがないほど鮮かなものであつた。江戸第一が、明らかに九州第一に敗れた。無念殘念も後の祭り。

無論、この勝負、術の相違よりは最初から歡之助は敵を呑んでかゝつた罪があり、松浦は、謹慎にそれを受けた功があるかも知れないが、勝負においては、それが申し譯にはならない。

佛頂寺は兵馬に向つて、この勝負を見ても、歡之助の術にまだ若い處があるといふ暗示を與へ、丸山が激賞した逆上を引き下げるつもりらしい。

「惜しい事をしましたね」

と兵馬は歡之助のためにその勝負を惜しがると、佛頂寺は、

「全く歡殿のために惜しいのみならず、そのまゝでは、齋藤の練兵館の名にもかゝはる。そこで雪辱のために、吉本が出かけて行つて、見事に仇を取るには取つたからいゝやうなものゝ」

といひました。

「はゝあ、誰方か、雪辱においでになつたのですか。さうしてその勝負はどうでした。お聞かせ下さい」

「吉本が行つて、松浦を打ち込んで來たから、まあ怪我も大きくならずに濟んだ」

といつて佛頂寺は、齋藤歡之助のために九州へ雪辱戰に赴いた同門の吉本甕次と松浦との試合について次の如く語りました。

無論、吉本は歡之助の後進であり、術においても比較にはならない。併し、この男はなか〳〵駈け引きがうまい。膽があつて、機略を弄することが上手だから、變化のある試合を見せる。歡之助すら持て餘した相手をこなしに、わざわざ九州へ出かけて、松浦に試合を申しこみ、さて竹刀を取つて道場に立合ふや否や、わざと松浦の拳を目がけて打ち込み、

「お籠手一本！」

と叫んで竹刀を引く。

「お籠手では無い、拳だ」

松浦は笑ひながら、その名乘りを取合はない。無論、取り合はないのが本當で、齎れにひとしい振舞ひで、一本の數に入るべきものではない。

處が、吉本豐次はまた何と思つてか、取り合はないのを知らぬ面で、竹刀をかついで道場の隅々をグル〳〵廻つてゐる。その有樣が滑稽なので、松浦が、

「何をしてゐる」

と訊ねると、吉本は拔からぬ顏で、

「たゞ今打ち落した貴殿の拳を尋ねてゐる」

この一言に松浦の怒りが心頭より發した。

松浦の怒つたのは吉本の思ふ壺であつた。手もなくその策略に引かゝつた松浦の氣は苛ら立ち太刀先きは亂れる、その虛に乘じた吉本は十二分の腕を振つて美事なお胴を一本。

「これでも九州第一か」

そこで齋藤歡之助の復讐を吉本豐次が遂げた。その吉本の如きも自分の眼中にないやうな事を佛頂寺がいふ。以上の者の仇を以下の者が打つのだから、それだから勝負といふものはわからない。非常な天才でない限り、さう格段の相違といふものがあるべき筈はない。或程度までは誰でも行けるが、ある程度以上になると容易に進むものではない。現代の人がよく、挑井、千葉、齋藤の三道場の品評をしたがるが、それとても、素人が格段をつけたがるほど優劣があるべき筈はない

といふ。

自然、話が幕府の直轄の講武所方面の武術家に及ぶ。以上の三道場は盛んなりと雖も私學である。講武所は何といつても官學である。そこの師範はまた氣位の違つた處がある。男谷下總守をはじめ、戸田八郎左衞門だの、伊庭軍兵衞だの、近藤彌之助だの、榊原健吉だの、小野（山岡）鐵太郎だのといふものゝ品評に及ぶ。それから古人の評判にまで進む。

人物は感心し難いが、さういふ批評を聞いてゐると實際家だけに耳を傾くべき處が少なくはない。兵馬は少くともそれに教へられる處がある。

斯くて、三日目に例の信濃の下諏訪に到着。

以前、問題を引き起した孫次郎の宿へは泊らず、魚屋といふのへ二人が草鞋をぬぐ。

その晩、佛頂寺と丸山は兵馬を殘して、どこかへ行つて了ひました。多分、過日の鹽尻峠で負傷した脚絆をこの地の何れへか預けて療養を加へさせてゐるのを見舞に廻つたのだらう。

宿に一人殘された兵馬は昂奮する。

明日はいよ〳〵鹽尻峠にかゝるのだ。佛頂寺等のいふ處をどこまで信じてよいかわからないが、果してその人が机龍之助であるかどうか、確證を得たわけではないが、併し疑ふべからざるものは確かに有つて存するやうだ。

鹽尻へかゝつて、その證跡をつき留めた上に、行く先を尋ぬれば當らずと雖も遠からず。どうも

大事が眼の前に迫つたやうに思ふ。

嬬が、いくら待つても佛頂寺と丸山とが歸つて來ない。

待ちあぐんだ兵馬はお先へ御免を蒙つて寢て了ひました。

心には昂奮を抱いても旅の疲れで、グッスリと眠る——明け方、眼を醒まして見ると、二人の寢床は敷かれたまゝになつてゐる。佛頂寺も丸山も昨夜のうちに歸つて來た容子がない。

一旦戻つて、また出直したとも思はれない　兵馬は氣が氣でない。

肝腎の案内者、次第によつては助太刀をも兼ねてやらうといふ剛の者が、戰ひを前にして逃げ出したわけでもあるまいに、他の大事とはいひながら餘りといへば暢氣千萬だ。

兵馬は起きて、面を洗つて、用意を整へて待つてゐるが、佛頂寺と丸山は容易に歸つて來ない。

もう外では、人の足の音、馬の鈴の音が聞える——膳は運ばれたのを、そのまゝにして箸を取らないで、二人の歸るのを待つてゐるが、二人は歸らない。日が高くなる。

宿のものにいひつけて搜させると、そのお二人は瓢簞屋といふ茶屋で女を揚げて、昨晩、散々に飲み、醉ひ倒れてまだ枕が上がらないとの報告　兵馬は聞いて苦笑ひをしました。

二人の飲み代は、お銀樣から預かつた、財布からの支出に相違ない——兵馬はそんな事は知らないが、餘りの暢氣千萬に呆れて、よし、それでは拙者が出向いて起して來るといつて、旅裝を整へて、この宿から茶屋へ向ひました。

兵馬はその茶屋といふのへ行つて見たが、確にお二人はお出でになつてゐるが、未だお眼醒になりませんといふ。

それでは、自分が直接に起して來るといつて、茶屋の者が驚くのを構はず、兵馬は二階へ上がつて、二人の寢間へ踏み込んで見ると、二人は怪しげな女と寢てゐる。

餘りの醜態に呆れ返つた兵馬は、

「各々方は、まだお休みか。拙者は一足お先に御免蒙る」

といひ放つてさつさと出て了ひました。

さうして兵馬は二人を置き去りにして、一人で下諏訪を發足すると間もなく例の鹽尻峠、峠を上りきつて五條源治の茶屋で一休みしました。

「この間、この邊の原で斬り合があつたといふ話だが本當か」

と訊ねて見ますと番頭が、

「えゝ、有りました。えらい騷ぎで……」

そこで、先達ての、いのじヶ原の斬合の話が初まる。

いづれも、自分が立會つて篤と見定めたやうな話ぶり。實は斬合といふ聲を聞くと戸を閉ぢて蔵へてゐた連中。

聞く處によると、一方の侍は女を連れて從者一人。また一方のは屈竟の武者四人といふこと。

詰り、四人と一人の爭ひで斬合が初まつて、その結果は四人の中の二人まで斬られて、他の二人がそれを此處へ擔ぎ込んで、手荒い療治を加へたといふこと。

聞いて見ると、佛頂寺と丸山が物語つた處とは少しく違ふ。それほど重傷を負ふに二人の者は何處にゐる。それも疑問にはなるが、兵馬の尋ねたいのは別の人。

「それで何かね。その相手の一人といふのは盲の武家であつたといふ話だが、それも本當か」

「それは嘘でございませう。ねえ、あなた樣。何ぼ何でも盲の方が四人の敵を相手にして勝てる道理はございませんからね」

「いかさま、左樣に思はれるが、して、その者の年の頃、人相は……」

「それがあなた、よく判りませんのでございますよ。諏訪の方からお出でになつた大抵のお客樣は一先は、これへお休み下さるのが定例でございますのに、そのお客樣ばかりは此處を素通りなさいましたものですから、つい、お見それ申しました」

「成程……それで供の者は」

「御本人はお馬に召してお出でになりましたが、若いお娘さんが一人、お駕籠で、それからお付添ひらしい御實直なお方は徒歩でございました」

「成程」

輪廓だけで内容の要領は得ないが　盲だとは信じてゐないらしい。さういふ説もあるにはあつたやうだが、そんな事は信ぜられないといつた口振り。

さも有らう、だが、最初は自分達が立會つてその果し合を篤と見定めたやうな話振り、追ひ〳〵進むと、その人相人齢すらも確とは判然しない。それと違つて、疊針と燒酎と麻の糸とで繕ひ上げた療治振りは手に取るやうに細かい。これは佛頂寺、丸山からは聞かなかつた處。

一人の弱々しい者を取り圍んで、血の雨を降らしたといふ光景は、眼前に浮んで來る。さうして四人の中、二人は瀕死の重傷を負うて此處へ擔ぎ込まれた事は疑ふべくもない。

して見れば、之からその途中、誰か一人位はその斬合を見屆けた者があるだらう。尋ねて見やう。

そこで、兵馬が、茶代を置いて立ち上がる途端に、アッと面の色を變へたのは茶屋の番頭で　それは、今しも峠を上りきつて、この店頭へ現れたのが、見覺えのある佛頂寺彌助と丸山勇仙の二人であつたからです。

五條源治の番頭が寄くなつたのも無理はありません。斯ういふお客は二度と店へ來ない方がよいのです。あの時は亡者が立ち去つたほどに喜び、鹽を撒いてその退却を祭祀つたのに、またしても舞戻つて來られたかと思ふと物凄い許りであります。

「おい番頭。この間はいかいお世話になつてしまつたな」

「どう仕まして……」

幸に、今日は何も證ぎ込んでは來なかつたが、これからどうなるか判らない。これから先が危ないのだ――番頭はこの客が早く出て行つて呉れゝばいゝと思ひました。出て行つて了つたら、その跡で戸を閉めて了はうかと思ひました。

「宇津木君、先刻は君に飛んだ處を見せて了つて面目がない」

投からぬ面の佛頂寺に對して、宇津木兵馬が、

「一足お先へ出掛けました」

「さあ、いのじゝ原へ行かう」

番頭を安心させたのは佛頂寺、丸山が店へ腰を上ろさないで、先來の客を促して前途へ向けて出發を急ぐからであります。全く、斯ういふお客は、一刻も早く立ち去つて貰ひさへすればよい。

三人が打ち連れて、いのじゝ原方面へ立ち去つたので、番頭の面に初めて生ける色が現れました。

兵馬を中に挾さんで峠の道を稍下りになる佛頂寺と丸山。

兵馬は、此處で奇態な人間だと、少々煙に卷かれました。

是前の醜態は感心しないが、あの醜態を少くとも忽ちの間に脱却して、相當に旅裝を整へて一氣に、此處まで駈けつけて來た轉換の早さに、相當に感心しない譯には行かない。あの體では終日耽溺から救はるゝ術はあるまいと見えたのに。

「は、は、は、は」

佛頂寺は聲高く笑ひ、こんな事は朝飯前だといはぬ許りに、

「修業盛りの若い時分には……」

吉原に流連けしてゐても、朝の寒稽古には後れた例しがない。遊女屋の温かい蒲團から道場の硬つた板の間へ未練會釋もなく身を拔げ出す融通自在を自慢面で話す。

その時、いのじゝ原の方を見廻すと、縱隊を作つた眞黑な一團の人が、此方へ向いて上つて來る。それを見下ろし加減に眺めつゝ下る三人の者。

「おや、あれは何だらう」

馬も無ければ、駕籠もない。槍も先箱も無い。たゞ眞黑な縱隊に、笠だけが茸の簇生したやうに續いてゐる。

「成程」

三人が何とも判定を下し兼ねて行くと、先方も近付いて來る。道も殆んど平になる。そこで見當がついて見ると、何の事だ、これは旅の行商の一隊であつた。笠に眼袢、甲掛、背に荷物、甲斐々々しい裝ひ、併も、それが男ではなく凡て女、數は都合十名程。

やがて、此方の三人と、その女行商人とは細い道でこんがらかる。

これは、白根山の麓あたりに住む「山の娘」の一行でありました。

今しも松本平方面へ行商に出掛けて、故郷へ歸るのか、さうでなければ伊奈方面へ足を入れる途

中と見える。
その以前、机龍之助は駿河から甲州路への德間峠で、計らずもこの「山の娘」達に救はれたことがある。
佛頂寺と丸山は、この山の娘だちの縱列とこんがらかつて、やがていのじヶ原へすり抜けました。
すり抜けた時に佛頂寺彌助が、
「どうかすると、あんなのゝ中に素敵なのがゐる」
といひますと、丸山勇仙が、
「年增で一人、娘で二人ばかり堪らないのがゐたよ」
「おや宇津木がゐない」
と見れば、宇津木兵馬がゐない。山の娘の縱列に呑まれて了つたのか、三人打ち連れて來たうちの一人がゐない。忘れ物でもしたやうに振り返ると、宇津木兵馬は、ずつと後れて路の傍に、行商の女の一人と頻に話合つてゐるのを認めましたから、
「おや」
佛頂寺と丸山が狐にでも憑まれたやうに感じました。
「何を話してゐるのだらう」
暫く待つてゐたが、その話が存外手間が取れるので、

「すつかり話が持てゝるぜ」
「容子が訝しい」
といひました。少し嫉けるやうな口ぶりでもあります。
「おや〳〵、女共が皆んな野原へ荷物を卸して休みだした。それだのに宇津木とあの女ばかりは立話に夢中だ」
「何か宇津木の奴、頻に手眞似をして女を宥めてゐる」
「女奴は泣いてるぢやないか。涙を拭いてゐる容子だ」
實際、離れて見ると意外な光景には違ひありません。
行商の一隊が丸くなつて取り卷いて休んでゐる中に、宇津木と、その山の娘のうちの一人とが、頻に懷かしさうな立話をつゞけてゐる。
佛頂寺と丸山とは、それをぼんやりと何時までも見てゐなければならない有樣となつてゐる。調子が少し變つて來ました。
山の娘たちは密集を得意とする。里に出る時は散逸しても、險山難路を過ぐる時は必ず集合する。事急なる時は必ず密集する。密集すれば獅子も針鼠を食ふことが出來ない。ナポレオンもアレキサンダーも密集の利益を認めてゐた。廿餘人の女が密集すれば、如何なる兇漢も、ちよつと手が下せまい。

そこで密集は力である。どうかすると山の娘たちはこの密集の中に窮鳥を包容することがある。如何にもこの密集の中へ包んで白根の山ふところへ持ち込んで了へば、捜索の人を永久に隱匿することが出來る。天保の大鹽の餘黨のうちにも、これ等の手によつて、山の奥へ隱され、再び世に出でない安樂の生涯を終つたものがあるといふ。江川太郎左衞門ほどの英物が竹藪に化けて、齋藤彌九郎を引つれ、甲州へ穩密に入り込んだのもそのためであつたが、遂に得る處無くして終つた。

女は弱いことになつてゐるが、それでも團結はやはり力である。「山の娘」たちは團結的に訓練されてゐる。

佛頂寺と丸山は兵馬を後にして、忌々しさうに歩き出し、

「こゝだ！」

二人、足を止めたのは、いのじヶ原の丁度眞中ごろ。

あの時の不思議な立合ひ、二人の眼の前に、過ぎにし劍刄上の戲れがまき起る。

この時分、宇津木兵馬は漸く、女との立話が濟んで、二人の跡を追うて來るのを認めます。佛頂寺彌助は、その當時、机龍之助が立つた處に立つて、兵馬の來るのを待つてゐる。

山の娘たちは草原の上に休んだまゝで、申し合せたやうに、此方を眺めてゐる。

兵馬が急いで、二人の跡を追ひかけて、こゝへやつて來た時、以前、龍之助が立つてゐた處に立つてゐた佛頂寺が、

「宇津木、問題の場所はこゝだ。こゝにそれ、斯うして……」

兵馬を、麾いた佛頂寺彌助の氣色何となく穩かならず、どういふ料簡か、近づく兵馬を尻目にかけて、腰なる刀を拔いて正眼に構へたのは意外でもあり物騒千萬でもある。

どうもこれは穩かでない。

何も態々、またさう輕々しく刀の鞘を外さなくてもいゝではないか。

仕方話をするのに眞劍を拔いて見せる必要もないではないか。

兵馬は佛頂寺の刀を拔いたのを大人げないと思ひ、丸山勇仙ですらが意外に打たれたやうです。

佛頂寺はそれに頓著なしに、

「斯うだ。こゝへ下がつてこの通りに構へたものと思はつしやい。いゝかい、目は見えないのだよ」

といつて佛頂寺は自分の眼をつぶりました。彼は、先日の龍之助の取つた通りの型をして見せるのです。

そこで兵馬は、一足下がつて、その型を篤と見定めました。

佛頂寺は、冷然として、何處までも本人の型通りに、青眼、心持ち刀を右へ斜につけた姿勢で動かうとはしない。

「いよ！　そつくり」

と丸山勇仙が頓狂な聲を揚げました。佛頂寺の型が、龍之助の音無うつしにそつくり出來たものだから、音羽屋！　とでも云ひたくなつたのでせうが、音羽屋ともいへないから、それで單にそつくりといつて見たものでせう。併し、佛頂寺は笑はず、兵馬は痛切に、その型を打ち眺めてゐると、佛頂寺が、

「宇津木、どうだ、わかるか。わかつたら打ち込んで見給へ」

と、やはり目をつぶつたまゝで云ひました。

「うむ」

兵馬は佛頂寺の型を身を入れて眺めてゐるばかりです。

「わかるまいな」

佛頂寺は、何時までも冷然と構へてゐる。丸山勇仙が、妙な面で、それを横から眺めながら兵馬に向ひ、

「宇津木君、構はないから佛頂寺を斬つて了ひ給へ、あゝしてゐる處を」

傍から唆かけて見る。

兵馬は無言で、佛頂寺の型を睨めてゐる。佛頂寺は澄し返つて、その姿勢を何時までも崩すことではない。

佛頂寺の態度は冷やかなものだが、それを見つめてゐる兵馬の額に汗のにじんで來るのを認める。その眼が輝やいて來るのを認める。息づかひの荒くなるのを認める。

丸山勇仙が、そこで漸く一種の恐怖に襲はれて來ました。

この男は、學問の心得は相當にあるが、劍術は出來ない――これは前にいつた通り、そこで最初は佛頂寺の型を芝居もどきに冷やかして見たが、戯中自ら眞ありとでもいふのか、但しは、冗談が眞劍になつたのか、佛頂寺の構へたしらの切り方の刻々に眞に迫り行くのが怖ろしく、それと相對した兵馬の態度が、いよ〳〵眞劍になりさうなのに恐怖を感じ出しました。

よくある事で、酒の上の冗談から果し合ひになつたり、申し合ひの勝負が遺恨角力に變ずることも無いではない。そこで、暢氣な丸山勇仙が、本當に怖れを感じ出して來たのも無理はありません。

兵馬、これは斬れまい」

佛頂寺が、またも冷然として云ひ放つと、

「何を」

笠を投げ捨てた兵馬は勢ひ込んで刀を拔き合せて了ひました。

それ見た事か――勝負心の魔力といふものは、得て斯うなるものだ。

兵馬は、遂に離れて、佛頂寺の青眼に對する相青眼の形を取つて、ヂリ〳〵と、その足の裏の大

地に食ひ込むのがわかる。
それを見た丸山勇仙が堪り兼ねて、
「おい、佛頂寺、止せよ。冗談は止せよ。第一、この俺が迷惑するではないか。宇津木、君も刀を引いた方がいゝぜ」
最初は囃したり唆かけたりして見た勇仙は、双方の間に立つて途方に暮れながら騒ぎ出しました。
丸山勇仙が騒ぎ出したのみならず、遥か離れて休んでゐた山の娘たちも、遠くこの光景を見て總立ちになりました。
「おい、佛頂寺、冗戯は止せよ。宇津木、刀を引けよ」
丸山勇仙は、うろ〳〵として両者の間を飛びまはる。
然も、佛頂寺は冷然として動かず、宇津木は全力を盡して向つてゐる。
「止せつたら、止し給へ、つまらん芝居をするなよ」
流石の勇仙が弱りきつて泣かぬばかりに飛び廻つてゐるのを氣の毒に思つたか佛頂寺が、今までつぶつてゐた両眼を見開いて、
「これなら打ち込めるだらう」
「ちえッ」
と兵馬は打ち込まないで、刀を引きました。

「おどかすなよ、本當に」
丸山勇仙は、ホッと安心して胸を撫で下ろす。刀を鞘に納めた佛頂寺。
「眼のあるのと無いのとは、これだけ違ふ」
同じく刀を納めて額の汗を拭いて兵馬は、
「その通り……」
といひました。
一旦、總立ちになつて遠くこの光景を眺めた山の娘達もそこで靜まりました。
やがて三人は、また打ち連れて歩き出す。これより先、間もない處に屋根に拳石を乗せた一軒茶屋がある。そこへ立寄れば、過日の接戦の裏、五條源治の茶屋で知らない處を聞くことが出來たらう。兵馬もまた有力な手がゝりを得たかも知れないが、そこは素通りしてしまつて、鹽尻峠を下り盡すと、鹽尻の阿禮の社。
そこで、宇津木兵馬が聞き合せた處によると、どうも龍之助らしい一行が、これから木曾路へは向はないで五千石の通りを松本方面へ赴いた形跡だけは確であることを知りました。
兎も角も松本平。そこが捜索の一つの根原地とならなければならぬ。
三人は、いざとばかり、鹽尻の茶屋を立つて五千石の通りを松本へ向はんとする。
この宿の外れまで來ると、路傍の家の戸板に大きな繪看板が出てゐる。繪看板ではない。繪の辻

ビラでしたけれど、大きなのをけば〳〵しく掲げてあつた處から、繪看板だと許り思ひました。

「ほゝう、松本の町へ海老藏が乘込んで來たぞ」

丸山勇仙が早くもその大きな辻ビラの前に立ちました。見れば眞中に大きく、

江戸大歌舞伎、市川海老藏

と認めてある。海老の土が胡麗化されてゐるのを知らず、丸山も佛頂寺も、等しく、あゝ海老藏が來たなと思ひました。

宇津木兵馬も無論、土と老とを見分ける程に興味を持つては居りません。

海老藏の名は市川の家に取つては團十郎よりも重い筈の名であります。

佛頂寺と丸山が、從來全く芝居を見ない人間であるか、或は最もよく芝居を見る人間であるか、どちらかならば宜かつたが、兩人共に話の種になる程度で海老藏を見るには見てゐる。併し無論、道庵流に皮肉に見ることなどは知らないし、武藝者の大雜把な頭に海老藏の名前丈けが浸み込んでゐるものですからその繪ビラを見て、

「松本へ海老藏が來たな。此奴は一番見ずばなるまい」

といふ氣になりました。

兵馬の芝居を知らないことは、これ等の人々より一層上で、さりとて、宇治山田の米友程に絶對に、そんなものが頭に無いといふ程ではないが、今は、芝居處の沙汰ではない。

處が佛頂寺と丸山は、松本へ著いたら市中へ宿を取らずに、先づ淺間の溫泉へ行かうといふ話をしてゐる。それを聞いてゐると、何處までも遊山氣取りです。

一體、この連中、亡者見たやうに道中を上下しながら、斯うも暢氣なことがいつてゐられるのは不思議だ。一體、路用の財源は何所から出るのだらうと、兵馬は眞面目に人の懷まで心配して見ました。併し、まあこの位に胸が出來、武藝者として面が賣れてゐれば、到る處に相當の知己があつて、多少の路用には事缺かないのだらう——お銀樣と別れた後の自分は淋しい。人の氣も知らないで、といつたやうな氣分にもなりました。

さうして松本を目差してゆくと　松本方面から、飄然と旅をして來た浪士體の精悍な男が一人、

「やあ、佛頂寺……」

と、突然先方から言葉を掛けると、

「おや、川上」

と佛頂寺が合はせました。

「何を迂路々々してゐるのだ」

先方がいふ。

「吾々は亡者だから、氣の向いた處を行きつ戻りつしてゐる。君は、さうして、ちよこ〳〵と何處から來て何處へ急ぐのだ」

「松代からやつて來たが、之から上方へ上るのだ」
「吾々はまたこの同勢で淺間の溫泉へ行かうといふのだ。君も附合ないか」
「さうしては居られぬ」
といつて、この男はさつさと行き過ぎて了ひました。
「川上の奴、松代へ何しに行つたのだ」
「態々行つたのぢやあるまい。江戸からの歸りがけだらう」
斯ういつて、佛頂寺と丸山とは話しながら川上と呼ばれた浪士と袂を分ちました。
兵馬は知らない人だが、その川上と呼ばれた男の精悍な面魂と、油斷のない歩き振りと、殺氣を帶びた齒切れのよい挨拶振りを開いて、何だか一種異樣な印象を與へられました。
「あれは肥後の川上彦齋といつて、穩やかでない男だ」
と佛頂寺が簡單に說明して呉れたので、兵馬が初めてその名を知る事が出來ました。
佛頂寺の註釋通り、肥後の川上彦齋は甚だ穩かでない男であります。佐久間象山を殺したのも、實はこの男でありました。象山を殺して置いて、何食はぬ面で象山の家へ行つて、平氣で寢泊りをしてゐたのもこの男であります。劍術はさのみ優れたりとは見えないが、人を斬ることには凄い腕を持つた男の一人であります。
或る時、或る席で藝者の者が、處の代官の悪評をしてゐる處へ、川上が來合せて、暫くその話に

耳を傾けて、やがて外へ出て了つた。多分小便にでも出掛るのだらうと思つてゐると、やがて平氣な面をして立ち戻つた川上を見ると、片手に生首を提げてゐた。それはたゞ今評判に上つた悪代官の首であつた——
當時、人を斬るといへば必ず斬つた者が三人はある。武州の近藤勇、薩摩の中村半次郎（桐野利秋）——それと肥後の川上彦齋。

十二

根岸の御行の松の下の神尾主膳の新屋敷の一間で、青梅の裏宿の七兵衞が頻に氣障な眞似をしてゐます。
がんりきと違つて七兵衞は、あんまり氣障な眞似をしたがらない男でありますが、どうしたものか此頃は頻に氣障な眞似をしたがる。
といふのは、毎度、いゝ加減の時刻になると、百目蠟燭を二挺まで燈し連らねて、その下でこれ見よがしに錢勘定を初める事であります。
金錢や學問は有つても無い振りをしてゐる處に、幾分奥床しい所もあらうといふものを、斯う洗ひざらひブチまけて、これ見よがしの錢勘定を初めたんでは、全くお座が冷めて了ひます。
事實、七兵衞の前に、堆高く積み上げられた金銀はお座の冷めるほど、根太の落ちるほど大した

もので、隣の千隆寺から持つて來たお賽錢を引くり返しただけでは斯うは行きますまい。近在へ盗み蓄へて置いたのを、殘らずといはないまでも、手に屆く限り持ち込んで、こゝへ斯うして積み上げて錢勘定を初めたものとしか見えません。第一、分量においてお座の冷めるほど、根太の落ちるほど積み上げられたのみでなく、種類においても大判小判を初め鐚錢に至るまで、有ゆる種類が網羅されてあり、それを山に積んで右から左へ種類分けにして、奉書の紙へ包んで見たり、ほごしたり、叺へ納めて見たり出して見たりしてゐる。

それを、また、いゝ氣になつてその隣の一間で、脇息に肱を置いて、頬に眺めてゐる人があります。

これ見よがしに、金銀をブチまけるのも氣障だが、人の金銀を涎を垂らして眺めてゐる奴も、いゝ加減の物好きでなければならぬ。その物好きは、お絹といふ女です。

これは猫に小判ではない。確に猫に鰹節ですが、この猫は牙を鳴らして、飛びかゝりはしないが、猫撫で聲をして、

「七兵衞さん、眩しくつて堪らないから、蠟燭を一挺にしたらどうです」

「へ、へ、へ、いや、これで結構でございますよ」

見向きもしないで、また新たに小判の包みを一つザクリと切つてブチまけたのは、慾々氣障です。

「小判のやうですね」

「へ、へ、小判でございます、

「贋ぢやあるまいね」

「どう致しまして……小判も、小判、正直正銘の隠長小判でございますよ」

「本當かい」

「論より證據ぢやございませんか。一枚嘗めて御覽なさいまし」

といつて七兵衞が、その小判のうちの一枚を取つて、敷居越の隣座敷のお絹の膝元まで、高い處から土器を投げるやうな手つきで抛ると、それがお絹の脇息の下へつきました。

「お見せな」

お絹はその一枚を手に取り上げて、妙な面をして眺めました。

「色合からして違ひませう

「さうですね」

「それから品格が違ひます」

「さうかしら」

「これと比べて御覽遊ばせ——此方のは、常陸院様の時代にお吹替へになりました元錄小判でございますよ」

といつて、七兵衞はまた一枚の小判を取つて、高い處から土器を抛るやうな手つきでお絹の脇息

の下まで送りました。
「お見せな」
それを、また拾ひ上げたお絹は花札をめくるやうな手つきで、以前のと扇子閉きに持ち添へて眺め入ると、
「色合から品格――第一厚味が違ひませう」
「成程」
「時代が下ると金銀の質まで下がります」
七兵衛は抜からぬ面で、
「御通用の金銀を見ますと、その時代の御政治向きと、人氣が、手に取るやうにわかるから不思議ぢやございませんか」
と「三貨圖彙」の著者でもいひさうな事をいふ。
「まあ、篤と御覽下さい。この慶長小判の品格といひ、光澤といひ細工の落著いた工合といひ、見るからに威光が備はつてゐて、何となしに有難味に打たれるぢやございませんか」
自分も慶長小判の一枚を取り上げて、さも有難さうに見入ります。
「さういはれゝば、さうです」
とお絹も感心したやうに慶長小判の色合に見とれてゐる。

「この小判一枚を見ても、權現樣の威勢と、その御政治向の賴母しさがわかるぢやございませんか」
「成程ね」
「天下をお取りになるには、智仁勇ばかりではいけませんよ。やつぱりお金が無けりやあね。まったよくしたもので、天下をお取りになる樣な方には自然、お金の運も向いて來るものですからね。權現樣はお金持でした……その權現樣をお金持にして上げたのは甲州武田のお能役者で大藏といふのが、これが目きゝで伊豆の北山や、佐渡の金山を開いて上げたのも、あの大藏といふお能役者の働きでございましたよ。この慶長小判の質のいゝのも、つまりその時の手柄で、權現樣の御治世には諸國に金銀の山が澤山に出來、牛車や馬につけ並べた金銀の御運上が引きりなしにつゞいたさうで、昔の人の話では、佐渡ヶ島は金銀で築立てた山で、この金銀を一箱に十二貫目づゝ詰めて百箱五十駄積みの船に積み乘せ、毎年五艘十艘づゝ、風のいゝ日和を見計らつて、佐渡ヶ島から越後の港へ積みよせ、それから江戸へ持ち運ぶ御威勢は大したものだつていひました」
「妾は、そんな山は、いらないから、お金の實る木が、たゞ一本だけ欲しい」
「へ、へ、一本とは、あんまりお慾が小さ過ぎます。せめて十本も植木屋にいひつけてお取寄せになつてはいかゞです……冗談はさて措きまして、斯ういふ質のいゝ金銀を、平常遣ひに、惜し氣もなく使ひ捨てたその時代の人は豪勢なものでしたが……この通り元祿の吹替へになりますて

いと」

七兵衛は廓長小判を、そつとかたはらへ置いて、改めて元祿小判といつた一枚を手にしましたから、お絹もそれを上置きに直して比べて見てゐる。七兵衛は得意らしく、

「元祿になつて、これをお吹替へになつたのは、つまり、お上がお金の質を惡くして、そのかずりをお取りにならうといふ腹でした仕事なんですから、御覽なさい……見た處でもわかりますが、品格がグッと落ち、光澤が落ち、この通り裂け目が出來てゐます。通用の途中で裂けたり折れたり……廓長小判には摺りきれて無くなるまで、さういふ事はございません。處で、惡くなり出すと際限が無いもので、この元祿より、もう少し下等なのが出來て了ひました。御覽なさい、これですよ、これを乾字金といひましてね。金の量を思ひきり少なくして銀と銅とをしこたまブチ込んだものですから、見てさへこの通り情ない小判が出來上つちまひました」

といつて七兵衛は、また別の一枚の小判を取つて、前と同じやうに高い處から土器を投げるやうな手つきで、お絹の脇息の下まで送りますと、それを拾ひ上げて、やはり花札を持つやうに二三枚持ち並べたお絹。

「だん〳〵札が落ちて來るのね」

「お金といふ奴は惡い奴が出て來ると、いゝのが追ッ拂はれて了ふんですから、無理が通らば道理引込といつたやうなわけです、時代が惡くなると、いゝ人間といゝ金銀が隱れて、碌でもなし

が蔓ります」

七兵衛は得意になつて、正德、享保の改鑄金を初め、豆板、南鐐、一分、二朱、判金等の有ゆる種類を取り並べた上に、それ〴〵僞金までも取り揃へてお絹を煙に卷いた上に、

「何と、お絹樣——金といふものは腐るほどあつても、使はなけりや何にもなりません」

「それはさうですとも」

「そこで一つお絹樣。あなたのために家を建てゝ差上げやうと思ひます」

「結構ですね」

「家を建てるには先づ地所から求めて掛らなければなりません。如何です、恰好な處がありますか。ありませんければ、差し當りこの隣の地面を買ひ潰すことに致しまして、左樣、兎も角、六百坪、二反歩は無ければ、庭も相當には取れません。それを一坪一兩ならしと見て六百兩……」

七兵衛は百兩包みと覺しいのを六つお絹の方へ向けて形よく並べました。

「そこで普請に掛りますが……それが坪三十兩に見積つて、建坪三十坪、まあザッと千兩ですか」

七兵衛は、また百兩包みと覺しいのを、前に並べた六百兩の上に積み上げました。

「それから庭……これは差當つて三百兩も掛けて置いて」

女も少くとも二人は置かなければならない。それから男の雇人と庭師といつたやうなもの、それ

に準じての家財雜具――それをいゝ加減に七兵衞が胸算用をしては、次から次へと並べて見ると都合三千兩程になりました。

「如何です、この邊の處でお氣には召しませんか――何しろ、大名や分限の仕事と違ひまして、俺共のやる事ですから、この邊がまあ精一杯ですね」

「その邊で結構ですよ。どうも御親切に濟みません。御親切序にどうでせう、そのお金をそつくり、妾に貸して下さる譯には行きますまいか」

「お貸し申す積りで出したお金ではございません。家を建てゝ、あなた樣を住まはせてお上げ申したい爲めのお金でございます」

「同じことぢやありませんか。どの道、妾の爲めに都合して下さる御親切のお金なら、そつくり貸して下すつても同じことでせう」

「成程、御融通する以上は同じやうなものですけれど、家屋敷としてお貸し申せば目に見えますけれど、たゞお貸し申したんでは目に見えませんからな。そこにはそれ抵當といふものがありませんと」

「野暮な事をいふぢやありませんか。抵當を上げて順當に借りる位なら、何もお前から借りやうとはしませんよ」

「これは恐れ入りましたね　わつし共の金に限つて抵當はいらない、只貸せと斯う仰有るんでご

ざいますか。

「お氣の毒樣。今の身分では逆さに振つても抵當の品なんぞはありませんからね」

「無いと仰有るのは嘘です。嘘で無ければお氣がつかれないのです。お絹樣。あなたは、ちやんと、その抵當を持つておゐでになりますよ」

「え……妾の今の身で大金を借り出す抵當が何處にあると思ふの」

「有りますともさ。詰り、あなた樣の身體一つが立派な抵當になるぢやございませんかね」

「おや、お前は變な事をお云ひだね」

「隨分世間に無いことぢや無からうと心得ます」

「馬鹿におしでない。身體を抵當にお金を借りるのは世間でいふ身賣りの沙汰ぢやないか。痩せても枯れてもまだ勤め奉公をするまでには落ちないよ」

「さう惡く取つて了つちや困るぢやありませんか。いつお前樣に身賣をお薦めした者があります。よしんば身賣をお薦め申した處で、失禮ながら、御容貌は別として、あなたのお歳では判人が承知を致しますまい」

お絹は怫然として、

「冗談も休み休み云はないと罰が當りますよ」

「どうも相濟みません」

『お前達、百姓の分際で……』

「誠に相濟みません。あなた樣は御先代の神尾主膳樣御寵愛の御部屋樣。とはいへ、金錢は別物でございますから、假令、どなた樣に致せ、抵當が無くて金錢を御用立申すといふ譯には參りません。お氣に障つたら御免下さいまし」

七兵衞はさういひながら後ろの壁に押しつけてあつた鎧櫃を引出して來ました。いつの間にか、お賽錢箱が鎧櫃に代つてゐる。それを引出して來た七兵衞は、並べた金銀の包みを次から次へとこの鎧櫃の中へ藏ひ初めました。

お絹は、その手つきを冷笑氣分で見てゐましたが、さう思つて見るせゐか、七兵衞の金を藏ふ手付が堪らなく氣障です。

「恐れ入りますが、そいつを一つ……その見本を此方へお返しすなつて頂きませう」

ふいと氣が付いたやうに七兵衞は、お絹に向つて最初に提示した慶長小判を始め、見本の金銀をお絹の手元まで受取りに出ました。

「持つておいで」

お絹は脇息の上から、ザラリと金銀の見本を投げ出しました。

それを一々御叮嚀に拾ひ上げた七兵衞、

「あゝあ、私といふ人間が、こんなに金を蓄へて何にする積りなんでせう。氣の知れない話さ。女房子供がある譯ぢやなし。妾、手掛けを置いて榮耀しようといふ譯ぢやなし。これがまあ本當に賓の持ち腐れといふ奴かも知れませんが金といふ奴は皮肉な奴で、欲しくない處へは無暗に廻つて來るし、欲しいと思ふ處へは見向きもしない……」

「知らないよ」

お絹が横を向きました。

「だが、金といふ奴は有つて邪魔になる奴ぢやなし、そばへ置いとくといよいよ可愛くなる奴だが、足が早いんで困ります。錢金の事をお足とはよくいつたものさ、捉まへたと思ふと、逃げ出したがる奴で、よく世間で可愛いゝ子には旅をさせろといふが、この息子ばかりは野放しにして置いた日には締りがつかねえ」

といひながら、七兵衞は一つ一つ金包みを鎧櫃の中へ納めます。

「文句をいはないで藏つたらいゝでせう」

「はい〳〵」

「どんなに困つたつて、妾は自分の身體を抵當にしてお金を貸せなんて決していはないから」

「左樣でございませうとも」

「汚らはしい、早くお藏ひよ」

「これだけの數でございますから、さうは手ッ取早くは參りません。小さくとも六百坪の地面に、

三十坪の一戸立、火事で燒いたつて一晩はかゝりますよ」
「忌やになつちまうね」
お絹はぢれ出しました。そのほど忌やならば、この場を立つて奥へでも行つて了へば宜いのに、忌やになりながら、流し目で、七兵衞の運ぶ金包みを眺めてゐる。七兵衞は濟ました面で、氣障な手つきで相變らずゆつくりゆつくりと金包みを鎧櫃に藏ひ込んでゐる。成程　この手つきで、まだ堆高い金を藏ひ込むには夜明けまでかゝるかも知れない。七兵衞も氣が知れない男だが、口では早く藏への忌やになるのといひながら、それを横目で見て見ない態度をしながら、いつまでも座つてゐるお絹の氣も知れない。
「七兵衞さん」
「え」
「覺えておゐで」
といつて不意にお絹が立ち上がつて奥の方へ行つて了ひますと、そのあとで七兵衞は鎧櫃のそばへゴロリと横になりました。

十三

紳尾主膳は此頃「書」を稽古してゐます。これ閑居して善をなすの一つ。

そこへお絹がやつて來て。
「ねえ、あなた」
殿樣とも若樣ともいはず、あなたといつて甘つたるい口。
「何だ」
主膳は法帖とお絹の面を等分に見る。
「七兵衞の奴、忌な奴ぢやありませんか」
「ふーむ」
主膳は、サラ〳〵と文字を書きながら聞き流してゐる。
「もう今日で七日といふもの、あゝやつて頑張つて動かうともしないで、見せつけがましい金番をしてゐるのは、何て圖々しい奴でせう」
「ふーむ」
主膳は同じく聞き流して、サラ〳〵と入木道を試みる。
「それで、夜になると、何ともいへない忌な手つきをして錢勘定を初めるのです。昨晩なんぞは御覽なさい……」
お絹が躍起になる。主膳は入木道の筆を休めて面を上げると、朝日が障子に黑繪の竹を寫してゐる。

「他の珍寶ヲ數ヘテ何ノ益カアルト、從來サウトウトシテ、ミダリニ行ズルヲ覺フ……」
と神尾主膳が柄にもないことを呟きました。けれどもお絹の頭には何の効目もなく、
「昨晩あたりの氣障さ加減といつたらお話になつたものぢやありません。隱長小判から今時の贋金まで兩換へ屋の見本宜しくズラリと並べた上、この近所の地面を買ひつぶして坪一兩あてにして何百兩、それに建前や庭の普請を見つもつてこれ〳〵ざつと三千兩ばかりの正金を眼の前に積んでこの邊でお氣に召しませんか、お氣に召さなければそれまでといひながら、またそのお金を何ともいへない忌な手つきで藏ひにかゝる處なんぞは、男ならハリ倒してやりたい位なものでした」
「ふゝん」
と神尾主膳が嘲笑ひ。
「それほど、忌な手つきを、眺めてゐるがものは無いぢやないか」
「だつて、あなた手出しは出來ませんもの」
「手出しが出來なければ引込んでゐるより外はない」
「何とでも仰しやい。引込でゐられる位なら、こんな苦勞はしやしませんよ」
「ふーむ」
「あなたは、お坊ちやんね。さうして、のほゝんで字なんか書いてゐらつしやるけれど、わたしの身にもなつて御覽なさい、火の車の廻しつゞけよ」
「ふーむ」
「今、外へ出やうつたつて、簞笥はもう空つぽよ」
「ふーむ」
「妾も、この通り著たつきりなのよ。芝居どころぢやない、明るい日では外へ用足しに出る著替へも無くなつて了つてるぢやありませんか、これから先、どうしませう」
「成程」
「成程ぢやありません。何とか心配をして下さいましな。妾の醉興ばかしぢやありませんよ。一つは、あなたを世に出して上げたいから」
「それはわかつてゐる。そこで一つ、俺も足立とも相談をして、何とか動きをつけやうと謀らんでゐる處だ」
「そんな緩漫な事を仰しやつてゐる時節ではござんすまい。現在、眼の前にあの通り、金銀の山が轉がり込んでゐるぢやありませんか。あれをどうにも出來ないで、指を啣へて見てゐるなんてあんまりな……」
「可けない。あゝいふのは可けない。度胸を据ゑてかゝつてゐる仕事には、武田信玄でも手が出せない」

「ホントに焦れつたい」
辞はない時は、神尾にも何處か鷹揚な處がある。お絹はそれを焦れつたがつてゐる。
「ねえ、あなた、今日は七兵衛の奴が珍しく何處かへ出かけて了ひました。その後に鎧櫃が置きつ放しにしてありますから、見るだけでも見て下さい」
「鎧櫃がどうしたの」
「その鎧櫃の中に、見せびらかしの金銀が一ぱい詰め込んでありますのを、置きつ放しで七兵衛の奴が、珍しく早朝から何處かへ行きましたから、見るだけ見ておやり下さいと申し上げてゐるのです。」
「見たつて仕方がないぢやないか。金銀は見るものでは無くて使ふものだ、使へない金銀は見たつて仕方がない」
「あれだ、あれだからお殿様は仕方がない——」
とお絹は神尾主膳の膝を突つきました。酒亂の兆さない時の神尾主膳は、突つつきたくなるほどに氣のよく見えることもある。
「仕方が無いつたつて仕方がない——無い袖は振れないから」
「有り過ぎるのです。鎧櫃の中には金銀のお錢が有り過ぎて唸つてゐるぢやありませんか、天の與ふるものを取らざれば禍その身に及ぶといふ事を御存知はありませんか」

「はゝあ、天の與ふるもの……」
主膳は、うんざりして、もうスタ道をサラ〳〵とやる元氣もないらしい。
「つまり、妾達に使はせたいと思つて、七兵衛の奴があゝして持ち運んで來たものでせう。それを使つてやらなければ、あなた冥利に盡きるぢやありませんか」
「だから、お前の智慧で、いくらでも引出してお使ひなさい」
「けれども、相手が悪いから、妾の智慧ばかりでは、どうにもなりません」
「お前の智慧でやれないことは、拙者にもやれやう筈がない」
「三人寄れば文珠の智慧とありますから、何とか智慧をお貸し下さいまし。ほんとに人事ではありますまい」
「いけない。隱す奴なら何とか方法もあらうが、持ち出して見せる奴が取れるものか」
「いゝえ、取れます。その道を以てすれば……」
「その道とは」
「その道が御相談ぢやありませんか。まあ、兎も角も、見るだけ御覽下さいまし。現在、眼の前にある寶の山を御覽になれば、また別な智慧が出ない限りもありますまい」
「では、まあ、兎も角見に行かう」
神尾主膳は、たうとうお絹に引き立てられて、七兵衛の籠つてゐた座敷へ廊下傳ひに出て行きま

した。
それは申すまでも無く、昨晩、百目蠟燭を二つまで燈して、七兵衛が金銀の山を築いてゐた座敷。
日中になると、却つて暗澹として物凄いやうな座敷。
この七日間といふもの、仕出し辨當を取つて頑張つてゐた七兵衛が、どうしたものか今日は朝から不在。
この座敷の當座の主人が不在にかゝはらず、鎧櫃だけは八疊敷の眞中に端然として置き据ゑられてある。
主膳はズツトとこの座敷の中へ入り込んで鎧櫃の傍へ近寄りましたが、お絹は態と座敷へは入らず、廊下の外に立つて少々氣を配つてゐるのは、もしや七兵衛が歸つて來たらと見張りの體に見えます。
鎧櫃の上に手をかけて見た神尾主膳。あの百姓め、何處からこんな洒落た具足櫃を持つて來たといふ見得で、塗と前後ろと金具を一寸吟味した上で、念のために蓋へ力を入れて見たが錠が堅く下りてゐる。一寸押して見ると手應へが重い。
果して、お絹のいふ通り、これへ一杯の金銀が詰めてあるとすれば、その量は莫大なものといはなければならぬ。
女の眼には無垢も鍍金も判りはしない。たゞ黄金の光さへしてゐれば容易く眩惑されて了ふのだ

——と主膳は冷笑氣分になりました。
やがて張番をしてゐたお絹もやつて來て、いひ合したやうに、二人が鎧櫃の前後に手をかけて動かして見たけれど、ビクとも應へません。
事實、この中へ、一杯の金銀が入つてゐるなら——金銀でなく贋金であつても、これへ一杯詰められてゐた日には、一人や二人の手では、一寸始末に行かない。
この暗澹たる座敷の中で、鎧櫃を前に二人は顔を見合せて笑ひました。
笑つたのがきつかけで、主膳は手持無沙汰の態でこの座敷を出掛けると、お絹もついて座敷を出る。
神尾は以前の居間へ戻つたが、もう法帖どころではない。
お絹も、そは〳〵として落着かない。
氣の知れないのは七兵衛で、この七日の間、夜も晝も仕出し辨當で鎧櫃の傍に頑張つてゐながら、今日といふ日になると、朝から出掛けて、正午時分になつても、夕方になつても、たうとう夜になつても歸つて來ない。
それを氣にしてゐるのは寧ろ神尾主膳とお絹とで、お絹の如きは幾度、その廊下を行きつ戻りつして、この座敷を覗いて見たか知れない。覗いて見る度に晝なほ暗い室内に人の氣配はなく、鎧櫃のみがビクとも動かずに控へてゐる。

それを見るとホッと息をつきながら、また新たに心配のやうなものが加はる。

遂にその夜が明けるまで、七兵衛は歸つて來ませんでした。七兵衛が歸つて來ないでも、鎧櫃の嚴然たる形は少しも崩れてはゐない。斯うなると嚴然たる鎧櫃その者が判じ物のやうになつて、財寶を殘していつた當人よりも、殘されて行つた他人の方が心配の負擔を背負はされる。

知らず識らず、神尾とお絹とはこの鎧櫃の番人にされて了ひました。代る〴〵二人が見廻りに來る。來ない時は、二人の心が鎧櫃をグル〳〵廻つてゐる。

何所へ行つたらう——その翌日も、たうとう七兵衛は歸つて來ない。夕方も夜も。

主膳とお絹は、またもいひ合したやうに二人が前後から鎧櫃を圍んで、遂にその錠前へ手をかけて見た處で、それを壞さうとか、こぢようとかする程の決心ではなく、たゞ、錠前の締り工合を一寸障つて見た位の處でありますが、その締り工合はまた嚴として、許さぬ關の權威を守つてゐるから、それ以上は手を引くより外はない。

馬鹿にしてゐる——三日目の夕方まで七兵衛が歸らないので、神尾の堪忍袋が綻びかけました。

この堪忍袋。誰も堪忍袋を要求した者はない筈だが、それでも神尾自身になつて見ると、相當に氣を使つてゐたらしい。三日まで七兵衛の音も沙汰もなかつたその夕、神尾がいら〳〵してゐる處へお絹が酒を薦めました。

酒を薦めて惡い事は知つて知り拔いて、それを取り上げてゐるお絹が、稀にはといつて一杯の酒を薦めたのが、神尾のこの鬱陶しい氣分を猛烈にする。

一杯——二杯。

そこでお絹が、七兵衛の奴の氣障で皮肉で憎いことを說き立てる。詰まりあゝして大金を放り出して、乾ききつてゐる吾々の前へ出して置くのは、吾々の弱身を知つて、迚も手出しが出來まいと高を括つての仕事だ。金錢は欲しいとはいはないが、その仕向け方が癪ぢやありませんかと……いふやうな事を煽り立てる。

久し振りの酒が利いて——無論、まだ酒亂の兆す程度には至らないし、またそこまで至らしめないやうに、そばで加減はしてゐるが、神尾主膳が早くも別人の趣をなして不意に立ち上がり、

「よし、目に物を見せて呉れる」

長押にあつた九尺柄の槍を取つて、無二無三にかの暗澹たる鎧櫃の間へ走り込んだのを、お絹は引留めやうともせず、

主膳が九尺柄の槍を取つて、かの暗澹たる鎧櫃の座敷へ侵入しました。

槍を取つて、件の鎧櫃を暫く見詰めてゐた神尾主膳。

お絹が差出した手燭の光が、神尾の心を野性的に勢ひ付けたやうです。

「憎い奴。目に物見せて呉れる」

この見せつけがましい鎧櫃一個がこの際、骨を碎いてやりたい程に憎らしくなる。

「エイ」

といつて、鎧櫃の前の羣板の柔らかさうな處へ勢ひ込んで槍を立てると、難なくブツリと入りました。

それを引抜いて、また一槍、また一槍。ブツリ〳〵と槍を突き込み、突き滑らして後、神尾はホツと息を吐いて、槍の石突を取り直して、その穴を明けた處をコヂて、次に手をもつて板をメリ〳〵と引き裂くと、穴は忽ちに擴大する。そこへ突きつけたお絹の手燭の光に燦爛として目を眩ます許りなる金銀の光。

神尾は槍を投げ捨てゝバラリ〳〵とその金銀を引出してはバラ撒き、掴み出しては投げ散らすものですから、暗澹たる座敷の中が黄金白銀の花。

神尾は、燃え立つやうな眼付をして、手に任せては　金銀を掴み出して、四邊一面にバラ撒く。

一時、その光にクラ〳〵と眩惑したお絹は、遂にその手燭を疊の上へさし置いて、兩の手を以て木の葉の舞ふ如く散亂する金銀を掻き集めに掛ります。

斯うなると神尾主膳の野性が酒ならぬものゝ勢ひに煽られて、宛然酒に魅せられた酒亂の時の本能が露出し、手に當たる金銀の外、包みの儘で引き出した封金をも、態と荒らかに封を切つて投げ出したものですから、その、燦爛たる光景はまた見物です――大にしては紀文なるものが芳原で黄金の節分をやつた時のやうに、小にしては梅忠なるものが依託金の包みを切つて阿波の大壺なるものを驚かした時のやうに――放蕩兒に取つては人の珍重がるものを粗末に扱ふことに、相當の興味を覺えるものらしい。神尾主膳も取つては撒き、取つては散らしてゐるうちに、遂に撒き散らし投げ散らすことに興味が加速度を加へたらしく、狂暴の程度で働き出してゐる。

お絹もまた、拾へば拾ふ程に、集めれば集める程に、その事自身に興味を煽られて了つてゐる、こゝには紀文の時のやうに吾れ勝ちに爭ふ幇間末社の類もなし、梅忠の時のやうに先づ以て後日の祟りといふものも無いらしい。有つた處でそれは相手が違ふし、第一、自分が直接の責任者ではなく、いはば、神尾を煽てゝ骨を折らせ、自分は濡手で掴み取をしてゐるだけの立場なのだから、お絹としては大放心で、吾れを忘れるのも無理があるまい。

もうこれ以上は――神尾も手が屆かなくなつた　鎧櫃の底はまだ深い。向ふも遠いけれども、ヂ開けた穴の大きさに限りがあるものだから、そこで手の屆く限りは掴み出して了つて、再び穴を繰り廣げるか、さうで無ければ、櫃を打ち壞すか、引くり返すかしない事には取り出せなくなつたので、神尾が手を休めて見返ると、お絹が拾ひ集めてはゐるが、お絹一人の手では間に合ひ兼ねて、四邊は、燦爛たる黄金白銀の落葉の秋の景色でしたから、この目覺しさに自分のした事を乍ら、自分のした事に目を覺して、その　驚　しい金銀の落葉に眩惑し、現心で、その中の一枚を拾ひ取つて見ると、疑ふ方なき正德判の眞物……

その時に廊下で咳拂ひがして、人の足音が聞え出す。七兵衛が歸つて來たのです。

その咳拂ひと足の音を聞くと、吾れを忘れてゐたお絹が、はつと膽を冷しました。

「あ」

一方を見返へると自分達が開け放して置いた處に、七兵衞がヌッと立つて此方の狼藉を見ながら、ニヤリ〳〵と笑つてゐます。

「七兵衞か」

と神尾主膳も槍を手にして、歸つて來た七兵衞を見返りながら、てれ隱しの苦笑ひです。たゞ隱しきれないのは、室内に燦爛たる黄金白銀の落葉の光。

「殿樣、御冗戯を遊ばしちや不可ません。御入用ならば、そのまゝそつくりお持ち下さればいゝに……」

七兵衞は、何時までも障子の外から此方を覗いてニタリ〳〵と笑つてゐるばかり。

「七兵衞、天下の財寶を粗末にするな」

と主膳がいふ。

主膳も、多少の酒と黄金の光に一時眩惑されて兇暴性を發揮して見たけれど、今宵の酒量は亂に至るほど進んではゐず、黄金性の魅惑は、かりにも所有主と名のつく者が來て見れば幻滅を感じないといふこともなく、斯うなつて見ると手に下げてゐる淦までが手持無沙汰で、引込みのつかない形でゐる。

お絹も又、室内に燦爛たる黄金の光を今更、袖で隱す譯にもゆかず、拾ひ集めて當人に還付するのも變なもの。殆ど立場を失つた形でてれきつてゐる。

第一、所有主そのものが、怒りもしなければ怒鳴りもせず、外でニタ〳〵笑つてゐる許りですから、空氣の緊張を缺くこと夥しい。妙な三悚が出來上がつて、この室内のてれ加減が何處で落着くか際限なく見えた時、氣を利かした積りか、お絹の持つて來て疊の上へ置いた手燭の蠟燭がフッと消えました。これは蠟燭が特に氣を利かしてこの場のてれ加減を救つたといふ譯でもなく、風が吹き込んで吹き消したのでもなく、慾に目の眩んだ人間のために顧みられなかつたものだから、以前は、相當に壽命のあつた蠟燭も、この際敢なき最期を遂げたのであります。

「七兵衞さん、惡い氣でしたのぢやないから堪忍してお呉れ。殿樣の御氣性で、ホンの一時の座興なんだから、元はといへば、お前があんまり、ひけらかすから惡いのさ」

暗くなつて　初めてお絹が白々しい申し譯をする。

「なあに宜うございますとも、斯うしてお世話になつてゐる以上は何事も共有といつたやうなものでございますからね。御入用だけお使ひ下さいまし、御自由に」

先夜とは打つて變つた白々しい氣前振りを見せた云ひ分

暗い間のバッを利用して、お絹は神尾主膳の手を取つてこの座敷を連れ出して了ひました。跡に殘された七兵衞、ドッカと胡座をかいて、ニタ〳〵笑ひがやまない。

先方は見えない積り、此方は暗い處でよく物が見える。神尾の手を引いて、ソッと抜け出したお絹といふ女の物ごし、散亂した金銀に心を殘して出て行く足どり――あの足どりでは、足の裏へ小判の二三枚は喰付けて出たかも知れない。惡い時に歸つたものだ。

然し、これが緣になつて、その翌日、七兵衞は表向いて神尾主膳に紹介されました。

打ち開けた話になつて見ると、お互に相當に賴母しい處がある。賴母しい處といふのは、世間並にいへば、あんまり賴母しくない處だが、七兵衞は神尾の急を救ふために、無條件で鎧櫃の中を融通する約束。今は、先夜お絹にしたやうた見せつけ振りでも無く、勿體も付けず、サラリと投げ出したのは神尾に取つても、お絹に取つても賴母しい事この上なし。

處で一つ、七兵衞の方からも交換條件が神尾に向つて提出される。これはお絹の身體を抵當にんぞといふ嫌味なものではなく、七兵衞としての一つの大望でありました。

その翌日、七兵衞は神尾主膳に向つて、自分は盜人だといふことを大膽に打ち明けて了ひました。

主膳も、それを聞いて存外驚かず、大方そんな事だらうといふ面付。

盜人ではあるが自分は質の惡い盜人ではないといひますと、主膳が世間に質の良い盜人といふものがあるのかと、變な面をしました。

有りますとも……盜人の社會へ入つて見れば、質のいゝのも惡いのも、氣取つたのも氣取らないのも、澁味なのも、華美なのも、大きいのも、小さいのも千差萬別の種類があるうち、自分は質の良い方の盜人だといふと、神尾が笑つて、自分で質が良いといふのだから間違ひは無からうと冷やかす。

そこで、七兵衞がいふには、自分の盜人振りの質の良いといふのは、盜んで人を泣かすやうな金は盜まず、盜んだ金を自分の道樂三昧には使はず……殊に自分は盜みをするその事に趣味を感じてゐるのだから、盜んだ跡の金銀財寶そのものにはあまり執着を感じてゐない。

假令ば、此處に斯うして古金銀から今時の贋金まで一通り盜み並べて見たが、これもホンの見本調べをやつて見た丈けのもので、もうそれだけの知識を備へたから、綺麗薩張りと、あなたに差上げて了つても惜しいと思はない――詰まり、盜むことの興味が自分の生命で、盜み出した財物は樂しみをした澤だから何の惜し氣もない――といつて神尾主膳を煙に捲きました。

併し、また七兵衞は眞顏になつて、自分とても他に何か相當の天分と仕事を以て生れて來たのだらう。幼少の敎育がよくて、己の天分を順當に發達さへさせて貰れたら、あながち盜人にならずとも、他に出世の道があつたに相違ないといふ述懷を漏らします。

「そりやさうだ。盜人をする丈けの才能と苦心を他に利用すれば立派なものになる」

と神尾も眞面目に同情しました。

併し、今となつては仕方がない。自分は斯うして盜むことに唯一の趣味を感じてゐると、盜み難いものほど盜んで見たいといふ氣になる。

そこで、一つの大望がある。何とこの大望を聞いては下さるまいか。
何だい、その大望といふのは。石川五右衞門がしたやうに、大閤の寢首でもかゝうといふのかい。
いゝえ、さういふ譯ではございません――實は。
七兵衞の大望といふのは斯うです。
德川初期の歷史を知つてゐるものは、家康が金銀に豐富であつたことゝ、その金銀を掘り出すのに苦心したことを知つてゐる。
その中、豐臣家から分捕つた「竹流し分銅」といふ黃金がある。
この「竹流し分銅」は一枚の長さ一尺一寸、幅九寸八分、目方四十一貫、その價、昔の小判にして一萬五千兩に當るといふことを聞いてゐる。それを德川が豐臣から分捕つた時には、たしか五十八枚、大阪の亂後、家康が井伊直孝と藤堂高虎の功を賞して手づから、その一枚づゝを與へた外には、「行軍守城用、莫作尋常費」の銘を打たせて大阪城內へ祕藏して置いた。
その後、改鑄の事があつて、四代以來、この分銅へ手をつけ出し、今は殘り少なになつてはゐるが、まだ有るには有ると聞いてゐる。それは何處にあるのか、やはり四代以前の時のやうに大阪城內に祕藏されてゐるのか、或ひは江戶城の內に持ち越されて來てゐるのか――盜人冥利には、その分銅を手に取つて一目拜むだけ拜んで置きたいものだが、自分にはその所在の當がつかない――何と神尾の殿樣、誓つて、あなたに御迷惑はかけませんが、あなたのお手で、その黃金の所

在の點だけがお判りになりますまいか――それが判りさへ致せば自分が一人で行つて拜見をして參りますと七兵衞がいふ。

十四

其日の夕方、七兵衞の姿は芝の三田四國町の薩摩屋敷の附近に現れました。
薩摩屋敷の中では、一群の豪傑連が、その時分、額を鳩めて、江戶城へ火をつけることの相談です。江戶城の西丸のどこへ、どういふ手段で火をつけるかといふこと、その先決問題は、どうしたら一番有効に江戶城內へ忍び込むことが出來るか。
かほどの問題も、こゝでは聲をひそめて語るの必要がなく、子供が野火をつけに行くほどの、いたづら心で取扱はれる。
彼等は關八州を蜂の巢のやうにつき亂すと共に、江戶城の西丸へ火の手を上げる。これが天下を引くり返す口火だと考へてゐるものが多い。
それに比ぶれば、七兵衞の野心などは罪のないもので、「行軍守城用、莫作尋常費」とある黃金の分銅一枚を見さへすれば滿足するのですが、併し、その苦心の程度に至つては、これ等の豪傑に讓らないのみならず、それよりも一層むづかしい仕事になるのは、彼等のは火をつけて騷がせさへすればよいのだが、七兵衞のは手に入れて拜まなければならない。

さて、斯うして七兵衛が、三田の四國町の薩摩屋敷の芝濱へ向いた方の通用門の附近を通りかゝつた時分、中ではこんな評定をしてゐたが、塀外の道の兩側には夥しい人出。

今しも、通用門から異種異形の一大行列が繰出されて來るのを、黒山のやうな兩側の人だかりが見物してゐる。

よつて、七兵衛も、その中に立つて、これを眺める。

何のために、誰がしたいたづらか、今しも薩摩屋敷の中から繰出して來る一大行列は、乞食の行列であります。有りと有ゆる種類の乞食が無數に列を成して通用門から外へと食み出して來る。

その事の體を見てあれば、不具者も五體滿足なのも取交ぜて、老若男女の乞食といふ乞食が、各々その盛裝を凝らし、菰を著るべきものは別仕立のきたないのを著、襤褸の滿艦飾を施し、今日を限りの哀れつぽい聲を振りしぼつて、

「右や左のお旦那樣……たよりない哀れな者をお惠み下さいまし」

門内から吐き出されるこの乞食の行列は、いつまで經つても盡るといふことを知らないらしい。

或は一旦、外へ出てまた一方の門から繰り込んでは出直すのかとさへ疑はれるが、事實は、やはり出るだけの正味が門内に貯へられてあることに相違なく、人をしてよくまあ江戸中にこれだけの乞食があるものだと思はせました。

なほ且、これ等、多數の乞食連のうちには、單に盛裝を凝らして商賣ものゝ哀れつぽい聲で、

「右や左のお旦那樣……たよりない者をお助け下さいまし」

を繰り返すだけの無藝大食ばかりではなく、中には凝つた意匠で破れ三味線をベコ〳〵やりながら、

雨の夜に、日本近く、とぼけて流れこむ浦川へ、黒船は、乘りこむ八百人、大づゝ小づゝ

を打ちならべ、羅紗せう〳〵緋のつゝぽ襦袢……

大津繪もどきを唸るのがあるかと思へば、木魚をボク〳〵やり出して、

そも〳〵この度、京都の騷動、聞いてもくんねえ、長州事件の咽喉元過ぐれば、熱さを忘れる譬に違はぬ、天下の旗本、今の時節を何と思ふぞ、一同こぞつて愁訴をやらかせ、二百年來寢ながら食つた御恩を報ずる時節はこゝだぞ、萬石以上の四十八館、槍先揃へて中國征伐一手に引受け、奮發しなさい、チヤカポコ〳〵

それに負けず一方にはまた、

菊は咲く咲く、葵は枯れる。

西ぢや轡の音がする。

と唄ひ囃し跳り狂つてゐるものもある。その千態萬狀、たしかに珍しい見物ではある。七兵衛も呆れながら飽かず眺めて居りました。

十五

辨信さん――

信州白骨の温泉で、お雪は机に向つて辨信へ宛ての手紙を書いてゐる。

辨信さん、お變りはありませんか。妾、この頃、絶えずあなたの事を思ひ出してゐますのよ。誰よりも、あなたの事を、どうかすると、不意に、枕元で、あなたの聲がするものですから、眼を醒まして見ますと、それは、妾の空耳でした。

どうして、妾、こんなに、あなたの事ばかり氣になるのか判りませんわ。

外に思出さねばならぬ人も澤山ありませうのに、辨信さんの面影ばかりが妾の眼の前にちらつい て、辨信さんの聲ばかりが、妾の耳に殘つてゐるのは、不思議に思はれてなりません。

それはね、妾、斯う思ひますのよ。辨信さんは本當に、妾の事を思つてゐて下さる。その眞心が深く、妾の心に通じてゐるから、それで、妾が辨信さんを忘れられないものにしてゐるのぢやないでせうか。かうして、遠く離れてゐましても、辨信さんは、絶えず、妾の身の上を心配してゐて下さる。そのお心が夢にも現にも、妾の上を離れないから、それで、妾は、不意にあなたの面影を見たり、聲を聞いたりするのぢやないかと思つてよ。

本當に、辨信さん、あなたほど深く人の事を思つて下さるお方はありません。それは、妾にして

下さるばかりではなく、どなたに對しても、あなたといふ方は、眞の底から親切氣を持つておいでになる。妾は、それを、しみ〴〵と感心しないことはありません。

けれども、親切も度に過ぎると可笑しいことがあるのぢやない……思ひやりも、あまり眞劍になると却つて、人の心を痛めるやうな結果になりはしないかと、妾、餘計な心配をすることもありますのよ。

辨信さん、妾がこちらへ來る前に、あなたは、妾の事をいひました、

「お雪ちやん、あなたは、もう年頃の娘さんだとばかり思つて居りますのに、さういふ事を仰有るのだから驚いてしまひます。信濃の國の白骨のお湯とやらが、良いお湯と聞いた許りで、その間の道中がドノ位難澁だか、その事を、あなたは考へておいでになりません。また、その難澁の道中をつれ立つて行く人達が、善い人か惡い人かそれも考へてはおいでになりません――私が此處で打ちあけて申し上げますと、あなたはその白骨のお湯へお出でになつた後か、その途中で屹度殺されてしまひます、活きては歸ることが出來ません」

この言葉が、今でもどうかすると、妾の胸を刺してなりません。何かの機會に、はつとこの言葉を思ひ出すと胸を刺されるやうな痛みを覺えますが、それでも暫くすると可笑くなつて、辨信さんらしい取越苦勞を笑ひます。

妾に笑はれて、あなたは口惜しいとお思ひにはなりますまい。あなたの仰有つたのが本當なら笑

ひ事ではありません、妾が斯うして辨信さんらしい取越苦勞に思ひ出し笑ひを止める事が出來ないのは、妾に取つては勿論の事、あなたにも喜んで頂かねばなりません。

辨信さん、妾は無事で道中を濟まし、無事でこの温泉へ著いて、今も無事に暮してゐますから御安心下さいませ。

但し、無事といひますうちにも——道中では怖い思ひもしました、又此處へ來てからも、色々の人と逢ひ、珍しいものも見たり聞いたり致しました。

辨信さん、あなたの安心の爲に、私は此の頃の生活振りを逐一記してお知らせを致したいと存じます……

こゝまで筆を運んで、お雪はほつれかゝる髪の毛を撫でました。お雪はこの頃、髪を洗ひ髪にして、後ろへ下げて輕く結んでゐる、自分もこの洗ひ髪が薩張してゐると思ふし、人も又お雪ちやんには似合つてゐると褒めもする、山中外出の機會もなし、慣れて了へば誰もそれを新らい女だといつて誹るものもありません。

外へ出て見ますと、周圍の高い山から、雪が毎日、下界へ一尺宛下つて參ります。やがてこの雪が山も谷も家も、悉皆埋めて了ふ事でせうが、まだ、谷々は、紅葉の秋といつていゝ處もありますから、お天氣の良い日は、私は、無名沼の邊りまで、毎日のやうに散歩に出かけます。

溫泉の溫かさは、夏も冬も變りはありません。この頃、私は一人でお湯に入るのが好きになりました。一人でお湯に入りながら、色々の事を考へるのが好きになりました。

大きな湯槽が八つもありまして、それ〴〵湯加減してありますから、どれでも自分の肌に合つたのへ入ることが自由です。眞白な湯槽、透き透るお湯の中に心ゆくまゝ浸つてゐると、この山奥の別な世界にゐるとは思はれません。

昨日も、さうして、恍然とお湯に浸つてゐると、不意に戸が開いて、淺吉さんが入つて來ましたか、私のゐるのを見つけて、きまり悪さうに引返さうとしますから、

「淺吉さん、御遠慮なく」

といひます。

「えゝ、どうぞ」

と、取つてもつかぬやうな事をいつて逃げるやうに出て行つて了ひました。

何て、あの人は氣の弱い人でせう。この頃になつて、一層いぢ〳〵した容子が目立つてお氣の毒でなりません。

全く、あの人を見るとお氣の毒になつて了ひます、死神にでも憑かれたといふのは、あゝいふのかも知れません。この頃では、力をつけて上げても慰めて上げても駄目です。人に逢ふのを厭がること、土の中の獸が日の光を厭がるやうに恐れて、こそ〳〵と逃げるやうに引込んでしまひます。

それに引かへて、あのお内儀さんの元氣なことは――お湯に入つてゐる處を見ますと、肉つきはお相撲さんのやうで、色艶は年增盛りのやうで、それで、もう五十の坂を越してゐるのですから、驚きます。

「あの野郎、もう長いことはないよ」

といふのは多分淺吉さんの事でせう。お内儀さんは、淺吉さんを連れて來て、さん〳〵玩具にして、そんが漸く瘦せ衰へて行くのを喜んで眺めてゐるやうです。淺吉さんていふ人も何て意氣地がないでせう。全く意氣地無し――といつては濟みませんけれど、本當に齒痒いほど氣の弱い人です。お内儀さんは、淺吉さんを、こんな山の中へ連れて來て嬲殺しにしてゐるのです。さうしてその苦しがつて死ぬのを面白がつて眺めてゐるのだとしか思はれないことがあつて、私は悚然とします。それでも、付合つて見ると、お内儀さんといふ人も、別段惡い人だとは思はれず――淺吉さんも可哀さうには可哀さうだが、お内儀さんも憎いといふ氣にはなれず、私は、知らず識らずその何方へも同情を持つて了ふのです。一方が可哀さうなら、一方を憎まねばならない筈なのに――それとも、二人共、別に惡いといふ程の人ではないのでせうか。又、私の頭が、紛糾かつて、善惡の差別がつかないのでせうか。

判らないのは、それ許りぢや有りません。淺吉さんは、あれほど、お内儀さんから虐待を受けながら、お内儀さんを思ひ切れないんですね。無茶苦茶に苛められて生命を搾り取られる事が、却つてあの人には本望なのか知らと思はれる事もありますのです。ですから、私には、うつかり口は出せません。夫婦喧嘩の中裁は後で恨まれると聞きましたが、あの人達は夫婦ではありませんけれども、惡い時は死ぬの生きるのと、良い時は馬鹿によくなつて了ふのですから、妾は障らないでゐるのが無事だと思つてゐます。

ですけれども、さうしてゐるのは、妾が、あのお内儀さんに加勢して、淺吉さんを見殺しにしてゐるかのやうに思はれてならないこともあります。

辨信さん、こんな事を、あなたに書いて上げるんぢやありませんけれど、あなたが、妾の爲めにいつて下すつたことが妾の身の上でなくて、あの淺吉さんといふ人の身の上にかゝつてゐるやうな氣持がしてならないものですから、ついこんな事を書く氣になつて了ひました。

前に申し上げる通り、妾は道中も無事、此處へ來てもほんとに幸福の感じこそ致せ、殺すとか死ぬとか、そんな厭な事は　妾の身の廻りには寄り附きさうもありませんのに、あの淺吉さんといふ人には、最初から、それが著いて廻つてゐるやうです。可哀想でなりませんけれど、今申し上げたやうな譯で力になつて上げる術がありませんのよ。

今日も、朝からお天氣がいゝものですから、妾は一人で、小梨平を通り、低い笹原を分けて無名沼へ遊びに參りました。

その途中、硫黄ヶ嶽の煙と、乘鞍ヶ嶽の雪とが、妾の足を留めました。

火を噴く山から天に舞ひ上る大蛇のやうな煙、高い山の雪の日に輝く銀の塔を磨いたやうな色、淺緑の深い色の空氣。それから密林の間を下つて無名沼の邊に來て見ますと、いつも見る水の色が今日はまた何といふ鮮かでしたらう。

どうして、こんなに無名の沼が、妾を引きつけるのでせう。妾は天氣さへよければ、毎日この沼を訪づれないといふ日はありません。それは、やがて雪が谷を埋め盡す時分になつては、一寸も戸の外へ出ることが出來ないから、今のうちに外の空氣を吸へるだけ吸ひ、歩けるだけの距離を歩いて置くといふ自然の勢ひが、妾を斯うして輕快に外へ出して遊ばせるのかも知れません。それにしても、無名沼は、妾を引つける力が有り過ぎます。

妾は踊るやうな足取りで、沼の邊を廻つて、離れ岩の處まで參りました。

前にも申し上げた通り、今日の沼の色の鮮かさは格別に見えました。

御覧なさい、水底には一面に絹糸を靡かしたやうな藻草が生えてゐるではありませんか。その細い柔らかな藻草の上に、星のやうな形をした眞白な小さい花が咲いて、その花だけが、しほらしい色をして水の上に浮び出してゐるではありませんか。

何處からともなく動いて來る水、多分、この、妾が立つてゐた離れ岩の下から湧いて流れ出して來るのかも知れません。それが、ぢつと見てゐなければ判らないほどの動きで、その白い米粒のやうな藻の花を動かしてゐるのです。

見てゐると、どうしても、その花が可愛い唇を動かして、妾に話し掛けてゐるとしか思はれないので、妾も、つい、

「お前は何ていふ花」

と訊ねて見ましたが、その時、私は、殆んど人心地を失ふ程に驚いて了ひました。その白い藻の花の中に絡まつて、人間の死屍が一つ仰向けに沈んでゐるのです。何といふ怖ろしいこと。

「あゝ、人が殺されて、この水の底に沈んでゐる。誰か來て下さい。」

と聲を限りに叫ばうとしましたが、その瞬間に氣がついて見ますと、何の事でせう、それは屍體でも人の面でもありません。妾といふ者の姿が藻の花の間の水に映つてゐたのです。

あまりの事に拍子抜けがして、自分ながら呆れ返つて了ひましたけれど、それでも妾の頭に殘つた今の怖ろしさが全く消えたのではありません。それから何ともいへない厭な氣持ちになつて、あれ程好きな無名沼を逃げるやうに歸つて來ました。

明日からは、假令、どのやうな、よい天氣でも、あの沼へ行くことを止めやうと思ひながら。

辨信さん。

妾は、その無名沼から逃げ歸る途中、あの低い笹原の處まで來ますと、ぱつたりと淺吉さんに行き逢つて了ひました。

「淺吉さん、鐙小屋ですか、と、妾が訊ねますと、淺吉さんは何とも返事をしないで、すうつと

通り過ぎて了ひました。

多分、沼の近所にある鏡小屋の神主さんの處へ、あの人達はよく出かけるさうですから、妾が、さういつて訊ねて見たのに、淺吉さんは一言の返事もせずに通り過ぎて了つたのですから、妾も氣になりました。氣の故か知ら、今日のあの人の顏の眞青な事、何時も元氣のない人ではありながら、今日はまた何といふ青い色でせう。まるで螢の光るやうに顏が透き徹つてゐました。だもんですから、妾は、あんまり氣になつて振り返つて見ますと、おや、もうあの人はゐないのです。そこは笹原が可なり廣く續いた處であるのに、今、通り過ぎたと思つた淺吉さんの姿が、もう見えないものですから、妾の身の毛が悚ちました。

でも、急いで、あの林の中へ入つて了つたのだらうと、妾も暫く立ち留まつて、林の方を見て居りましたが、不安心は、愈々込み上げて來る許りです。

あの人は、何時でや林の中で縊れて死なうとしたのを、妾が見付けて、助けて上げた事がある位ですから、若しやと、妾は、堪らない程の不安に襲はれましたけれども、その時は、どうしたものか、後を追掛けて安否を突き留めやうとする程の勇氣が、どうしても出ませんでした。

無名沼の水の面影といひ、今の淺吉さんの蒼い色といひ、悉皆、妾を脅かして、例令一足でも後ろへ戻らうとする力を與へませんのみならず、先へ〳〵と押し倒されるやうな力で、宿まで走つて參りましたのです。

宿へ歸つて見ると、此處は又何といふ靜けさでせう。溪谷の間を曲つて來る日の光といふものは斯うも明るく澄み渡るものかと思はれるばかり。障子も部屋の隅々も、私のこの手紙を書いてゐる机の上の紙も筆も墨も、透き徹る程明るく澄み渡つてゐます。

辨信さん。

今日の手紙はこの位にして置きませう。けれども、これがあなたのお手元まで著くのは何時の事だか知れないわね。それでも、勘のいゝあなたは、私が此處で筆を運んでゐるこの事を、もう、頭の中へちやんと感じておいでなさるかも知れないわ。

茂ちやんを大事にして上げて下さい。あの子は、よく獨歩きをして山の中へでも何でも平氣で行つて了ふから、妾、それが案じられます。遠く出て遊ばないやうに、よく辨信さんの吩咐を聞いて、來年の春、妾達が歸るまで、順柔くお留守居をしてゐて下さいつて——よくいつて聞かせてあげて下さい。

では、今日は、これで筆を止めて、私は、これから下へ參ります。下の大きな爐の傍でこれから團欒が開かれるのです。池田先生が欲の講義をして下さるのに、また新らしく俳諧師の先生がお出でになつて面白い話をして下さいます。それが濟むと皆して世間話、山の話、獵の話などで爐邊はいつでも春のやうな賑かさです。

辨信さん、ではお大切に。

あ、まだ申し殘しました。お喜び下さい、あの先生の眼が段々良くなりますのよ。
厚い霞が一枚々々に取れて、頭が輕くなるやうだとこの間も仰有いました。
辨信さん、あなたはこの世界は暗いものと最初から定めておいでになりますのに、あの先生は暗いのがお好きか、明るくしたい御料簡なのか、妾には誑張それが判りません。

十六

（その翌々日、お雪は又慌しい思ひで筆を執り初めました）

辨信さん。
前の手紙をまだ、あなたの處へ差上げる手段もつかないうちに、妾は又大急ぎで、繼ぎ足しをしなければならない必要に迫られました。
先日の手紙に有りましたでせう——妾が、無名沼から歸る時に、低い笹原の中で淺吉さんにゆきあつたことを、さうして、妾が言葉を掛けたのにあの人は何の返事もなく、蠻のやうな眞蒼な面をしてゆき過ぎて了つた事を。
あれから今日で三日目です。淺吉さんが歸りません——いゝえ、歸りました。歸りましたけれど、驚いてはいけません。あの人は、たうとう死んで了ひましたのよ。
それが、どうでせう、處もあらうに、あの無名沼の中で……捜して引き上げて來た人達の話によ

ると、まあ、私どうしていゝか判らなくなります。丁度、私が立つてゐた離れ岩の下の絹糸のやうな藻の中に、淺吉さんの死體が、絡まれて、水の中へ幽靈のやうに浮いたり沈んだりしてゐたといふことです。
あゝ、それでは、妾が人の死骸と思つたのは、あの人が沈んでゐたのではないか。私の見たのは自分の影が映つたと見たのが誤りで、最初、驚かされた幻のやうな姿が却つて本當ではなかつたでせうか。私は今、自分で自分の頭が判らなくなりました。若し、最初に見た水の中の幻が本當に淺吉さんの死骸だつたとすれば、後の笹原で行きあつたあの人は誰でせう——私、これを書きながら怖くなつて堪りません。
確なのですよ。私が、あの笹原でパッタリと着い面をした淺吉さんに行きあつたことは、決して嘘ではありませんのよ。
「淺吉さん、鐙小屋へですか」
ですから、私は、さういつて言葉をかけたのですが、それに返事の無かつたことも確です。さうして振り返つて見た時分には、可なり廣い笹原の何處にもあの人の姿が見えなかつたことも本當なのです。
妾、何だか、自分迄が、この世の人でないやうな氣持ちがしてなりません。
三日の間、水に浸つてゐた淺吉さんの姿は蠟のやうに眞白なさうです。連れて來て宿の一間に眠

るやうに休んでおいでなさうですけれども、妾には、何うしても今見舞に行く勇氣がありません。何でも人の話には、水には落てたけれども、あの人は一口も水を呑んではゐなかつたさうで、岩の上で轉んで何處かを強く打つて氣絶してから水に落たんだらうなんて、皆さんが噂をしてゐます。けれども、妾には、何うしても怪我とは思はれません。覺悟の上の死方です。あの人が死なうと覺悟をしたのは今に初まつたことぢやありませんもの……それは、妾だけが、よく知つてゐます。ですから、あの人が怪我で水へ落ちたとは、どうしても思はれません。それにしても水を一滴も飲んでゐなかつたといふのが變ぢやありませんか。

辨信さん。斯ういひますと、あなたは屹度、それではなぜ、あの時に引き留めなかつたと仰有るでせう。私も今になつては重々それを濟まない事と思ひますが、あの時の、私には、とてもそれをするだけの勇氣が無かつたことは前に申し上げた通りなのです。

何にしても淺吉さんは可哀さうなことをしました。

憎らしいのは、あのお内儀さんよ。

大勢して、淺吉さんの行方を心配して捜し廻つてゐる間に、平氣で妾の處へ遊びに來たりなんぞして、いよ〳〵淺吉さんが水に落ちてゐたといふ知らせがあつた時、妾の面を見て、嘲笑ふやうな安心したやうなあの氣味の惡い面つき。

その時こそ、妾はあのお内儀さんを憎いと思はずにはゐられませんでした。

（それから二三日經つて、お雪はまた辨信への手紙を書き續ける）

辨信さん。

この二三日、私は夢のやうな恐怖のうちに暮して了ひました。

それでも毎日、近所の山へ葬られた淺吉さんのお墓參りは缺かしたことはございません。

それだのに、あのお内儀さんといふ人はどうでせう。使ひ古しの草履を捨てるのだつて、あれより思ひきりよくはなれますまい。

妾が、あのお内儀さんを憎いと思つたのはそればかりぢやありません。昨日の事ですね、二人でお湯に入つてゐると、妾の身體をあの叔母さんがつく〳〵と見て、

「お雪さん、あなたのお乳が黑くなつてゐるのね」

といふぢやありませんか。

その時、妾は、乳の下へ針を刺されたやうに感じました。

辨信さん、あなたゞから、私はこんな事まで書いて了ふのよ。お乳が黑くなつたといふのは、娘に取つては堪忍のならない針を含んでゐることを、あなたも御存知でせうと思ひます。

妾、ちつとも　そんな覺えがありません、有らう筈もないぢやありませんか。それだのに、斯ういふ意地の惡いことをいふ。叔母さんの舌には毒のあることを沁々と感じました。何の身に覺い

こともない妾も、その時は眞赤になつて返事が出來ませんでした。もうこの叔母さんといふ人とは、一緒にお湯にも入るまい、口も利くまいとさへ思ひ込んで了ひました。

ですけれども、叔母さんといふ人は一向平氣で、妾に話しかけるものですから、つい、妾もそれに一言二言挨拶をしてる間に、つい話が進んで了ひます。憎いとも口惜しいとも思ひながら、ついあの人の口前に乘せられて先方がいへばいはれる通り返事をするやうになるのは、自分ながら齒痒いやうに思はれてなりません。一體、この叔母さんといふ人は、さう惡い人ぢや無いのか知らん。惡いとか、憎いとか思ふのは、妾の僻目といふ者か知らとまで、自分を疑つて來るやうに迄なるのは、本當に自分ながら不思議でなりませんのよ。

辨信さん。

あなたほど、本當によく人を信ずる方はございませんのね。あなたは、如何なる人をでも疑ふといふことが出來ないのね、妾も出來るならば、あなたのやうに無條件に、凡ての人を信じて、疑ふといふことをしたくありませんけれど、あの叔母さんばかりは信じやうとしても信じきれないで困つてゐます。いつそ、信ぜられないならば何處までも信ぜられない儘に、思ふさまあの叔母さんといふ人を憎んでやりたいとも思ひます。これも出來ない妾は、矢張淺吉さんと同じやうな氣の弱い人なのでせう。妾本當に人を憎むか、愛するか、どちらかに定めて了ひたいと、この頃頻にそれを思はせられてゐます。

本當に憎むことの出來ない人は、本當に愛することも出來ませんのね。

辨信さん。

あなたは違ひます。あなたは本當に愛することを知つてゐらつしやるから、又本當に憎むことを御存知です。ですから、あなたは斯うと信じたことを、どなたの前に向つても、假令その人の一時の感情を害しやうとも、自分の將來の身の上に不利益が來りませうとも少しの恐れ氣もなく、善いことは善い、惡いものは惡いと斷言をなさることが出來るのであります。妾には、それが出來ませんのよ。

どうかすると、この叔母さんが、あの淺吉さんを殺したのだ——眼前さう疑ひながら、あの叔母さんの調子よい口前に乘せられると、本當の心からあの叔母さんを憎めなくなつて了ひますのよ。

今日も學問が濟んでから、妾は淺吉さんのお墓參りにまゐります。

辨信さん。

人間には本當の處は惡人といふものは無いものでせうか——さうでなければこの世に善人といふものは一人も無いのでせうか。

今まで人を疑ふといふことを、あんまり知らなかつた妾は、あの叔母さんを見てから、判らなくなりました。

あの時、こんな事をいひましたよ、あの叔母さんは。

よく世間で、女でも男でも、捨てられたとか捨てたとかいつて、後で泣いたり騒いだりするが、あんな馬鹿げた話はないよ。

もと〳〵、それは關係の出來る時から知れた話ぢやないか。誰がお前、何時までも惚れたり腥たりした時のやうな心持でゐられるものですか、熟くなることもあれば冷める事もあつてこそ色戀ぢやないか。

冷めたら、蔭張りと切れて了ふ事さ。見つともないぢやないか。後を追ひ廻して死ぬの生きるの手切をよこせの、やらないのと騒ぐなんぞは、お前さん色戀をするなら眞劍に、まかり間違つたら殺されても恨みのない心持で揚らなけりや嘘ですよ。

殺したゐていゝさ。殺されたつて恨みつこなし。男なんぞは幾人でも手玉に取つておやりなさいよ。お雪さん、捨てられたの何のつて泣き面をしながら、敵を討つて下さいなんて、飛んでもない處へ泣きつくなんぞは女の面汚し。自分から觸れば落ちさうな弱身を見せて男を誘ひながら、後になつて、やれ貞操を蹂躙されましたの、弄ばれましたのと人の同情に縋らうとする女は女の風上にも置けない——

隨分、亂暴ないひ分ぢやありませんか。處が、その亂暴ないひ分が、あの叔母さんの平氣な口から出ると、耳障りに聞えないのが不思議のやうに思はれてなりません。

辨信さん。

斯うして、妾が、調子のいゝ口前に乘せられて、亂暴極まる言分を次第々々に本當の事のやうに信じて了つたらどうでせう、それを考へると、怖ろしいことではありませんか。妾がこの叔母さんと同じ心持になつて、同じ行ひが平氣でやつて行かれるやうになつたら、大變ではありませんか。

お友達の感化といふものは怖ろしいものだと豫ねて聞かされてゐました。お友達によつて人間は青くもなれば赤くもなるのだから、お友達は選ばなければならないといふことは、子供のうちから充分に教へられてゐましたが、今の、妾には選ぶにも選ばないにも、あの叔母さんの外に無いぢやありませんか。

辨信さん。これで今日も學問の時間になりました。爐邊へ行かねばなりません……

一寸お待ち下さい。茲で筆を休ませやうとしてゐると、下へ何だか騒々しい人の聲が起りましたよ。

おや！　あの聲は嘉七さんの聲ではないか。

「今、離れ岩んとこで、こねえな女頭巾を拾つて來たよ、見てお呉んなさい。こりやあ、あの高山の穀屋のお内儀さんの頭巾ぢやあんめえか。縮緬だよ、安くねえ頭巾だよ……あんな處へ落して置いちやあ風で水の中へ吹ッ飛んで了はあな。穀屋のお内儀さんはおゐでなさらねえか。頭巾を拾つて參りましたよ」

嘉七さんといふ人が離れ岩の傍で、女頭巾を拾つて來たといふ。
頭巾は拘ひませんが、妾は、あの離れ岩が忌やです。何だつて、お内儀さんは、あんな處へ行つたのでせう。
「高山のお内儀さんは今朝出たまんま、まだ歸らねえよ」
これは留さんといふ男の返事。
あのお内儀さんが今朝出たまゝ歸らない。さうして離れ岩の上の女頭巾。
辨信さん・妾の胸がまた早鐘のやうに鳴ります。行つて確めて來ます。あの叔母さんまでが離れ岩の下の水藻に沈んで了つたのではないか。何だかさう思はれてならない。

（その翌日のお雪の手紙）

辨信さん。
妾の胸にハッと來たのは無理ではありませんでした。その晩になるまで、あの叔母さんが、たうとう宿へ戻つて參りませんでした。その翌朝も。
そこで、また大騒ぎをして探しに出掛けたのですが、その心當りの第一は何處といふまでもありますまい、あの離れ岩です。現にそこには、あの叔母さんの物だらうといふ女頭巾が落ちてゐたのみならず、この間のあの藻の花が物をいはずにはゐません。

因縁事のやうに怖ろしいではありませんか。あの叔母さんが、矢張り淺吉さんと同じ處の水の中に落ちて、絹糸のやうな水藻に絡まれて死んでゐたのです。それも死に方が同じやうに、一滴の水も飲まずに、死んでゐたといふことです。
妾は、何か眼に見えない繩が、妾達の周圍に犇々と取り卷いて、その繩に觸れやうものなら、誰でも容赦のない力のあることを感じて、身も世もあらぬ思ひをせずには居られません。
この續けざまな不祥の出來事に、宿にゐる人達の評判は區々です。
淺吉さんと、あの叔さんとの間を最初から知つてゐるものは、淺吉さんの死を悲しんで、あの叔母さんがその後を追つたのだといふことを、いつてゐます。詰り、あれは別々の心中だといつて了ふ人もあつて、後から來た人達は大抵その意見に從つて、あれを離れ離れの心中だと見て了ふ者が多いのですが、妾には決してさうは思はれません。あの叔母さんといふ人が淺吉さんの後を追つて死なねばならぬほど人情のある人であつたかどうか、この手紙を御覽になればお判りになる筈です。
といつて、二人まで續いて同じ處で怪我をして、水に溺れて死ぬといふやうな事もありやう筈はありますまい。
どう思ひ詰めたつて、あの叔母さんが自分で死ぬ氣になんぞなるもんですか。
そんならば——妾は、あれこそ淺吉さんの魂が、あの叔母さんを同じ處へ引き込んで殺したもの

だとしか思はれません。さうでなければ外に解釋のしやうが無いぢやありませんか――。
それから又、或人は、その前の日、あの叔母さんが、吉田先生と一緒に沼の邊りを歩いてゐたのを見たといふものがあります――吉田先生とは机龍之助様の事――それは何でもありません。何かであつた處で、その日は叔母さんはちやんと宿へ歸つてゐますし、姿の見えなくなつたのは、その翌日からの事で、その翌日から今日迄先生はちやんと三階の柳の間に休んで居られます。尤も時折、先生は眼を冷しに外へお出でにはなりますが、いつか知れないやうに戻つては休んで了まはれたり又靜かに座つて考へておゐでになるばかりですから、誰も先生を疑ふ意味で、そんな噂を初めたのではありません。たゞ、その先の日に、あの先生と叔母さんとが沼の邊りを一緒に歩いてゐたのを見たといふことだけが、ちよつと人の口の端に上つたゞけなのです。あの先生はまだこんな出來事を御存知はありますまい。姿も成るべくお知らせをしたくないと思つてゐます。
鐙小屋の神主さんは、又室堂へ上つて行をしておゐでなさるのだから、誰もその外にあの沼の傍へ立ち入る者は無い筈です。嘉七さんは白樺の皮を取りにあの邊へ通りかゝつて、さうして頭巾を見つけ出して來たまでゞす。あゝ、又今夜は皆んなしてお通夜をしなければなりません。
辨信さん。
姿は淺吉さんの死に顔を見なかつたやうに、あの叔母さんの死に顔も見ないで了はうと思ひます。
私にはそれを見るの勇氣がありませんもの、皆さんもまた、出世前の者はさういふものか見ない

方がよいと申します……。

十七

追分から、木曾街道の本道を取らずに、北國街道を行く道庵と米友。
どうしたものか、米友の足が思ふやうに捗どらない。
輕井澤から沓掛まで一里五町、沓掛から追分まで一里三町。
そこで善光寺道を小諸へ續く原つぱで、米友がドツカと路傍の草の上に座り込んで了ひました。
「友様、どうした」
「うーん」
と米友が杖槍から荷物まで、悉皆そこへ抛り出し、足を投げ出して、上目遣ひに、道庵の面を眺めたゞけで無言。
米友のグロテスクな面に、淺間の雲と同じやうな憂鬱が三筋たなびいてゐる。
道庵はそこで杖を立てゝ信濃の山川を顧みてゐると、
「先生」
暫くあつて、米友が重苦しく道庵を呼ぶ。
「何だい」

「人が死んでも、本當に魂といふものが殘るのか」
「そりや、さうだとも」
「で、その魂はどこへ行つてるんだ」
「うむ、そりやあ……」
道庵はグッと津を呑み込んで、
「そりやあお前、地獄へも行けば極樂へも行かあな」
「地獄と極樂の外に、この世へ戻つて來る事は無えのか」
「そりや、この世へ戻つて來ることもある。魂魄この土にとゞまつて恨みを晴らさで置くべきか……」
道庵は瓢簞をあやなして、變な見得をきつて見ましたが、米友はその追究を緩めないで、
「その魂がこの世へ戻つて來るとゞこにある」
「うむ、そりやあ……そりやこの宙に彷徨つてゐてな、好きな奴へは乘りうつり、恨みのある奴には取ッつく」
「うん、それで、その魂は、どんな色をしてゐる」
「色――魂の色かい」
「この世にあるものなら色があるだらう」

「うむ――色もあるにはある。色は卽ち空、空は卽ち色なりといつて、魂だつて色が無えといふ理窟は無え」
と道庵が力みました。
「それで、どんな形をしてゐるんだね、先生、その魂は……」
米友は隙さず突つかける。
「なに、その魂の形かい……凡そ形のあるものは潰れずといふこと無く……」
とか何とかいつて見ましたけれど、流石の道庵シドロモドロで、その足もとの危ない事、酒のせゐばかりではありますまい。
事實、この一本槍は米友が手練の杖槍よりもその穗先が深い――また、この負擔は米友の肩にかけた振別を押ッつけられたよりも、道庵に取つては重い。
さきには、出任せに一種の靈魂不滅を說いて米友に聞かせたが、それこそ本當の道庵流の出任せで、かりに一時の氣休めに過ぎない。道庵自身が果して靈魂の不滅を信じてゐるかどうかは頗る怪しいものです。だから、正式に斯ういつて、色は形はとヂリ〳〵突つ込まれて見ると、相手が何處までも眞劍なのだから、魂は青い色をして、雨の夜に墓場の上で燃えてゐるなんぞと、胡魔化しきれない。
道庵は苦し紛れに、瓢簞をハタ〳〵と叩き出して見たが、瓢簞から駒も出ないし、眞理も出て來

ない。

幸か不幸か、道庵先生がソクラテス程の哲人で無かつた代りに、相手がギリシヤの若殿原程の辯論家で無かつたから、靈魂は調和か實在かの微妙な處までは進まず、

「先生、おいらは、もう一遍輕井澤へ歸りてえのだ」

米友が悠然として哲學から感傷に移りました。

米友のは難問を吹きかけて道庵を苦しめるが目的ではなく、輕井澤のお玉の事が氣になつてならない。

こゝまで足の運びの重いのも、その一種異樣なるきぬ〴〵の思ひに堪ふることが出來ないで、それが魂の問題となつて穗に現れたといふだけのもの。

この男は、もう一度、輕井澤へ歸つて、しみ〴〵とお玉といふ女と話がして見たいのだ。お玉の面影が、どうしてもお君に似てゐる。さうして特別に自分に取つては親切であつたことが忘れられない。

魂といふものがあつて、人に乘りうつるものならば、確にお君の魂はあの女に乘りうつゝてゐる。名さへ前名のお玉とあるではないか。

米友は、この二里八町の道を絶えずその事ばかり思ふて、後ろ髮を引かれ引かれてこれまで來ました。途中　幾度もこの杖も荷物も投げ出して、輕井澤へ駈け戻らうかと思ひつめては、思ひ返

し思ひ返し、こゝまで來たのだが、遂に堪へられなくなつて、こゝで投げ出したものらしい。

それを、また道庵は、何時もの氣短にも似合はず長いことかゝつて、懇々と說論して、再び米友をして荷を取つて肩にかけ、槍をついて出で立たしむる。

追分から小諸まで三里半。

まだ少々早いが、小諸の城下で泊るつもりで町へ入り込むと、早くも二人の姿を見つけた問屋場で、

「あれだぜ、あれが一昨日の日、輕井澤で裸松をやッつけた大將だ！」

といふ評判で、小諸の町へ姿を見せるが早いか、忽ちに二人が城下全體の人氣者となつて了ひました。

一昨日の出來事、米友の武勇が、僅六里を隔てた街道筋の要所に喧傳されてゐるのは、早過ぎる時間ではない。裸松その者があぶれ者で持て餘されてゐただけに、それを倒した勇者も評判が高い。で、例によつて輪に輪をかけられて、街道の次から次へと二人の行く先が指さしの的となる。

その評判が無くてさへ、ひよろ高い道庵と、ちんちくりんの米友が相伴ふて歩く形は可なり衆中の人目を引くのだから、まして、その人氣が加はつて見ると、誰でもたゞは置かう筈がない。その勇者來るの評判を證驗しようとして出て來たものが失笑する。

本來、正直な米友は小さくなつて道庵の後に食付いて行くが、道庵は大氣取りで突き袖に反り身

の定。

あの小さいのが、素敵な手利で、あれが裸松を一擊の下に倒したのだが、前のは先生で自身は手を下さないが、あの先生が手を下す日になつたら、どの位強いか底が知れない。小諸や上田の藩中に手に立つ者が一人でもあるものか——なんぞといふ評判が道庵の耳に入ると、先生愈々反り身になつて了ひ、街道狭しと歩くその氣取り方つたら、見られたものではありません。

この得意が道庵先生をして、一つの謀叛を起さしめたのは是非もありません。それは、たゞ斯うして長の道中、道庵は道庵として、米友は米友として歩いたのでは旅の興が薄いから、その時その時によつて、趣向を變へて行つたらどうだ。それには先づ、差し當り、輿論の推薦に從つて、自分は武術の先生に成り澄まし、米友をそのお弟子分に取り立てゝ、これからの道中といふ道中を、武者修行をして、道場といふ道場を片つ端しから歴訪して歩いたら面白からう。

その事、その事と、道庵が額を丁と打つて、吾れながらその妙案に感心しました。

道庵に左様な謀叛が兆したとは知らぬ米友。恥かしさうに、その後に食付いて、城下の巴屋六右衞門といふのに泊る。

併し乍ら、その翌日は相變らずの道庵は道庵、米友は米友。

二人共に別段、武藝者としての覆まつた身姿にもならないのは、道庵の折角の謀叛に米友が不同意を唱へた譯ではなく、小諸の城下を當つて見たけれども、變裝用の思はしい古書が見付からなかつたものらしい。

道庵は「鍼灸術原理」といふ古本を一冊買つて、小諸の宿を立ちました。

小諸から田中へ二里半、田中より海野へ二里、海野より上田へ二里。上田より坂木へ三里六町。

坂木より丹波島へ一里。

丹波島から善光寺までは、もう一里十二町といふホンの一息の處まで來て犀川の河原。

この河原へ來た時に月が上がつたので道庵先生が、悉皆いゝ心持になつて、渡しを渡らずに河原へ出て了ひ、明日は厭やでも善光寺、今晩は此處で思ふ存分月見をしようといひ出しました。

信州名代の川中島。月はよし、風はなし、前途の心配はなし。

米友を促して、渡し場から莚を借り、それを河原の眞中に敷いて、一瓢を中央に据ゑ、荷物を左右に並べて、東山の邊より登り、斗牛の間を徘徊しやうとする月に向つて道庵は杯を上げ、さうして意氣昂然として、川中島の由來記を語つて米友に聞かせました。

米友も、信玄と謙信とには、相當の豫備知識を持つてゐる。殊に道庵が甲陽軍鑑を楯にとつて、滔々とやり出す川中島の合戰記には、米友も知らず識らず釣込まれ、感心して聞いてゐるものだから道庵も、愈々いゝ氣になつて喋るだけ喋ると喋り疲れて瓢箪を枕にゴロリと横になつて早くも鼾の聲です。

夜もすがら川中島の月を見て、明日は善光寺といふ約束だから米友も是非なく、旅の合羽を開い

て道庵の上に打ち著せ、自分は所在なさに槍を抱へて河原の中へ、そゞろ歩きを初めたものです。
犀川の岸を、そゞろ心に米友が歩むと、行手に朧朧として黒い物影、吾れ行けば彼れも行き、吾れ止まれば彼れも止まる。米友は夢心地でその影を追ひました。
四郡を包む川中島、百里を流るゝ信濃川の上、歩み歩むと雖も歩み盡すといふことはありません　いはんや、立ち止まつては月を見ると、四周の山が月光に晴れて墨の如く眼界に落ち來たる。
月を碎いて流るゝ川の面を見ると、枚を含んで渡る人馬の響きがする、その響きに耳を傾けると
白巾に面を包み、鼠黄の胴肩衣、月毛の馬に乘つて三尺餘りの長光を拔き翳した英雄がサッと渡
打際に現れる。青貝の長柄の槍が現れて馬のさんづを突く。それが消えると、また朦朧とした黒
い物影が行きつ留まりつゝする。
興に驅られた米友は槍を下に置くと、手頃の石を拾ひ取つて力を罩めて靄の中へ投げ込んで見ま
した。
それに驚いて、楊柳の蔭から一散に飛び出して、河原を横一文字に走るものがある。
犬だらう、
と米友が思ひました。
一匹が走ると、續いて思ひもかけぬ處からまた一匹、また一匹。
その物が唸る――犬ではない。

と米友は心得顔に杖槍を拾ひ上げたが、その犬に似た真黒いものゝ影は、靄の中に消えて、唸り
の聲だけが尾を引いて物凄い。
狼だ――犬の形をして犬でない。犬の棲む可からざる處に棲むのは狼だ。この邊には狼がゐる。
飯山の正受老人は群狼の中で座禪をしたといふことを米友は知らないが、これは油斷がならない。
見廻せば前後茫々たる川中島。
あゝ、上杉謙信ではないが、自分は餘り深入りをした。道庵先生の身の上が氣に掛る。
道庵の身の上心許なしと戻つて見れば、道庵は狼にも食はれず、無事に莚の上に熟睡してゐます
から、米友も安心しました。
酔ふて沙上に臥するといふのは道庵に於いて、今に初まつたことではない。醫者の不養生を嗜め
るのは、嗜める者の愚である。
そこで米友はその處を去つて、再び川中島の川原を彷徨ふ。
時は深夜、月は冲天にある。興に乘じて米友は、手にせる杖槍を取つて高く空中に投げ上げ、そ
れを腕で受け留める。
廣東の勇士が方天戟を操る如く、南洋の土人がブーメランゲを弄する如く、米友は杖槍を投げて
は受け留め、受け留めては投げながら川中島の川原の中で獨り戯れてゐる。戯れながら川原の中
を進み行くと、やがてまた茫々として前後を忘れる。

抑々當流ノ元祖戸田清玄ハ宿願コレ有ルニヨツテ加賀國白山權現ニ一七日ノ間、毎夜參籠致ス所、何處トモナク一人ノ老人來リ御傳授有ルハ夫レコノ流ナリ

米友は高らかに戸田流の目錄をそら讀みに讀み上げました。

米友のは、戸田流と限つた譯では無い。強ひて流儀をいへば淡路流ともいふべきもの。本來は野性自然の天分に木下流の修正を加へて、それから後は不羈自由であります。自由なるが故に總ゆる格法を無視する事も出來る代りに、總ゆる格法を取つて以て吾が用に供することも出來るのであります。一寸道場覗きをしてからが、いゝ型といゝ呼吸を見て取つて自得する。

それで、この男は、別段に師匠の手から切紙、目錄、免許といつたやうな印を與へられてはゐない。さうかといつて、自ら進んで米友一流を開く程の野心も慢心も持ち合はせてはゐない。

先ヅ槍ヲ以テ敵ニ向ヒ、切折ラレテ後棒トナル、又棒切折ラレテ半棒トナル……

そこでかれは獨流の型を使ひ初めました。槍から棒に變化し、棒がまた半棒に變ずるまでの型を鮮かにやつてのけました。

自由と亂雜とは意味を異にする。修練を經て天分が整理されると、初めて自由の妙境が現れる。

自由が發して節に當ると、それが型となつて現れる。

小人は亂暴と反抗とを以て、自由なりと誤想する。

自由は型であり、禮儀であることを知らない。型は人を縛るものに非ずしてこれを行かざれば、大道無きことを人に知らしむる自由の門である。

型と禮儀を重んぜざる者に、大人となり、君子となり、達人となり、名人となり、聖域に至るの人ありといふ例を聞かない。

だが併し、型と禮儀に捉はれた人間ほど憐れむべきものは無い。それは人間に非ずして器械である。

單に器械丈けならばいゝが、その器械が壓搾器械でもあつた日には、人間の進歩を害すること之より大なるはない

或者は型から入つて自由の妙境に遊び、或者は野性を縱横に發揮して、初めて型の神妙を會得する。

無論、宇治山田の米友はその後者に屬するものであります。

今や、米友は陶然として、その型に遊ぶの人となりました。

こんな事は滅多にないのです。かつて、甲府城下の闇の破牢の晩に、この盛んなる型を見せたことがありましたが、あの時は如法暗夜のうちに必死の努力でやりました。今夜のは月明のうち興に乘じて陶然として遊ぶのです。

その型の美しさ――すべての藝道において型の神妙に入つたものは、先づ以て美しいといふよりはいひやうが無い。

惜しいことにこの美しさを見る者が月と水との外にはありません。
米友が陶然として型に遊んでゐる時、その型を破るものは道庵先生の聲であります。
「こいつは堪らねえ、こいつは堪らねえ」
道庵が突如としてうろたへ聲で騒ぎ出しましたから、米友が、一議に及ばず馳せ參じました。
見れば筵の上に眠を醒ました道庵は、合羽をかなぐり捨てゝ頻にうろたへてゐる。
聞いて見ると、今まで自分がいゝ心持で眠つてゐる處へ、不意に何物か現れて鼻つぱしをガリ〳〵と嚙つたものがあるから、驚いて跳ね起きた處だといふ。
鼻つぱしをガリ〳〵と嚙られては堪らない。併し、よく見れば道庵の鼻は完全に付いてゐるし、四方を見ても、何物も道庵を脅かしに來たものゝ形跡を認められない。
「危ねえ、危ねえ、こんな處に居つちやあゐられねえ、確に今おれの鼻つぱしを嚙りに來た奴がある」
といつて道庵は、頻に騒えながら、その荷物を掻き集めて、こんな處には一刻もゐられないといふやうな身振をする。はゝあ、それでは、最前のあの犬に似て犬でないのがやつて來て、道庵の寢込を襲つたのか。
慌てながら、うろたへてゐる道庵を見ると、ブル〳〵と胴ぶるひが止まない、怖いばかりではない惡いのだ。醉つてゐるうちこそいゝ心持で寢てゐたが　多少醒めては、川原のまん中へ莚敷では堪るまい。怖いのでうろたへてゐるのか、寒いのに怖れをなしたのか、兎に角。眠を醒ました道庵が一刻もこゝにゐられないといふ心を起したことは確ですから、米友も出立の用意をする。
出立の用意といつた處で今は夜中過ぎ、一里の道を善光寺に著いた處で、まだ戸を開けてゐる家はあるまい。第一、つい眠のさきの丹波島の渡し場だつて舟を出すまいではないか。併し思ひ立つては留めて留まらぬ道庵ではある。米友も是非なく莚を卷いて丹波島の渡し場まで來ました。
さて渡し舟はつなぎ捨てられてあるが、眠つてゐる船頭を起すも氣の毒。
道庵が心得顔に小聲で米友を唆かし、そつとその舟を引き出して乘る。
犀川の渡し、こゝを俗に丹波川といふ。水勢甚だ急にして出水の度に渡し場が變る。水の瀨が早くて棹も立たない、手ぐり繩で舟を渡す。
脊の低い米友、やつとその手ぐり繩に縋りついたが、それを操ることは妙を得てゐる。兎も角も舟は中流に乘り出す。若し、船頭が眠でも醒ましさうものなら一悶著を免れないが、幸にその事もなく舟は向ふの岸に著く。
飛び上がつた道庵は、月の光で瞬氣に立札の文字を讀むと、平水の時は一人前五十文と書いてある——そこで百文の錢を取り揃へて、舟板の上に並べて置いて申し譯をしたつもり。
程なく權堂の町へ入るには入つたが、何處とて今時分起きてゐる氣紛れはない。二三軒、宿屋を叩いて見たけれど、起きて待遇さうといふ家もない。

後町から大門前まで來る。道庵先生頻に胴ぶるひをつゞけてゐるがそこは負け惜しみ、もう二時も經てば夜が明けるだらう、夜が明けたら最後善光寺の町を引繰り返してくれやう。それまではまづ山門の隅なりと借りて一休み——

江戸へ五十七里四町
日光へ六十四里半
越後新潟へ四十八里廿七町

と大きな道標を横に睨まへ、もうこれ、更も角五十七里も來たかなと呟きながら、善光寺の境内へはいつて行く。

本來、上方を目的とする旅だから、道分から和田峠を越して下諏訪へ出るのが順序なのを、そこがまた道庵の氣性で、信濃へ來て善光寺へ參詣をしないのは佛を作つて魂を入れぬものだと意地を張つたばつかりで、こんな寒い思ひもする。

十八

それでも、どうかかうか、二人は善光寺本堂の外陣のお通夜の間に入り込んで、數多の群集の中へ割込みました。

暇なく朝參りの團體も押しかけて來る。善光寺の内外は人で滿たされる。

道庵はお通夜と朝參りの群集の中へ座り込んで、人の溫氣でいゝ心持になり前後も知らず居眠りの熟睡をはじめる。

これによつて見ると、道庵は善光寺へ參拜に來たのだか居眠りに來たのだかわからない。米友はまた群集の中に座りこんでは、頻に抹香の煙に卷かれてゐる。

何てまあ、人の混むお寺だらう。今日は特別に御緣日でゞもあるのか知ら、一體善光寺樣善光寺樣と崇めて、こんな山奥へ諸國の人が集まるのがわからない。

そこで米友が、隣席の有難さうなお婆アさんに訊ねて見ると、お婆アさんのいふ事には——、

この善光寺樣には、日本最初の阿彌陀如來樣の御像があるといふこと。

人生れてこの寺に詣ずれば、淨土の往生疑ひなしといふこと。

そこで、このお寺は一宗一派のものではなく、このお寺の御本尊樣は日本の佛像の總元締、神樣でいへば伊勢の大神宮樣所在の御地を神都と呼ぶからには、こゝは佛樣の佛都ともいふべきところだと說明する。

米友は、はゝあ、さういつたものかと思ふ。自分はその伊勢の大神宮樣のお膝元で生れたのだが、して見ればこゝに參詣するのも、神佛各々異なつた因緣があるのかも知れないと思ふ。

併し、伊勢の大神宮樣の内苑は森嚴にして犯すべからざるものがあるのに、このお寺の中の賑か

曉の光、いまだ堂内に入らざるに、香の煙は中に充ちわたり、常燈の明りおぼろなるところ、勤行の響きが朗々として起る。鬱陶しいやうでもあり、甘樂の夢路を辿るやうでもある、座つてゐるうちに何となく溫かくなり有難くもなつて、妙な世界へ引き込まれた心持で、米友は座つてゐると、

「お階段めぐり」

といふ聲で、その周圍の連中がゾロ〳〵と立ち上がるが、立ち上がつていゝのか惡いのかわからないのは米友。相變らず熟睡の居眠りから醒めない道庵。

「先生！」

米友は、そこで道庵を呼び起しました。

道庵を促してお階段めぐりも終り、やがて廊下へ出て後拜の蔭で草鞋を履いてゐる道庵と米友。殊に米友は草鞋がけが渡し場の水でしめつて、少し堅いから足へはめるのに多少の苦心を費してゐると、その頭を上から撫でゝ通るものがある。

米友、ひよいと振り仰いで見ると、たゞ今自分の頭を撫でゝ通つたのは氣品の高い一人の若い尼さんで、その周圍には數人の從者、相當年配の尼さんがついてゐる。

人を撫でた眞似をする尼さんだなと思ひながら米友が見送つてゐると、外陣から廊下階段へ溢れ出た善男善女が、その尼さんのお通り筋に並んで、一樣に頭を下げてかしこまる。

若い尼さんは、その跪づいて頭を下げてゐる無數の善男善女を、一々その手に持てる水晶の珠數で撫でゝ行く、おれを撫でたのもあの珠數だなと米友が思ひました。

米友は、可訝な顏をしてそれを見送つてゐるのに、善男善女は、仰ぎ見ることをさへしないで、その尼さんに通りながら撫でられる時、一心に念佛の聲を揚げるものもある。この尼さんの一行の過ぐるところ、荒野の中を鐵が行くやうに、人がはた〳〵と折れて跪づく。跪づいて、その珠數を頭に受けることを無上の光榮とし、その法衣の袖に觸るゝことさへが、勿體なさの極みとしてゐるらしい。

何の事だか米友にはよくわからない。たゞその通り過ぐるあとで、

「尼宮樣」

「尼宮樣」

といふ囁きが聞える。

そこで、道庵と米友とは善光寺本堂を立ち出でる。

通例の客は、まづ宿を取つてから後に本堂に參詣するのが順序なのに、道庵と米友は、參詣を濟ましてから宿の選擇にかゝる。

朝まだき、それでも外へ出て見ると善光寺平野が一時に開けて、天地が明るく朝風が身にしみて急に風物が展開したやうに思はれる。

明るいところへ出ると暗いところが疑問になる。あのお階段めぐりなるもの、何の必要があつてか態々暗いところへ下りて、人と人とが探り合ひながら暗いところを歩くのだ。

道庵が米友の不審に答へて、あれは有名な善光寺のお階段めぐりといつて、あゝして暗いところを歩いてゐるうちに、心の正しからぬものは犬になるといひ傳へがあるのだが、われ〳〵もまんざら心が曲つてばかりはゐないと見えて、犬にもならずに出て來たといふ。

併し、お前は途中、あの鍵へはさはることを忘れたらう、おれもつい失念して了つたが、探り探り廻る間に一つの鍵がある。あの鍵にさはる事が出來たものは、極樂世界に往生すると云はれてゐる。鍵には道庵も米友もさはる事を忘れたから、こいつは極樂往生は覺束ねえぞ、弱つたなと道庵が額を逆に撫でる。

それにつけてもおいとしいのはあの尼宮樣。やんごとなき御出身でありながら、八歳のお年より髮を卸して御佛に仕へ奉る。みづからの御發心でないだけに、一層おいぢらしさが身にしみると道庵が柄にもなくしほらしい同情をしたのが米友の胸をうつ。

思ひ返せば、あの尼宮樣の面影がお痛はしい。

道庵と米友が善光寺の仁王門を出でゝ札場のところまで來ると、そこで祭文語りが、參詣の善男善女の足を引きとめてゐる。

脊の高い道庵は人の後ろから、これを眺めるに骨は折れないが脊の短い米友は何が初まつてゐるのだかわからない。

道庵、その祭文語りを聞くとまたいゝ心持になつて了ひました。

祭文語りは物髮を肩にかけ、下顎に髯を生やし、黑木綿を著て、小脇差を一本さし、首に輪寶の輪袈裟をかけ、右の手に小さな錫杖、左には法螺の貝、善光寺緣起から苅萱道心の一節を語り出してゐる。

道庵が感心し顏をして頻に耳を傾けてゐるものだから、米友も聞きたくなり、人の間をうろ〳〵見たが、押し開けて中へ進むわけにも行きません。

それを一段聞くと道庵が頻に昂奮して、輕井澤で發心した武者修行の謀叛がむら〳〵と頭を擡げました。

祭文語りの悲壯な語りぶりが、はしなくも道庵の武士道心を刺戟したものかも知れません。さあこの善光寺を振り出しに、明日からは、いよ〳〵武者修行の姿となつて、木曾街道を上力までの道場といふ道場を荒してくれやう——と道庵は頻に昂奮をつゞける。

この祭文語りが、もう少し近代風に、曾我をやるとか義士傳を講ずるとか云ふならば道庵の昂奮もその謂はれがないではないが、何を云ふにも、この祭文語りは山伏に近い古風なもので、殊に語り物が、哀婉たる苅萱道心の一節と來てゐるのだから、多少の菩提心をこそ起せ、さう無暗に昂奮して武者修行熱を起した道庵の心持は解せないものだが、道庵に云はせると、また立派にそ

の謂れがあるのかも知れない。

雪をいふと、道庵の武者修行熱は必ずしも輕井澤に初まつたと云ふ譯ではなく、そのずつと以前から朔してゐるので、一度はどうか武者修行をやつて、至る處の道場といふ道場を片つぱしから荒して歩きたいといふ念願が、離れたことはなかつたのであります。

それが輕井澤の出來事によつて誘發せられ、小諸上田を通つて行くうちに、こゝで初めやうかこゝで……と幾度も思ひ込んでは見たが、衣裳から何かの都合でさうも行かず、たうとう善光寺までそのまゝで來て了つたが、此處へ來て、祭文を聞いたのでまたも激しくそれが誘發され、もう矢も楯も堪らず、明日からは是が非でも武者修行だと非常な昂奮を初め、地響きを立てゝ善光寺の門前を驚かしたものです。

さんなら、道庵先生自身は、それほど腕に覺えがあるのか――斯う云ふ先生の事だから、どこに何う云ふ鬱し藝を持つてゐないとも限らないが、輕井澤の宿で大抵手並はわかつてゐるではないか。

併し　昔をいへば、道庵も江戸市中の持て餘し者であつた茶袋の歩兵を美事に取つて押へて、群集をアッといはしたことがある。あれは天神眞揚流の逆指といふ手で――道庵自身にいはせると二兩取りの手だといふが――それから柳橋では辻斬を取つて押へたこともあるといふ。いざといへば悲一本で二千人を殺したといひ出す。

「先生は、まあ、昔でいへば張孔堂由井正雪と云つたやうなもので、武藝十八般何一つ心得ておゐでにならぬのはない……」

なんぞと持ち上げやうものなら先生納まり返つて、

「それ程でもねえのさ」

と顎を撫でるところなどは、全く始末に行かないのであります。

その先生が今や、進んで武者修行を試みやうといふのは、要するに米友といふ屈竟無類の用心棒があればこそだらうが――單にそれだけではない。先生には先生としての奇警にして正當なる自信を別に持つてゐるものゝやうです。

だが、道庵先生がドンキホーテを讀んで、その興味に驅られて武者修行を思ひ立つたものとも思はれません。

他の道樂は大抵間違つても多少の恥を掻くだけで濟むが、武者修行はやりそこなふと生命に別條がある。――假令米友がありとはいひながら、これは危氣のあり過ぎる道樂である。止した方がよい。

だが道庵の意氣は冲天の勢ひで、留めて留まらぬ勇ましさは、その足取りでも判ります。もう既に一ぱしの荒武者氣取りで、善光寺前の藤屋といふ宿へ大風に一泊を申し込んで番頭を驚かせました。

宿へ納まつてから、改めて米友を呼んで、申し渡すには、

「あの祭文を聞いてから急に武者修行をやつて見たくなつた。そこで友様、濟まねえがお前は武藝の方で、俺のお弟子分になつて貰ひてえ。さうして、木曾街道から名古屋、京大阪をかけて、道場といふ道場を荒し廻つて武藝者といふ武藝者に泡を吹かせてやりてえ。第一さうして道場廻りをして歩けば、宿賃が浮くだけでも大したものだ」

道庵先生としては詰らないことをいつたものです。道場荒しの意氣組はまあいゝとしても、宿賃が浮くなんぞは甚だ吝であります。道場廻りで、宿賃をかすらうといふやうなさもしい道庵ではない筈だが、言葉の機で、そんな事をいつて了つたものでせう。果して米友は輕々しくそれに贊成しない。第一武藝には上には上があるものだからさう物好をやるべきものではない——といふ米友の諫言は正當にして穩健なるものだが、さうかといつて思ひ止まるには道庵に自信があり過ぎる。

この自信が、匙一本で幾千の人を生かしたり殺したりする自信だから堪らない。

米友も實は心配してゐる。道庵先生頻に強がりをこそいふが、武術なんぞの素養は藝にしたくも持ち合せてゐないことは米友がよく知つてゐる。萬一、若い時、多少やつたにはやつたにした處が、この年で今まで休んでゐれば到底他流試合なぞに堪へられるものではあるまい。

どういふ積りか料簡が判らない。併し道庵の料簡の判らないのは今に初まつた事ではなく、米友には全部判らたいし、また、矢張り道庵は偉い先生で、そのする事なす事が自分等の頭では解釋し切れないのだと米友は信仰してゐるのだから、全然料簡の判らない事をやり出しても、それが時間を經ると相當の意義を爲して來ることもあるのだから、どうも仕方がない。御意の儘に任せるより外は——

そこで、武者修行を主張する道庵にも相當の自信があるので、吾れ吾れがさう危がる程の危險はないのかも知れない。また萬一の危險の際には及ばずながら自分が飛び出さうとの決心もあるから米友を口説き落した積りの道庵は、愈々有頂天で、多年の慈姑頭をほごして、それを仔細らしく左右に押し分け、鏡に向つて頻に撫でつけてゐる所は正氣の沙汰とも見えません。被布なんぞはニヤけていけねえ。脇差もこんな短けえんではいけねえ——道庵は衣裳、持物の吟味までも初めたが肝腎の道場訪問の儀式作法に至つては研究する模樣もなし、米友に訊ねやうとの氣色も見えない。

總髮を左右に押し分けた急拵への張孔堂正雪。

悪い洒落だ……と米友も呆れましたが、これといふのも、あの祭文語りを聞いて昂奮したせゐだらう。祭文が無暗に武勇傳を語つて聞かせるのも考へものだと、米友が思ひました。

道庵が、どうして斯うも武者修行をやつて見たいのだか——その最初の動機は今米友が心配して

ゐるところの如く、祭文語りから來たのも因緣であります。

これには奇にして正なる一場の物語りがある。その物語りたるや極めて興味あるエピソートとなすに足る。

件の物語りの主人公は祭文語りであつて、その祭文語りが無能が大能に通ずるの眞理を極めて渭稽なる仕方で現した所に、無限の興味があるのであります。

十九

天保の初めに、神戸に一人の祭文語りがあつた。この男、身の丈五尺九寸、體量廿七貫、見かけは堂々たるものだが、正味は祭文語り以上の何者でもなく、祭文語り以下の何者でもない。藝名を稱して山本南龍軒と呼び、毎日デロレンで暮してゐる。

男子生れて廿七貫あつてデロレンでは初まらないと。先生、ある日の事に、商賣物の法螺の貝を前に置いて、つく〴〵と熟觀する。

ところへ友達が一人遊びにやつてきて、大將何を考へ込んでゐるのだといふ。

身の丈が六尺、圖體が廿七貫もあつてデロレンでは情ないと、今も斯うして、法螺貝を前に置いて、涙をこぼしてゐるところだ、さうかといつて立身するほどの頭はなし、商賣替へをするほどの腕もなし……何かいゝ仕事はないかい。

ある〳〵、その事なら大ありだ。實はおれもつく〴〵日頃からそれを考へてゐたのだ。全くお前ほどのものを祭文語りにして置くの惜しい、お前やるつもりなら打つてつけの仕事がある——と友達がいふ。

何だい、おれにやれる仕事は？——なほ念のためにいつて置くが、圖體は大きくても法螺の貝を持つだけの力しかないのだぜ、力業は御免を蒙るよ。

そんなのではない、別段骨を折らず大威張りで日本六十餘州をめぐつて歩ける法は出來ないが、お前なら確に勤まる。

はて、そんな商賣があるものか知ら。骨を折らずに大威張りで日本六十餘州をめぐつて歩ける法があるならば早速傳授して貰ひたい。

外ではない、それは武者修行をして歩くのだと友達がいふ。

南龍軒先生、それを聞いて呆れかへり、そんな事だらうと思つた。武者修行は結構だ、法螺の貝から岩見重太郎か、宮本武藏でも吹き出してお供に連れて歩けばなほ結構だと、腹も立てないから茶化しにかゝると、友達の先生一向ひるまず、

確に、お前は武者修行をすれば大威張りで日本六十餘州をめぐつて歩ける。劍客におなりなさい。劍術の修行者だといつていたるところの道場をめぐつてお歩きなさい。到るところの道場ではお前を叮嚀にもてなして泊めてくれた上に草鞋錢をまで奉納してくれるに相違ない。こんないゝ商

賣はあるまいではないか。

成程、それはいゝ仕事に相違ないが、おれには劍術が出來ない、竹刀の持ち方さへも知らないのを御承知かい。

そこだ、憖じひ出來るより全く出來ない方がよい。そこを見込んでお前に武者修行をすゝめるのだ。少しでも出來ればボロの出る心配があるが、全く出來なければボロの出やうがない。その方法を傳授して上げやう。

先づ第一、お前の體格なら、誰が見ても一廉の武藝者だと思ふ。そこで、武藝者らしい服裝をして、然るべき劍術の道具を擔つて、道場の玄關に立つて見ろ、誰だつて脅かされらあ。

南龍軒、首を振つて、詰らない、最初に脅かして置いて、あとで足腰の立たないほどブン擲られる。

友達の曰く、そこにまた擲られない方法がある。

とはいへ、武藝者として推參する以上は立ち合はぬわけには行くまい。立ち合へばブン擲られるに極つてゐる。

けれども、そこを擲られないで、却つて尊敬を受ける祕傳があるのだが——

それは聞きたいものだね、さういふ祕傳があるならば、それこそ一夜にして名人となつたも同然。

南龍軒も馬鹿々々しいながら、多少乘氣になつたが、友達の先生はいよ〳〵眞顏で——

併し、一つは擲られなければならぬ、それもホンの一つ輕く擲られさへすれば濟む、それ以上は絶對に擲られぬ祕傳を傳授して上げやう。

頼む——多分、牛若丸が鞍馬山で天狗から授かつたのが、そんな流儀だらう、それが實行出來さへすれば、明日といはず武者修行をやつて見たいものだ。

宜しい、先づお前がその廿七貫を武藝者らしい身なりに拵へ、劍術の道具を一組買つて肩にかけ何れの道場を選ばず玄關から。怯めず臆せず案内を頼む。

取次が出て來たところで、武者修行を名乘つて、どうか大先生と一つお手合せを願ひたくて罷り出でたと申し出る。

道場の規則として、大先生の出る前に、必ずお弟子の誰かれと立合を要求するに定まつてゐる。

その時、お前はそれを担んでいふがよい。いや、拙者はお弟子達に立合を願ひに來たのではない。直接に大先生に一手合せを、と斯う出るのだ。

先生多少迷惑の色を現すだらうが、立合はないとはいふまい。立合はないといへば卑怯の名を立てられる。——そこで道場の大先生が直接にお前と立合をすべく、道場の眞ん中へ下りて來る。

南龍軒、こゝまで聞いて青くなり、堪らないね、お弟子のホヤ〳〵にだつて齒は立たないのに大先生に出られては、堪らない。

そこに祕傳がある——大先生であれ、小先生であれ、本來劍術を知らないお前が誰に遠慮をする

必要があるまいもの、いつも絲文でする手つきで、斯う竹刀を構へて大先生の前に立つてゐるのだ。

それから先だ。そこまでは人形でも動まるが、それから先が堪るまいではないか、と南龍軒が苦笑する。

友達殿は飽くまで眞面目くさつて、それからが極意なのだ。さうして立合つてゐるうちに、先方が必ず打ち込んで來る。面とか、籠手とか胴とかいつて打ち込んで來る。

南龍軒の曰く、打ち込んで來れば打たれちまふぢやないか、こつちは竹刀の動かし方も知らないんだぜ。

友達殿曰く、さうさ、打たれたのが最後だ。どこでもいゝから打たれたと思つたら、お前は竹刀を前に置いて、遙か後へ飛びしさり、兩手をついて平伏し、恐れ入りました、われ〳〵の遠く及ぶところではござらぬといつて、可愛にお辭儀をしてしまふのだ。

成程――。

さうすれば、先方の大先生、いや勝負は時の運とか何とかいつて、こちらを勞はつた上に武藝者は相見互といふやうなわけで、一晩とめて、その上に草鞋錢をくれて立たせてくれるに相違ない。芳名錄を取り出して先生に記名して貰ふ。その芳名錄を携へて次から次の道場を同じ手で渡つて歩けば、日本全國大威張りで、痛い思ひをせずに武者修行が出來るではないか。

「成程」

南龍軒は首をひねつて、暫くその大名案を考へ込んでゐたが、ハタと膝を打つて――、

面白い、これは一つやつて見よう、出來さうだ。出來ない筈はない理窟だ。

そこでこの男はデロレンをやめて、速成の武者修行となる。形の如く堂々たる武者修行のいでたち成つて、神戸から江戸へ向けて發足。

名乘も藝名そのまゝの山本南龍軒で、手初めに大阪の二三道場でやつて見ると成績が極めてよい。全く先方が、誘へ通りに出てくれる。一つ打たれさへすれば萬事が解決して、至つて鄭重なもてなしで餞別が貰へる。

そこには、また道場の先生の妙な心理作用があつて、この見識の高い風來の堂々たる武者修行者弟子を眼中に置かず驀進に師匠に戰ひを挑んで來る修行者の手のうちは測り難いから、勝たぬまでも見苦しからぬ負を取らねば門弟への手前もあるといふ苦心が潜むところへ、意外にも竹刀を動かして見れば簡單な勝を得た上に、先方が非常な謙遜の體を示すのだから悪い心持はしない。

そこで、何處へ行つても通りがよくなる。

部厚の芳名錄には、一流の道場主が續々と名前を書いてくれるから、次に訪ねられた道場ではその連名だけで脅かされる。

斯くて東海道を經て、各道場といふ道場を經めぐつて江戸に著いたのは、國を出てから二年目、

さしも部厚の芳名錄も、殆ど有名なる劍客の名を以て埋められた。

天下のお膝元へ來ても、先生その手で行かうとする。その手で行くより術はあるまいが、一旦味を占めて見ると忘れられないらしい。事實、こんな面白い商賣はないと思つてゐる。

さうして、江戸麹町番町の三宅三郎の道場へ來た。

この三宅といふ人は心形刀流の達人で、旗本の一人ではあり、邸内に盛んなる道場を開いて江戸屈指の名を得てゐる。

そこへ臆面もなく訪れて來た山本南龍軒。例の廿七貫を支調に横付にして頼まうといふ。門弟が應接に出ると例によつて、拙者は諸國武者修行の者でござるが當道場の先生にも是非一本のお手合せが願ひたい――これまで各地遍歷の間、これ〳〵の先生に皆親しくお立合を願つてゐる――と例の芳名錄を取出して門弟に示すと、それには各地歷々の劍客が皆麗々と自筆の署名をしてゐるから、これは大變な者が舞ひ込んだと先生に取り次ぐ。道場主、三宅三郎もそれは容易ならぬ客、粗忽なきやうに通して置けと、道場へ案内させて後、急に使を走らせて門人のうち、優れたるもの十餘人を呼び集める。

そこで三宅氏が道場へ立ち出でゝ南龍軒に挨拶があつて後、これも例によつて先づ門弟のうち二三とお立合ひ下さるやうにと申し入れると南龍軒は頭を振つて、仰せではござるが、拙者事、武者修行の爲めに國を出でゝより今日まで二年有餘。未だ曾て道場の門弟方と試合をしたことがない。直々に大先生とのみお手合せを願つて來た。然るに當道場に限つてその例を破ることは、この芳名錄の手前如何にも迷惑致すゆゑに、是非々々、大先生とのお手合せが願ひたい――と何時もやる手で、二年餘り熟練し切つた口調で落つき拂つて申し述べる。

さういはれて見ると、三宅先生もそれを斷る譯には行かない。是非なく、それでは拙者がお相手を致すでござらう。

そこで、三宅先生が仕度をして、南龍軒に立向ふ。

南龍軒は竹刀を正眼につける。三宅先生も同じく正眼。

竹刀をつけて見て三宅三郎が舌を卷いて感心したのは、敢て氣怯れがした譯でも何でもない！事實、南龍軒なるものゝ構へ方は舌を卷いて感心するより外はないのであつた。

最初の手合せで、然も江戸に一流の名ある道場の主人公その人を敵に取りながら、その敵を眼中に置かず、餘裕綽々たるその態度。構へ方に一點の隙を見出すことが出來ない。

事實、三宅三郎も今日までにこれほどの名人を見たことがない。心中、甚だ焦ることあつて、頻に術を施さんとして、態と隙を見せるが、先方の泰然自若たること有るが如く無きが如く、少しも此方の手には乘らない。

勝たうと思へばこそ、負けまいと思へばこそ、そこに慘憺たる苦心もあるが、最初から負けようと思つて掛る立合には敵といふものがない。しかもその負けることだけに二年有餘の修行を積ん

でゐる武藝者といふものは、蓋し、天下に二人となからう！餘裕綽々たるもその道理である。

この意味に於いて南龍軒は、確に無双の名人である。

至極の充實は至極の空虛と一致する。

これを笑ふ者は、矢張り劍道の極意を語るに足りない。道といふものゝ極意も判るまい。

さて、三宅三郎は、どうにもかうにも、南龍軒の手の内が判らないが、さうかといつて、劍術といふものは、竹刀を持つて突つ立つてゐるだけのものではない、ものゝ半時も焦り拔いた三宅氏も、これでは果てしがないと思ひ切つて、彼れが竹刀の先を輕く拂つて面を打ち込んで見た。

「參つた！」

その瞬間、南龍軒はもう竹刀を下に置いて、自分は遙に下に下がつて平伏してゐる。三宅氏は呆れて了つた。

事實、今のは面でも何でもありはしない。面金に障つたかどうかすらも怪しいのに、それを先方は鮮かに受取つて了つたのだから、三宅氏が呆れたのも無理はない。呆れたといふよりも寧ろ恥入つて了つたのだ。自分がこの大名人の爲めに馬鹿にされ子供扱にされて了つたやうに思はれるから、顏から火の出る程に恥かしくなつた。

「山本先生、たゞ今のは、ほんの擦り面。是非、もう一度お立合を願ひたい」

然るに相手の大名人は謙遜を極めたもので、

「いや〳〵恐れ入つた先生のお腕前。我々風情の遠く及ぶ所にあらず」

といつて、どうしても立合はない。

「では、門弟共へ是非一手の御教授を……」

と願つて見たが、先生に及ばざる以上御門弟衆とお手合せには及ばずと、これも固く辭退す〻止むを得ず、三宅氏は數名の門弟と共に、この大名人を招待して宴を張る。

その席上、改めて三宅氏は南龍軒に向ひ、何人について學ばれしや、流儀の系統等を相訊ねると——南龍軒先生。極めて無邪氣正直に一切をブチまけて了つた。

これを聞いた三宅氏は胸をうつて三嘆し、今にして無心の有心に勝るの神髓を知り得たりといつて喜ぶ。

道庵先生、この型を行つて見たいのだらうが、さう〳〵柳の下に鰌はゐまい。

二十

田山白雲は傳馬町の鱗屋といふ古本屋の前へブラリとやつて來て、

「何か面白い本はないかね？」

「左樣、面白い本は……」

「面白い本があつたら一つ見せて貰ひたい」

「あゝ、左樣、左樣。面白いものを少し許り纏めて手に入れましたからお目に掛けませう」
「面白いのを纏めて手に入れたのは結構。見せて貰ひたい」
白雲が腰を掛けると、亭主は書物を山のやうに持ち出し
「中には相當に面白いものがございます」
「どれ……」
「古いのには、年一年面白いものが減つて參りますのに、新しい方は、なか〳〵面白いものが出ませんので困ります」
客が面白い本はないかと云つたので、亭主は面白い本があるといふ。お互に面白づくで商賣をしてゐるやうです。
この時分には現代のやうに、雜誌學問の青二才までが、興味中心だの藝術本位だのと、齒の浮くやうなことを云はなかつた時代ですから、面白いといふ言語の中には、凡て注目に値する程のものを包含してゐたのでせう。ですから飜譯すると、
「何か注目に値する書物はないかね？」
「ございます。なか〳〵掘出し物がございます」
といふ程度の意味のものでせう。
されば佐藤一齋の講義が面白かつたといふ場合もあれば、曲亭主人の小說が面白かつたといふ場

合もあります。」
白雲が今求める面白い本といふのは、さし當り著手した洋學の初步に關する東洋の美術よりは西洋の美術に關して何か特殊の知識を與へられるやうな書物はないかと尋ねた意味でありませう。
併し、亭主の取り出して示した山のやうな書物は、さういつた意味の面白い書物ではありませんでした。
「端本が多うございますけれども、これだけ種類を集めますのが骨でございます」
「こりや大變だ」
山の如く持出された書物を、白雲は横目に見て、驚いた顏をしたが、手には取らうとしません。
その書物といふのは白雲の求むるところのものとは違つて舊來あり來たりの赤本、黑本、金平本、黄表紙、栖落本、草双紙、合卷物、讀本といつた種類のものを混で一手に集めて來たものらしいから、白雲は、
「こりや大變だ」
といつて手に觸れず、
「洋學の本はないかね。横文字の……」
「へえ、洋學の方でございますか、左樣でございます。華英通語はこの間差上げましたかしら……」

「うむ、あれは貰つたよ」
「では、築城と石炭の事を書いた飜譯書が二三册ございますが……」
「築城と石炭――それは少し困る。何か外に向ふの歴史、風俗、繪の事などが判るといつたやうな書物はないかい」
「左樣――」
亭主はあれかこれかと店と書棚を見廻し、
「こゝに一册、唐人往來といふのがございます……」
「何だい、それは――」
「この通り寫本でございますが。これに中々、あちらの事が詳しく書いてあつて面白いと皆樣が仰有います」
「どれ――」
田山白雲は二十枚綴ばかりの寫本を亭主の手から受取りました。
「唐人往來――誰が書いたんだ」
「どなたがお書きになりましたか、なか〳〵あちらの事に詳しいお方がお書きになつて出版はなさらずに、かうして寫本で諸方へ分けてお上げになつたのでございます」
「江戸、鐵砲洲某稿としてある。面白さうだ」

白雲はそれを買ひ求める氣になりました。
白雲はその書物を買つて來て兩國橋の假寓へ歸り、卽日その書物を讀み初めましたが、實に、こんな面白い本はないと思ひました。
彼れは面白い本を求めて求め得たのです――といつても、それは自分の求める西洋の美術知識の事なんぞは一言も書いてはありませんが、僅の小册子の面に、西洋といふものゝ輪廓を描いて人に知らしめる上には、こんな痒ゆい處へ手の屆く本はないと思ひました。
何故、もつと早く、こんな面白い本を讀まなかつたのだらう。尤も、出版はされず、寫本として知人に配布された丈けの書物だといふ事だから、今まで自分の眼に觸れなかつたのも止むを得ないが、今讀んでも讀むことの遲かつたのを悔ゆるばかりです。
第一、その文章からして從來の漢學臭味を脫してゐる上に、平易明快で　貝原益軒かもう少し大きく明るくしたやうな書き振りが頭に殘ります。
それにしても著者は何者。署名はなくて、たゞ、「江戸、鐵砲洲某稿」としてある。當代に名だたる洋學者の筆のすさびだらうとは思はれますが、誰とは當りがつきません。假令ばその文章は、

　先年、亞米利加合衆國よりペルリといへる船大將を江戸へ差遣はし、日本は昔より外國と付合なき國なれども……

といふ書き出しで、諸外國と交誼を修し通商貿易を求めに來るのを。

日本國中の學者達は勿論、餘り物知りでなき人までも、何か外國人は日本國を取りにでも來たやうに、鎖國の、攘夷の、異國船は日本海へ寄せ付けぬ。唐人へは日本の地を踏ませぬなど、仰山に唱へ觸らし、間には外國人を暗打ちにするものなど出來て、今のやうに人氣の騰ぎ立つは唯内の騒動許りでない。斯く人心の片意地なるは世間へ對しても不外聞至極ならずや、元來何の惡意もなく、一銃に異人を嫌ひ、異人が來ては日本の爲めにならぬと思ひ込みたる輩は、自分には知らぬ事ながら我が生國の恥辱を世間一般に吹聽するも同樣にして、氣の毒千萬なれば、この人々の爲め聊か辯解すべし：

といふ見識は確にその時代の一般は勿論學者の頭を拔いてゐる。

それから世界の廣さを一里坪にして八百四十萬坪あり、これを五に分ち五大洲といふ、その五大洲中ヨーロッパの文明が世界に冠たることを說き、その文明國を夷狄視することの淺見より支那の覆轍を說いての敎へ方も要領を得てゐる。

次に右五大洲中八百四十萬坪の中に住む人口をほぼ十億と數へ、そのうち、日本人に數凡そ三千萬あるゆゑに、世界中の人數と比例すれば九十七人と三人の割合に過ぎないといふ數字も大ざつぱながら親切で、當時の粗雜にして空疎なる人の頭に印象を強くして成程と思はせ、

さて何れの國にもせよ、百人の人あり。その中九十七人は睦じく付合ひ往來するところへ三人は天から降りたるものゝやう氣高く構へ、別に仲間を結んで三人の外は一切交りを絶ち、

分らぬ理窟をいひながら自分達の風に合はぬとて畜生同樣に取扱はんとせばそれにて濟むべきや、先づ世の中の笑はれものなるべし。

も確に背繫に當つてゐる。

それより外國と貿易をすれば無用の物が殖えて有用の物を取られて了ふといふ心配の愚な事を解釋し、日本國中の學者先生が大概殘らず海防策といふものを書いて頭から外國人を盜人に見てかゝるの陋を笑ひ、最後には、

されば地圖でこそ日本は世界の三百分の一つばかりに見る影もなき小國のやう思はるれどもその實は全世界を三十にわりてその一分を押領するほどの人數を持てる國なり、まして產物は澤山食物は勿論……

と土地は小なれども人口の大なることに自信を持たせて、盛んにヨーロッパ文明を取入れることを主張してゐる論旨は濶大にして、精神は親切に、文章は例の痒ゆいところへ手の屆くやうです。

田山白雲がその頃では最新版に屬する「西洋事情」を讀み出したのは、それから間もない時であります。

前の匿名の寫本「唐人往來」もこの新刊の「西洋事情」も等しく福澤諭吉の著述であること申すまでもありません。

當時の凡ての階級がこれ等の著作によつて教へられた通り、田山白雲も殆ど革命的の知識を與へられました。

白雲思ふやう、今まで、多少西洋の飜譯書も見たが、それは兵術家は兵術のために、醫者は醫者のために、語學者は語學のために著はされたものゝみで、この人の著作のやうに、包括的に西洋といふものゝ全部を見せてくれた人はない。しかもその見せてくれぶりが、雲霧を拂つて白日を示すやうに鮮かなものである。今までの單に鉛管を引いてタラ〳〵と水を流してくれるに過ぎなかつたのが、この人のみが巨大なる鐵管を以て、滔々と瀧の如くに日本へ向けて西洋文明の水を落してくれる樣だ。

田山白雲も、この書物を通して、そゞろに巨人の面影を認めずにはゐられなかつたやうです。

事實、幕末明治はあれだけの劃時代の時でありながら、その全體を代表する人物を求める日になると茫然自失する。

西郷の功大なりと雖も、かれ一人でこの時代を代表すること秀吉の如く家康の如く尊氏の如くありはしない。各藩の各種の人傑、おの〳〵一人一役を以て王政維新といふ事業に參加してゐるまでゞ、維新が中心となつて人物が主とならないのはあの時代の特色といへる——若し、強ひて象徴的に幕末維新といふものを代表する巨人を選定せよとならば、それは西郷よりも大久保よりも木戸よりも、福澤諭吉が相應しからう。

田山白雲も、そこまでは考へなかつたらうがこの巨人が時代の渇望に向つて仕かけてくれた鐵管の水の豐富なるに驚喜もし、詠嘆もせずには居られなかつたらうと思はれる。

だが併し、驚喜も詠嘆もするはしたけれど、まだ物足らないところはいくらもある。第一、自分が現在識ねてゐるこの不可解の西洋書の内容においても外形についても、「西洋事情」は少しも說明も暗示も與へてくれないではないか。それのみか、この間房州へ行つた時、支那の少年金推が說いて駒井甚三郎ほどのものが解釋しきれなかつた耶蘇の教へといふものもこの書物が是とも非とも教へてゐないではないか——その外、白雲はまだ風馬牛ではあるが、その耶蘇の教へと並んで西洋文明の血脈をなしてゐるといふギリシヤ系統の學問についても、この書物は少しも力を入れてゐないではないか。

西洋といふものゝ建物の目下の全體を見せてくれるためには、さほど驚喜すべく詠嘆もすべき書物でありながら、內容に立ち入ると物足らないこと夥しい——と白雲は漸くそれに氣が付きました。廣く知るよりは深く見たいものだと白雲が感じたかも知れません。

兎も角も、あちらの書物を讀まねばならぬ。直接にあちらの書物が讀めるやうにならなければならぬ——との慾求は、これ等の著述を讀むことによつて、漸く強くされて行くことは疑ふべくもありません。

よつて、白雲はまた一層の熱心を以て、例の初步の語學書と首つ引——「蕃英通語」によつて紙

をパーベルと知り、繪をピキチユールと知り、繪相師をボールトレート・ペーヌタル、筆がペンシル、顔がフエース、頭がヘツト、足がフツトと覺えて行つた程度では滿足が出來ない。

然るべき塾へ入門し、然るべき師につくといふことはこの種類の人間には、却々おつくうなもの

――

ところで白雲が再び駒井甚三郎のもとへ行かうといふ氣になりました。

切支丹を描いて觀音に納めるといふやうな註文は本氣では聞けないが、兎に角、相當たものを描いて置いて房州へ押渡らうといふ氣を起しました。

二十一

田山白雲はお角のために何を描いて與へやうかと思案しました。

頼まれた題目の非常識は、もとより問題ではないが、それでも自分の良心が滿足するほどのものを描いて與へなければならぬといふ義務を感じました。この場合、その題目と出來榮が、頼んだ人の氣に入らうと、入るまいと、自分の力で相應と認めるものをさへ描いて殘して置けば、主人の歸りを待つまでもなく、例によつて白雲悠々の旅へ飛び立つには何のさはりも無い事だ。

さて、何を描かう、選擇を自由にすれば却つて題目の取捨に迷ふ。

兎も角も、目標は淺草寺境内の額面である。從來のものゝ中へ割込んで遜色のないもの、それを頭に置いて、題目の選擇にとりかゝつて見たが、それが案外骨が折れます。

容齋の向ふを張つて辨慶でも描かうかしら、それも氣が進まない。景清は、あれは上野の清水堂にある。いつそ趣をかへて江戸風俗の美人畫でも寫して見やうか、では浮世繪の店借をするやうだ。

そこで、白雲は再三、淺草觀音の額面を實地見學に行きましたが、どうも然るべき題目を發見することが出來ません。

あの日の夕方、あれかこれかと考へながら立ち戻つて格子戸を開けると、そこに不意に眼を眩惑されるものを見せられました。

座敷では今、清澄の茂太郎が踊つてゐる處であります。元祿模樣の派手な襠裃を長く疊に引いて右の手には鈴を持ち、左の手では御幣を高く揭げながら、例の般若の面を冠つて座敷の中を頻に踊つてゐる處でありました。

それが白雲の歸つたのに氣がつくと　大慌てに慌てゝ、鈴を火鉢の隅に置くやら、御幣を神棚へ載せやうとするやら、漸く般若の面を取つて、

「お歸りなさい」

長い襠裃の裾を引いたまゝで挨拶しました。

「茂坊」

「はい」
「もう一度、今の姿で踊つてごらん」
「御免なさい、叔父さん、一人であんまり詰らなかつたもんだから……」
「いゝから、お前、もう一遍、今の姿で……その面を冠つて　鈴と御幣を持つて、今踊つた通りに、踊つてわしに見せておくれ」
「御免なさい、もうしませんから」
「さうぢやない、お前の今踊つた姿を、是非もう一度見たいんだ。それを繪に取つて置きたいと思ふんだよ。叱るんぢやない、頼むんだよ」
「ぢや、やつて見ませうか」
「やつて御覽」
そこで、茂太郎は再び面を冠つて、兩手に鈴と御幣とを持ち、襠襠を長く引いて、座敷一ぱいに踊り初めました。これを座敷へ上つた白雲は立ちながら目も放さずに眺め入りました。
この踊りは一種不思議な踊りであります。仕舞のやうな處もあり、かんなぎのやうな所作もあり、さうかと思へば神樂拍子のやうに崩れて了ふ處もあつて、何とも名狀の出來ない踊りだが、それでも、その變化の間に一つのリズムといふものがあつて陶然として醉はしむるものがある。
無論、この不思議な兒童の、即興の出鱈目の踊り方には違ひないが、その出鱈目のうちにリズムがあるから、白雲は却つてそれを本格の踊りよりも面白いと思ひました。
さうしてゐるうちに、白雲が膝を打つて
「これだ」
といひました。――白雲もまた、最初からこの般若の面が凡作ではないと見てゐたのですが、この時になつてはたと思ひ當りました。
これこそ與へられた絶好な畫題だ。その不思議な踊り全體のリズムが人を妙に陶醉の境へ持つて行くのみならず、仔細に見ると、無心な子供が大人の長い着物を引きずつてゐる處にまた無限の趣味がある。さうして、鈴と御幣とを無雜作に小さな兩の手で振り翳した所に、何ともいへないたぐまざるの妙味がある。
若しそれ、その冠つた般若の面に至つては、白雲が日頃から問題にしてゐた名作で、銘こそないが、その作物の非凡なる、何處からどうしてこの少年が手に入れたのか。さうして朝から晩まで食事の時でも膝を放さないで大切がつてゐるのが訝しいほどである。白雲は、何時か、その面を取つてつく〴〵と作と年代等を研究して見ようと思つてゐたそれでありました。今見ると、その名作の面影がつく〴〵と人に迫るものがある。
體のすべてが無我無心に出來てゐるのに、面そのものだけが呪ひと憎惡とを集めた稀代の名作になつてゐる。

これこそ求めても得られない絶好な畫題だと白雲が意氣込みました。

この白熱の興味が、遂に白雲をして五日の間に「妖童般若」の大額を完成させて了ひました。その作たる、われなから見とれるほどの出來と見ましたけれど、白雲はそれに愛惜するの暇を與へずに、早くもこゝを出立つるの用意を整へて了ひ、

「茂坊、さあ、今日は房州へ立つんだぞ」

「え、房州へですか、叔父さん、今日」

「さうだよ」

「房州といふのは、あの叔父さん、鋸山のある日本寺の、お嬢さんのゐる房州なの」

「さうだとも」

「あたいを、その房州へ連れて行つてくれるの、今日！」

「うむ」

「ぢや、あたい、久し振で、あのお嬢さんに會へるんだ」

「會はしてやるとも」

「ほんとに夢のやうね、叔父さん、若しかして清澄のお寺へ入れちまふんぢやない？」

「そんな事があるものか、さあ行かう」

「あゝ、うれしい」

少年は欣然として勇み立ちました。

この出立はむしろ出奔に近い。白雲ほどのものがどうして斯うも慌しいのかと怪しまれるほどに大急ぎで、繪が成ると共に裝ひを整へ、その場で置き手紙を一本書き——その手紙には、二枚の西洋畫を特別に大切に保存して置くやうに書き殘したゞけで自分の作の事は書かず。最初は茂太郎の手を引いて外へ出たが、少し歩くともどかしさうに茂太郎を取つて、自分の背中に背負込んでさつさと歩み去りました。

江戸橋の岸、木更津船の船つきの場所に茂太郎を十文字に背負つて、空を眺めて立つ白雲。

澄み渡つた秋の空に白い雲が悠々と遊んでゐるのを眺めた時は一味の旅愁といふやうなものが骨にまで浸み入るのを感じました。

本當に自分こそ白雲そのものゝやうな生涯。

それでも旅から旅へうつる瞬間には、どうしてもこの哀愁を逃れることが出來ない、哀愁に伴ふて起る愛惜の念が、流轉きはまり無き人生に絲目をつける。

妻子を顧みないのは、妻子に對して自分の愛惜が有り過ぎるからだと白雲はその時に何時もさう思ひます。

愛惜が有つてはいけない。妻子眷族にも愛惜があつてはいけない。自己の作物にも愛惜があつてはいけない愛惜の一念ほど自由放浪の精神を妨げるものは無いと、何時もそれを感じながら旅か